

米原市埋蔵文化財調査報告書 第5集

長比城跡・須川山砦跡総合調査報告書

2022年3月

米原市教育委員会



たけくらべじょう すがわやまとりで
長比城跡・須川山砦跡総合調査報告書

2022年3月

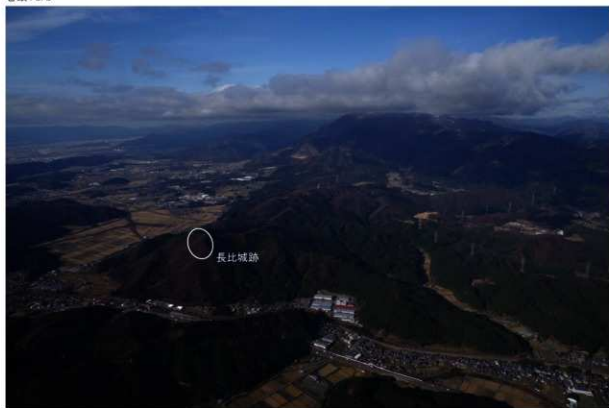
米原市教育委員会



1 長比城跡・須川山砦跡航空写真 北西から



2 長比城跡・須川山砦跡航空写真 南西から



1 長比城跡・須川山砦跡航空写真 南東から



2 長比城跡・須川山砦跡航空写真 北東から



1 長比城跡从小谷山を望む



2 長比城跡から金華山を望む



1 長比城跡西曲輪 南虎口完掘状況 北から



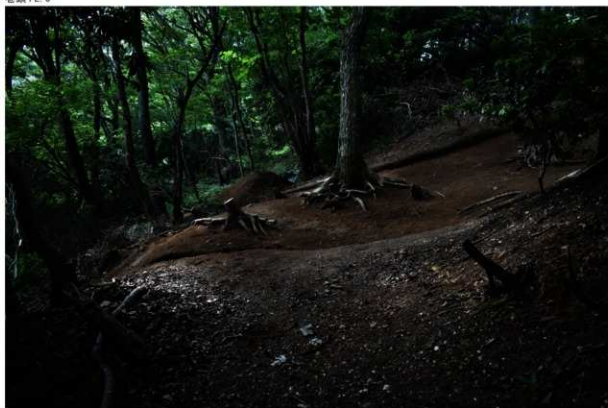
2 長比城跡西曲輪 土塁断面 北東から



1 長比城跡東曲輪 南虎口完掘状況 南から



2 長比城跡東曲輪 土塁検出状況 北西から



1 長比城跡東曲輪 南虎口完掘状況 東から



2 長比城跡東曲輪 南虎口完掘状況 南西から



1 須川山砦跡 完掘状況 南から



2 須川山砦跡 土塁遺構面検出状況 西から



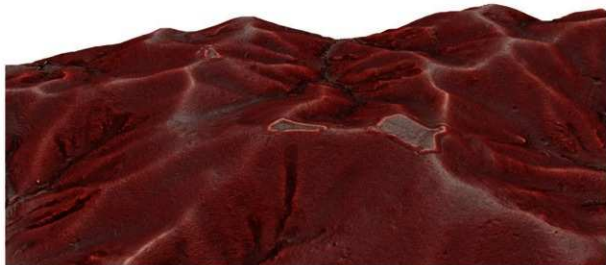
1 須川山砦跡 土塁遺構面検出状況 北西から



2 須川山砦跡 土塁断面 南西から



1 長比城跡・須川山砦跡 赤色立体地図



1 長比城跡・須川山砦跡 赤色立体地図三次元画像



2 長比城跡 赤色立体地図三次元画像

序 文

長比城跡・須川山砦跡は滋賀県米原市と岐阜県不破郡関ヶ原町にまたがる標高約390mの野瀬山に築かれた戦国時代の山城です。

元亀元年(1570)、織田信長の近江侵攻に備え、北近江の大名である浅井長政が越前朝倉氏の協力を得て築城しました。しかし、竹中半兵衛の調略により、城主である堀次郎とその家臣である樋口三郎兵衛は織田方に内応したため、戦うことなく廃城となりました。その後、信長は北近江に侵攻し、姉川合戦や小谷城攻めにつながっていくことになるのです。

このように、長比城跡・須川山砦跡は我が国の戦国時代の歴史を理解する上で大変重要な遺跡であることから、米原市は、この城跡をより良好な状態で保存し、次の世代へ伝えるべく、国の史跡指定を目指して考古学、城郭史、文献史学の各分野の専門家に御指導を賜りながら、令和元年度から総合調査を実施してまいりました。

今回の総合調査により、各分野において長比城跡・須川山砦跡の歴史的価値を明らかにすることができたと考えます。本報告書が今後の長比城跡・須川山砦跡の適切な保存と活用、ひいては関ヶ原町・米原市の地域振興やまちづくりの活性化につながることを期待します。

最後になりましたが、この調査に関わり多くの御指導、御支援を賜りました長比城跡調査整備委員会委員や、文化庁、滋賀県文化財保護課をはじめ関係の皆様に対しまして厚くお礼を申し上げます。そして、調査に御理解、御協力を賜りました地権者の方々に心から感謝申し上げますとともに、今後の更なる御支援をお願いし、本報告書発刊の挨拶とします。

令和4年3月25日

米原市教育長 馬 淵 均

例 言

- 1 本報告書は、滋賀県米原市柏原・長久寺・須川および岐阜県不破郡関ケ原町今須に所在する長比城跡、須川山砦跡の内容や範囲を把握するために実施した総合調査の報告書である。
- 2 本書で使用する名称について、当該遺跡は埋蔵文化財包蔵地「長比砦跡」として周知されており、また一部の研究者によって「野瀬山城跡」の名称が使用されているが、現在、刊行物等では一般的に「長比城跡」の名称が使用されていることから、本報告書では「長比城跡」の名称を使用する。
- 3 調査に当たっては、長比城跡調査整備委員会を組織し、令和元年度から令和3年度にかけて国庫補助金（名称：国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金、事業名：市内遺跡発掘調査等）の交付を受けて実施した。
- 4 調査に当たっては、文化庁文化財第二課、滋賀県文化財保護課に指導、助言を得た。
- 5 調査は、調査整備委員会の御指導の下、米原市教育委員会が実施した。調査の体制は下記のとおりである。

米原市教育委員会 [令和元年度～令和2年度]

教 育 長 山本 太一
 教 育 部 長 上村 浩
 歴史文化財保護課長 桂田 峰男
 課 長 補 佐 吉田 豊 (令和2年度から主席参事)
 主 幹 高橋 順之
 主 事 小野 航 (令和2年度から主任)
 主 事 石田 雄士 (令和2年度から主任)
 柏原宿歴史館館長 谷口 徹

米原市教育委員会 [令和3年度]

教 育 長 馬淵 均
 教 育 部 長 上村 浩
 生涯学習課長 梶田 悟
 課 長 補 佐 澤 恵子
 主 幹 高橋 順之
 主 任 小野 航
 主 任 石田 雄士
 柏原宿歴史館館長 谷口 徹

調査補助員 松原 草太 (元：滋賀県立大学 学生、現：静岡市文化財課 職員)

滝木 時玄、幸田 朱加、吉田 実華 (滋賀県立大学 学生)

発掘作業員 間惣 正義、太田 保、小川 道夫、奥原 仁司、川瀬 久雄、川村 武雄、北野 和男、宿谷 正夫、竹中 健一、田邊 幸信、谷口 登、辻 和師、筒井 忠夫、中森 喜平、仁木 秀雄、西村 孝彦、林 繁喜、廣田 明、前川 博貴、増田 秀夫、松浦 昌宏、森 義弘 (米原市シルバー人材センター)

- 6 調査および本書の作成に当たっては、下記の方々および機関の指導と協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。

石川 浩治、市田まち子、井戸 梨愛、伊東 涼太、岩橋 隆浩、上垣 幸徳、牛谷 好伸、宇野富美雄、大崎 哲人、大崎 康文、太田 浩司、岡本 健、小野木 学、菊谷菜々子、川島 行彦、木戸 雅寿、金 宇大、小谷 徳彦、佐伯 哲也、佐藤 佑樹、柴田 慎平、須田 勇人、田井中洋介、高木久之郎、高田 徹、高橋 成計、寺岡 光三、富田真一郎

内藤 千温、中井 均、難波 真哉、野木 雄大、長谷川博美、畑中 英二、早川 圭
 福永 清治、細川 修平、堀井 靖枝、増山 政昭、水野 和雄、村田 修三、山上 雅弘
 山本 尊敏、山本 孝雄、山本 芳文、横井 香織（五十音順、敬称略）
 文化庁、滋賀県文化財保護課、岐阜県文化伝承課、長浜市歴史遺産課、関ヶ原町地域振興課
 柏原自治会、須川自治会（順不同）

- 7 発掘調査および測量調査に当たっては下記の団体に委託した。
 アジア航測株式会社（航空レーザ測量および赤色立体地図作成、行政界杭の設置）
 米原市シルバー人材センター（発掘作業）
- 8 本文中に記した標高は、東京湾平均海面値（T.P.）からのプラス値、単位はメートルである。（T.P+の表記は省略）
- 9 使用した測地系は世界測地系に基づき、平面直角座標系は第IV系、単位はメートルである。
- 10 遺構の写真撮影については、石田が担当したほか、航空写真はアジア航測株式会社に委託した。
- 11 本書の執筆は、第8章第1節を高田徹氏から、第8章第2節を太田浩司氏から、第8章第3節を中井均氏から、第8章第4節を水野和雄氏から玉稿を賜った。その他については、第2章第1～2節、3節（1）を松原が担当し、そのほかは石田が担当した。なお、編集は石田が担当した。
- 12 調査記録は、米原市教育委員会で保管している。

長比城跡・須川山砦跡総合調査報告書

目次

第1章	調査の経緯・体制	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の体制と組織	2
第3節	事業および委員会の経過	4
第2章	位置と環境	
第1節	地理的環境	7
第2節	歴史的環境	7
第3節	姉川・小谷合戦の歴史	10
第3章	既往の調査	
第1節	大正～昭和初期の調査	16
第2節	田山東町・滋賀県教育委員会による調査	16
第3節	研究の進展	16
第4節	研究史のまとめと課題	17
第4章	姉川・小谷合戦関連連城郭群の構成と本質的価値	
第1節	姉川・小谷合戦関連連城郭群の構成	20
第2節	姉川・小谷合戦関連連城郭群の本質的価値	23
第5章	文献調査の成果	
第1節	文献史料	24
第2節	絵図資料	26
第3節	まとめ	26
第6章	測量調査の成果	
第1節	航空レーザ計測および赤色立体地図の作成	28
第2節	遺構の分布と構造	29
第3節	登城道	37
第4節	まとめ	37

第7章 発掘調査の成果	
第1節 調査の目的と方法	41
第2節 長比城跡の調査成果	41
第3節 須川山砦跡の調査成果	53
第4節 まとめ	63
第8章 考古学的・歴史学的分析	
第1節 城郭構造からみた「姉川・小谷合戦関連城郭群」について	65
第2節 文献史料からみた「姉川・小谷合戦関連城郭群」について	86
第3節 長比城跡と須川山砦跡の価値	99
第4節 長比城跡と須川山砦跡の課題と保存・活用について	105
第9章 総括	
第1節 長比城跡・須川山砦跡の総合調査の成果	108
第2節 長比城跡・須川山砦跡の本質的価値について	110
第3節 本質的価値の保存と継承に向けて	111

長比城・須川山砦関連史資料編

報告書抄録

表目次

表1 「結川・小谷合戦関連城郭群」一覧	1
表2 周辺道路一覧表	12
表3 結川・小谷合戦関連城郭群の特徴	98

挿図目次

図1 長比城跡・須川山砦跡 位置図	8
図2 長比城跡・須川山砦跡 周辺小字図	9
図3 周辺の道路分布図	11
図4 周辺の城郭分布図	14
図5 長比城跡・須川山砦跡 縄張り図 (S=1/5000)	19
図6 御合戦跡縮図	26
図7 中山道分間縮図	27
図8 中山道分間縮図 トレース図	27
図9 航空レーザ測量の範囲	28
図10 長比城跡・須川山砦跡 赤色立体地図	30
図11 長比城跡・須川山砦跡 赤色立体地図	31
図12 長比城跡・須川山砦跡 遺構跡	32
図13 長比城跡西面輪造構図(上)、断面図(下)	33
図14 長比城跡東面輪造構図(右上)、断面図(左上・下)	34
図15 須川山砦跡造構図(左上)、断面図(右上・下)	36
図16 主要街道位置図	39
図17 長比城跡・須川山砦跡 想定登城ルート	40
図18 長比城西面輪トレンチ配置図(上)、長比城跡東面輪トレンチ配置図(下)	42
図19 長比城跡西面輪 第1トレンチ平面図	44
図20 長比城跡西面輪 第1トレンチ断面図	45・46
図21 長比城跡東面輪 平面図	47・48
図22 長比城跡東面輪 第2トレンチ平面図、断面図	49・50
図23 長比城跡東面輪 第3トレンチ平面図、断面図	51
図24 東面輪南虎口の動線視式図	53
図25 須川山砦跡 トレンチ配置図	55
図26 須川山砦跡 遺構平面図	56
図27 須川山砦跡 第4トレンチ平面図、断面図	57
図28 須川山砦跡 第5トレンチ平面図、断面図	58
図29 須川山砦跡 第6トレンチ平面図、断面図	59
図30 須川山砦跡 第7トレンチ平面図、断面図	60
図31 土塁遺構面エレベーション図(上)、現地表面エレベーション図(下)	61
図32 須川山砦 土塁視式図	62

図33 虎口～山麓ハート 視式図	68
図34 街道および城郭群 位置図	68
図35 丁野山城 縄張り図	74
図36 中島城 縄張り図	75
図37 田上山城 縄張り図	78
図38 田部山城 縄張り図	79
図39 山本山城 縄張り図	81
図40 虎御前山城 縄張り図	82
図41 「結川・小谷合戦関連城郭群」と防衛ライン想定図	84
図42 小谷城 縄張り図	86
図43 宇佐山城 位置図	90
図44 太尾山城 縄張り図	100
図45 磯山城 縄張り図	101
図46 葛藤山城 縄張り図	101
図47 上平寺城、赤高石坊 平面図	102
図48 加佐山城 平面図	102
図49 十方寺所在の城 縄張り図	103
図50 長比城跡・須川山砦跡 城域範囲図	109

巻頭図版

巻頭 P. 1

- 1 長比城跡・須川山砦跡航空写真 北西から
- 2 長比城跡・須川山砦跡航空写真 南西から

巻頭 P. 2

- 1 長比城跡・須川山砦跡航空写真 南東から
- 2 長比城跡・須川山砦跡航空写真 北東から

巻頭 P. 3

- 1 長比城跡から小谷山を望む
- 2 長比城跡から金華山を望む

巻頭 P. 4

- 1 長比城跡西面輪 土塁遺構面輪出状況 北から
- 2 長比城跡西面輪 土塁断面 北東から

巻頭 P. 5

- 1 長比城跡東面輪 南虎口完備状況 南から
- 2 長比城跡東面輪 土塁輪出状況 北西から

巻頭 P. 6

- 1 長比城跡東面輪 南虎口完備状況 東から
- 2 長比城跡東面輪 南虎口完備状況 南西から

巻頭 P. 7

- 1 須川山砦跡 完備状況 南から

2 須川山登跡 土塁遺構面輪出状況 西から

巻頭 PL 8

1 須川山登跡 土塁遺構面輪出状況 北西から

2 須川山登跡 土塁遺構面 南西から

巻頭 PL 9

1 長比城跡・須川山登跡 赤色立体地図

巻頭 PL 10

1 長比城跡・須川山登跡 赤色立体地図三次元画像

2 長比城跡 赤色立体地図三次元画像

3 須川山登跡 第3トレンチ 完掘状況 西から

PL 11 1 須川山登跡 第4トレンチ (土塁) 遺構面輪出状況 西から

2 須川山登跡 第4トレンチ (土塁) 遺構面輪出状況 北西から

3 須川山登跡 第4トレンチ (土塁) 遺構面輪出状況 南東から

PL 12 1 須川山登跡 第4トレンチ (土塁) 断ち割り状況 西から

2 須川山登跡 第4トレンチ (土塁) 断ち割り状況 南西から

3 須川山登跡 作業風景

PL 13 1 須川山登跡 第4トレンチ (土塁) 埋め戻し状況 西から

2 須川山登跡 第4トレンチ (土塁) 埋め戻し後の状況 西から

3 須川山登跡 埋め戻し後の状況 南から

PL 14 1 長比城跡 西曲輪 調査前状況 北から

2 長比城跡 西曲輪 第5トレンチ (虎口) 完掘状況 北から

3 長比城跡 西曲輪 サブトレンチ 北東から

PL 15 1 長比城跡 西曲輪 第5トレンチ (南曲輪) 完掘状況 北から

2 長比城跡 西曲輪 第5トレンチ (虎口) 完掘状況 東から

3 長比城跡 西曲輪 第5トレンチ (虎口) 完掘状況 西から

PL 16 1 長比城跡 西曲輪 第5トレンチ (虎口) 完掘状況 南西から

2 長比城跡 西曲輪 第5トレンチ (曲輪) 完掘状況 北西から

3 長比城跡 西曲輪 第5トレンチ (切符) 完掘状況 南西から

PL 17 1 長比城跡 西曲輪 第5トレンチ (切符) 完掘状況 北西から

2 長比城跡 西曲輪 埋め戻し後の状況 北から

3 長比城跡 西曲輪 埋め戻し後の状況 (切符) 南西から

PL 18 1 長比城跡 東曲輪 調査前状況 北から

2 長比城跡 東曲輪 調査前状況 北西から

3 長比城跡 東曲輪 調査前状況 東から

PL 19 1 長比城跡 東曲輪 第6トレンチ 完掘状況 北から

2 長比城跡 東曲輪 第6トレンチ 完掘状況 北西から

3 長比城跡 東曲輪 第6トレンチ サブトレンチ 西から

PL 20 1 長比城跡 東曲輪 第6トレンチ 完掘状況 南から

2 長比城跡 東曲輪 第6トレンチ 完掘状況 南西から

3 長比城跡 東曲輪 第6トレンチ 部室部 北東から

PL 21 1 長比城跡 東曲輪 第6トレンチ 完掘状況 北から

2 長比城跡 東曲輪 第6トレンチ 完掘状況 北西から

3 長比城跡 東曲輪 第6トレンチ サブトレンチ 北西から

PL 22 1 長比城跡 東曲輪 第6トレンチ 完掘状況 南西から

2 長比城跡 東曲輪 第7トレンチ 完掘状況 東から

3 長比城跡 東曲輪 第7トレンチ 完掘状況 西から

PL 23 1 長比城跡 作業風景 南西から

2 長比城跡 東曲輪 第6トレンチ 埋め戻し後の状況 北から

3 長比城跡 東曲輪 第7トレンチ 埋め戻し後の状況 北東から

図版目次

PL 1 1 長比城跡 西曲輪 西から

2 長比城跡 西曲輪 塼型 南西から

3 長比城跡 西曲輪 南虎口 南西から

PL 2 1 長比城跡 西曲輪 南虎口 東から

2 長比城跡 西曲輪 南虎口 北から

3 長比城跡 西曲輪 東虎口 南東から

PL 3 1 長比城跡 西曲輪 東虎口 南西から

2 長比城跡 西曲輪 標柱 北西から

3 長比城跡 東曲輪 北虎口 南西から

PL 4 1 長比城跡 東曲輪 北虎口 東から

2 長比城跡 東曲輪 南虎口 北西から

3 長比城跡 東曲輪 堀切 南から

PL 5 1 長比城跡から柏原宿を望む 北東から

2 須川山登跡 土郭 南から

3 須川山登跡 石碑 北から

PL 6 1 須川山登跡 北虎口 北から

2 須川山登跡 北虎口 南から

3 須川山登跡 堀切 西から

PL 7 1 須川山登跡 塼型 北西から

2 須川山登跡 曲輪 北から

3 須川山登跡 南虎口 南から

PL 8 1 須川山登跡 調査前状況 南から

2 須川山登跡 調査前状況 北から

3 須川山登跡 完掘状況 南から

PL 9 1 須川山登跡 第1トレンチ 完掘状況 南から

2 須川山登跡 第1トレンチ 完掘状況 南西から

3 須川山登跡 第1トレンチ 北壁断面 南から

PL 10 1 須川山登跡 第2トレンチ 完掘状況 南から

2 須川山登跡 第2トレンチ 完掘状況 南西から

第1章 調査の経緯・体制

第1節 調査に至る経緯

長比城跡・須川山砦跡は、滋賀県米原市と岐阜県不破郡関ヶ原町の境にそびえる野瀬山（標高390.93m）に位置する。長比城跡は野瀬山山頂に所在し、須川山砦跡は山頂から北西方向に派生する尾根上に所在している。古くは近江と美濃の国境上に位置し、山麓には主要街道である東山道が通る要衝の地であった。

今回、長比城跡・須川山砦跡の将来的な保存・活用を目的に総合調査を実施することとなったが、この動きの萌芽となったのは、昭和57年から平成4年にかけて滋賀県教育委員会が実施した滋賀県中世城郭分布調査である。この調査によって、長比城跡・須川山砦跡の場所の比定や詳細な縄張り図が提示されたことにより、広く知られるようになった。

その後、平成15年7月30日に文化庁において「中世城館・近世城郭遺跡等の保存に関する検討委員会」が開催され、この委員会において、長比城跡は「姉川・小谷合戦関連城郭群」（表1）の構成要素として位置付けられ、指定に関する諸条件を満たせば全て指定の候補とすることで承認される。ただし、指定の条件として、①測量図、もしくは正確な縄張り図を用意すること。②土地所有者等の同意を得られること。③遺跡群指定の場合は、第1次指定の際に、群としての歴史性を確保できること、の条件が付された⁽¹⁾。のちに、長浜市が主体となって群の中心的構成要素である横山城跡の総合調査が実施され報告書が刊行されたが、指定に向けた動きはなかった。

その後、行政側からの史跡指定に向けた動きはなかったが、長比城跡・須川山砦跡が所在する野瀬山の整備・活用を目的として地元有志が「野瀬山会」を立ち上げ、長年にわたって雑木の伐採や登山道の整備が行われてきた。また、やいと祭保存会主導によるのろし駅伝の参加や自治会による長比城跡・須川山砦跡のトレッキング開催など地道な活動の成果により、柏原・須川自治会において両砦（城）跡の保存・活用の機運が高まっていることから、今回、遺跡の範囲や本質的価値の把握を目的とした総合調査を実施する運びとなった。

また、「中世城館・近世城郭遺跡等の保存に関する検討委員会」開催時には、須川山砦跡は「姉川・小谷合戦関連城郭群」の構成要素に含まれていなかったが、近年の学術研究の進展により、一連の城郭群として評価できる可能性があることから、今回本城郭群における須川山砦跡の位置付けも検討する。

以上の経緯を基に、米原市教育委員会では平成30年度から滋賀県文化財保護課および文化庁と協議を始め、平成31年度に「長比城跡調査整備委員会設置要綱」を制定し、「長比城跡調査整備委員会」を立ち上げ、3か年計画で調査研究事業を進めることとなった。本事業は、長比城跡・須川山砦跡について多角的に調査研究を進めることによって、遺跡の範囲や保有する本質的価値の把握を目的としたものである。

註

- (1) 「横山城跡等の史跡取り組み状況について情報交換」資料（平成21年5月20日）

テーマ	遺跡名	所在地
姉川・小谷合戦関連城郭群	長比城跡	滋賀県米原市柏原・長久寺、岐阜県不破郡関ヶ原町今須
	横山城跡および関連遺跡	滋賀県米原市村居田・烏輪・朝日、滋賀県長浜市堀部町・石田町
	鹿御前山城跡	滋賀県長浜市湖北町河毛・中野町
	山本山城跡	滋賀県長浜市湖北町山本
	丁野山城跡	滋賀県長浜市小谷丁野町・湖北町山脇
	中島城跡	滋賀県長浜市小谷丁野町
磯野山城跡	滋賀県長浜市高月町磯野	

表1 「姉川・小谷合戦関連城郭群」一覧

第2節 調査の体制と組織

長比城跡・須川山砦跡は、以前から多くの城郭研究者に注目されてきた城跡である。その城跡について、より本格的な学術的評価を行うために、文化庁文化財第二課および滋賀県文化財保護課の指導の下、米原市教育委員会歴史文化財保護課（現：生涯学習課）が「米原市長比城跡調査整備委員会設置要綱」に基づき「長比城跡調査整備委員会」を組織した。調査体制は、以下のとおりである（順不同）。

【長比城跡調査整備委員会】

〔委員〕

- 委員長 中井 均（滋賀県立大学 名誉教授）
 委員 木野 和雄（福井県立一乗朝倉氏遺跡資料館 元館長）
 委員 太田 浩司（長浜市役所 歴史遺産課 学芸専門監）
 委員 高田 徹（城郭談話会）
 委員 山本 孝雄（柏原学区史跡保存会）
 委員 宇野 富美雄（柏原区）

〔オブザーバー〕

- 野木 雄大（文化庁 文化財第二課 文部科学技官）
 上垣 幸徳（滋賀県 文化財保護課 主幹）
 内藤 千温（滋賀県 文化財保護課 技師）
 牛谷 好伸（長浜市役所 歴史遺産課 主幹）
 小野木 学（岐阜県 文化伝承課 係長）
 須田 勇人（岐阜県 文化伝承課 主査）
 苜谷 菜々子（岐阜県 文化伝承課 主査）
 高木 久之郎（関ヶ原町役場 地域振興課 課長） 令和元年度～令和2年度
 難波 真哉（関ヶ原町役場 地域振興課 課長） 令和3年度
 富田 真一郎（関ヶ原町役場 地域振興課 係長）
 井戸 梨愛（関ヶ原町役場 地域振興課 主事）
 川島 行彦（関ヶ原町役場 地域振興課 主事）

〔事務局〕

【歴史文化財保護課】（令和元年～令和2年）

- 山本 太一（米原市教育委員会 教育長）
 上村 浩（米原市教育委員会 教育部 部長）
 桂田 峰男（米原市教育委員会 歴史文化財保護課 課長）
 吉田 豊（米原市教育委員会 歴史文化財保護課 課長補佐） 令和2年度から主席参事
 高橋 順之（米原市教育委員会 歴史文化財保護課 主幹）
 小野 航（米原市教育委員会 歴史文化財保護課 主事） 令和2年度から主任
 石田 雄士（米原市教育委員会 歴史文化財保護課 主事） 令和2年度から主任 ※調査担当

【生涯学習課】(令和3年)

馬淵 均	(米原市教育委員会 教育長)
上村 浩	(米原市教育委員会 教育部 部長)
梶田 悟	(米原市教育委員会 生涯学習課 課長)
澤 恵子	(米原市教育委員会 生涯学習課 課長補佐)
高橋 順之	(米原市教育委員会 生涯学習課 主幹)
小野 航	(米原市教育委員会 生涯学習課 主任)
石田 雄士	(米原市教育委員会 生涯学習課 主任) ※調査担当



写真1 第1回 委員会



写真2 須川山磐跡 現地指導



写真3 第4回 委員会



写真4 長比城跡 現地指導

第3節 事業および委員会の経過

調査を進めるに当たっては、前節で記載したとおり、「長比城跡調査整備委員会」（以下、「調査委員会」という。）を設置し、専門委員から指導・助言を受けて、長比城跡・須川山砦跡の測量調査、確認調査を実施した。併せて、長比城跡・須川山砦跡の関連史資料調査も実施した。

測量調査について、令和元年度に長比城跡・須川山砦跡の三次元航空レーザ計測を実施し、令和2年度に前年度に計測したデータを基に赤色立体地図を作成した。赤色立体地図を作成することにより、地表面観察では分からなかった遺構を確認し、詳細な遺構現況図を作成することができた。

確認調査について、令和2年度に須川山砦跡の確認調査を実施し、令和3年度に長比城跡の確認調査を実施した。両城は滋賀県米原市と岐阜県関ヶ原町にまたがって所在しているが、米原市が国庫補助金を受けて事業を行う関係で、米原市側で調査するために事前に境界測量を実施し、米原市教育委員会歴史文化財保護課（現：生涯学習課）、関ヶ原町役場地域振興課および地権者立会いの下、現地に境界杭を設置した。なお、須川山砦跡は平成10年に山林の地籍調査が実施されており、現在も現地に境界杭が残っていることから、確認調査前の境界測量は不要であった。

調査委員会は、令和元年12月12日に第1回目の委員会を開催し、令和4年2月に第5回目の委員会を開催するまで、各回ともに滋賀県教育委員会文化財保護課（現：滋賀県文化スポーツ部文化財保護課）の記念物および埋蔵文化財の担当職員がオブザーバーとして参加し助言を受けた。また先述のとおり、長比城跡・須川山砦跡が滋賀県米原市と岐阜県関ヶ原町にまたがって所在することから、岐阜県文化伝承課職員および関ヶ原町地域振興課職員もオブザーバーとして参加した。そして、長比城跡・須川山砦跡は姉川・小谷合戦関連城郭群の構成要素であることから、群を構成する城郭が多数所在する長浜市の歴史遺産課職員もオブザーバーとして参加するとともに両市町と複数回協議を重ね、協議しながら事業を進めた。

また、令和元年6月26日および27日に文化庁文化財第二課史跡部門の野木雄大文部科学技官の現地視察を受け、調査方法についての指導を受けた。委員会の各回の案件内容は以下のとおりである。

事業の経過（抄）

【令和元年度】

- 5月24日 関ヶ原町との長比城跡・須川山砦跡に係る第1回目協議
- 6月26日～27日 文化庁文部科学技官による現地視察
- 8月8日 関ヶ原町との長比城跡・須川山砦跡に係る第2回目協議
- 11月25日 長比城跡航空レーザ測量業務委託契約締結（～令和2年3月19日）
- 12月10日 長浜市との姉川・小谷合戦関連城郭群に係る第1回目協議
- 12月12日 第1回 長比城跡調査整備委員会 開催
- 12月13日 長比城跡航空レーザ測量 実施

【令和2年度】

- 4月20日 第2回 長比城跡調査整備委員会（コロナウィルス感染拡大により委員会中止。書面による決議）
- 5月12日 長比城跡他立体地図作成業務委託契約締結（～令和3年3月19日）
- 6月19日 長比城跡・須川山砦跡確認調査実施箇所について書面決議 実施
- 6月30日 須川山砦跡発掘調査作業委託契約締結（～8月31日）
- 7月1日 須川山砦跡発掘調査 着手

- 7月26日 須川山砦跡発掘調査成果説明会 開催 [場所: 須川公民館]
 7月28日 委員による現地指導
 8月10日 須川山砦跡現地説明会 開催
 8月11日 須川山砦跡の埋戻し
 9月12日 須川山砦跡発掘調査速報展 開催 (～10月25日) [場所: 米原市近江まにわ館]
 9月29日 関ヶ原町との長比城跡・須川山砦跡に係る第3回目協議
 3月23日 第3回 長比城跡調査整備委員会 (コロナウィルス感染拡大のため委員会中止。書面による決議)

【令和3年度】

- 4月14日 関ヶ原町との長比城跡・須川山砦跡に係る第4回目協議
 4月23日 長比城跡行政界杭測量調査委託契約締結 (～5月31日)
 4月23日 長比城跡発掘調査作業委託契約締結 (～3月18日)
 5月25日 行政界杭の設置
 6月8日 長比城跡発掘調査 着手
 7月28日 委員による現地指導および第4回 長比城跡調査整備委員会 開催
 7月31日 長比城跡現地説明会 開催
 8月10日 長比城跡発掘調査 埋戻し
 9月4日 長比城跡発掘調査速報展 開催 (～10月24日) [場所: 米原市近江まにわ館]
 9月7日 長浜市との姉川・小谷合戦関連城郭群に係る第2回目協議
 2月1日 第5回 長比城跡調査整備委員会 開催

長比城跡調査整備委員会の経過

【令和元年度】

第1回 長比城跡調査整備委員会

令和元年12月12日(木) 場所: 米原庁舎2A会議室

- (1) 委員の紹介、事務局の紹介
- (2) 会長、副会長の選出
- (3) 事業の目的および概要について
- (4) 今後のスケジュールについて

【令和2年度】

第2回 長比城跡調査整備委員会

令和2年4月20日(月) 場所: 山東庁舎2AB会議室

- (1) 本年度の事業計画について
- (2) 須川山砦跡確認調査について

※コロナウィルス感染拡大による緊急事態宣言発出のため委員会中止。代わりに書面による事業の進捗状況報告と須川山砦跡の調査区の設定に係る議決を行った。

第3回 長比城跡調査整備委員会

令和3年1月26日（火） 場所：山東庁舎2AB会議室

- (1) 本年度の事業報告
- (2) 史跡の指定範囲について
- (3) 長比城跡確認調査について
- (4) 総合調査報告書について

※コロナウィルス感染拡大による緊急事態宣言発出のため委員会中止。代わりに書面による事業の進捗状況報告と史跡の指定範囲、長比城跡の調査区の設定、総合調査報告書目次案に係る議決を行った。

【令和3年度】

第4回 長比城跡調査整備委員会

令和3年7月28日（水） 場所：関ヶ原ふれあいセンター会議室

- (1) 長比城跡確認調査について
- (2) 須川山砦跡の評価について
- (3) 史跡の指定範囲について
- (4) 長比城跡・須川山砦跡総合調査報告書について
- (5) 今後のスケジュールについて

第5回 長比城跡調査整備委員会

令和4年2月1日（火） 場所：米原市役所3-C会議室

- (1) 長比城跡の評価について
- (2) 総合調査報告書について
- (3) その他

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境 (図1、表1)

長比城跡・須川山砦跡は、米原市柏原・長久寺・須川(旧坂田郡山東町)にあり、滋賀県米原市と岐阜県関ヶ原町の境に位置する野瀬山(標高 390.93m)に所在する(図1、表1)。長比城跡は野瀬山山頂に位置し、須川山砦跡は山頂から北東方向に派生する尾根上に築かれている。

旧坂田郡山東町の地形は、伊吹山系と鈴鹿山系の中間部分に位置し、伊吹・霊仙両山塊の間にある陥落性の低地帯に立地している。低地帯は東西方向に延び、堆積性の沈降地形を展開して、随所に南北性の孤立状山塊が分布し、独特の地形パターンを構成している。この地域の面積の約60%を山林が占め、姉川、天野川沿いに農地と集落が点在する盆地状の地形となっている。北端に姉川が西流し、南に天野川が狭い谷部を通って西流している。両河川は湖北の肥沃な沖積平野を形成しているが、旧山東町域においては両河川による沖積作用は極めて小さく、その恩恵は少ない。面積の大半を山丘部が占め、残された狭い平野部も、特に南部を中心に多数の低小丘が点在しており可耕地面積を一層狭くしている。姉川流域の旧大原村北部は、伊吹山麓扇状地に連なる平坦地で、水田を中心とした農地が広がっている。天野川流域は、旧柏原村を北流、旧東黒田村を南流して黒田川と合流し、天野川沿いの山間部に農地が広がっている。

この地域の交通路をみてみると、美濃国との国境に接し、古代三関の一つである不破関が近距離にある。中山道を通り、不破関を抜けた最初の宿場が柏原である。この柏原は日本海地方、特に越前に至る北国陸路還道の分岐でもある。畿内へは柏原から中山道沿いに醒井を抜けて、琵琶湖岸の朝妻から湖上ルートを利用して入る経路が考えられる。このように、この地域は、地形的条件には恵まれず、生産基盤は貧弱ではあるが、主要街道の門戸的な位置にあり、まさに、東西文化の接点として、政治上、あるいは戦略上、常に重要な位置を占めてきた。

また、この地域の気候は、日本海側気候区北陸型に属しており、気温が低く降水量が多いため、冬期の積雪が多いことが特徴である。若狭湾と伊勢湾が直る本州で最も狭まった部分に当たり、かつ周囲を中部山地と霊仙・鈴鹿山地、丹波山地に囲まれている。この周囲を山に囲まれた地峡部に冬に若狭湾からの季節風が吹き抜けるため、積雪量が多く豪雪地帯となっている。

第2節 歴史的環境 (図3、表2)

長比城跡・須川山砦跡が所在する柏原・長久寺・須川地域で最も古い遺跡は、番の面遺跡(図3-30)である。番の面遺跡は、柏原と西に隣接する梓河内区にまたがる山丘の台地に立地している。昭和30年に京都学芸大学(現:京都教育大学)により発掘調査が実施され、近畿地方で最初の縄文時代中期末の竪穴住居跡と多数の出土品が発見された(1)。竪穴住居は、一辺の長さが4m前後の方形をしており、その内に4本の柱穴と、中央に炉跡と考えられる70×50cm程のくぼみが1個確認された。出土品は、大きく土器類と石器類に分類される。土器類は、中型の甕と考えられる破片が多く、太い沈線が著しく発達した近畿地方では類例の少ない東日本系、特に関東地方に広く分布する加曾利E式と共通する文様があり、東日本との交流を考える上で重要なものである。また、石器類は、石鏃を中心に石錘・石斧などが出土し、石鏃の中には中部山岳地産の黒曜石製が含まれており、広い交流圏を有した遺跡と言える。以上のとおり、東日本・西日本両文化の接点というべき地理的性格が、既に縄文時代に見受けられるのである。

番の面遺跡とともに柏原の古代を代表する遺跡に、王塚古墳(図3-21)がある(2)。この古墳は柏原の南に所在し、通称孤塚とも呼ばれている。王塚古墳は「桓武天皇の御料地や応神天皇の皇子である稚彦王・岐皇子の御墳墓」との言い伝えがある。近年、古墳の隣接地に住宅が建ち、周辺の景観は一変しつつあり、現在は長径約16m、短径約11m、高さ約1mの墳丘を有している。この古墳は一度発掘被害を受けたために中央に被掘壊が残り、石室石材が露出している。明治40年頃に発掘されており、石室の様子を記した見取図と出土品図が残っている。見取図によると、石室は北西方

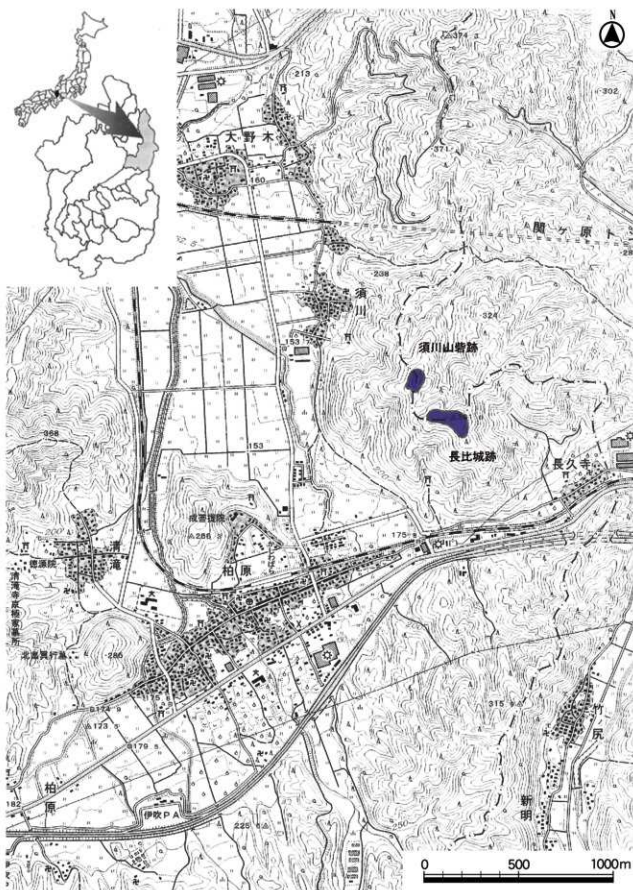


図1 長比城跡・須川山砦跡 位置図

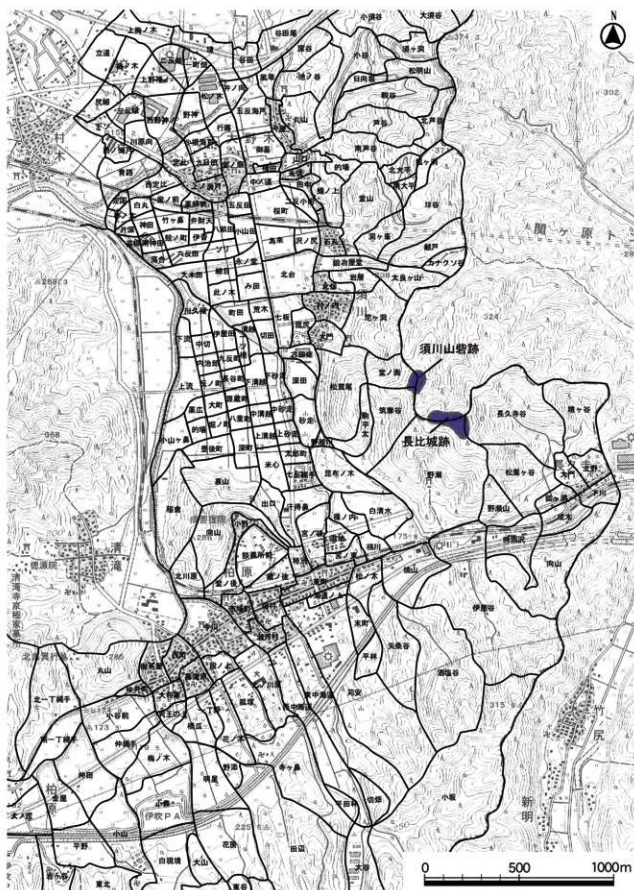


図2 長比城跡・須川山砦跡 周辺小字図

向に開口する両袖式の横穴式石室で、玄室の側壁は左右ともに4石を配し、長さ4.2m、幅約1.2mを測る。出土品は、金環・銀環や須恵器の平瓶や坏身などが発見された。これらの土器から王塚古墳は古墳時代後半、7世紀初めのもつと考えられる。

また、古代の柏原は「駅家郷」の郷域に含まれていたとされる(3)。「駅家郷」の名は高山寺本『和妙抄』には見えず、駅名の中に横川駅として見え、『延喜式』にも近江国横川駅として記載されている。つまり厳密に言えば駅家郷は駅家であって郷ではないが、横川駅を中心に郷と変わらない集落ができてつあったのだろう。駅家は大宝律令において定められ、東海道・東山道など七道の要地に、30里(約16km)ごとに駅家をおいて駅馬を飼ひ、官人の利用を供することとしたのである。東山道の駅家である横川駅には、10匹の駅馬が置かれた。

この横川駅は、近江国鳥龍駅と美濃国不破駅の中間に置かれた東山道の駅家で、近江から美濃へ抜ける交通の要衝に位置していた。この横川駅の位置については、米原市醍井付近など諸説あるが、柏原から梓河内地区にかけて広がる「小川、古川、粉川」などの地名や鳥龍駅と不破駅の中間に位置する点、地形的な観点から推察すると、柏原の西端から梓河内地区の小字「馬屋谷」辺りにかけて横川駅が所在していたと考えられる。

柏原は、鎌倉時代中期頃から近江源氏佐々木氏の流れを汲む京極氏の本貫地となる。京極氏は、始祖氏信が北近江の六郡と柏原の館(米原市清滝)を与えられ、京都京極高辻に屋敷を構えて「京極氏」を名乗ったのが始まりとされる。南北朝の内乱で、足利尊氏の盟友であった第5代高氏(道誉)の活躍により、室町時代には幕府の軍事を担う侍所の所司を任じられる四職家として、中央政権で重きをなし、北近江をはじめ飛騨・出雲・隠岐の守護を兼ね、佐々木宗家である六角氏をしのぐ勢力となる。戦国期には一時家臣の浅井氏の旗下となるものの、第19代高次の活躍により再興され、丸亀藩主として明治維新を迎えるに至る。京極氏は、鎌倉時代から明治維新までの約650年間大名家として続いた全国にもまれな名族といえる。

この地域は鎌倉時代以降京極氏の拠点であり、柏原館や上平等の京極氏館、さらに京極高広の河内城が築かれたように、常に北近江の政治的中心であった。京極氏館は、山城と城下町を背後・前面に控えた良好な遺跡群で、戦国大名の在り方を知る上で重要な遺構である。また、室町幕府の奉公衆として力を持った大原氏の館跡も、土塁や堀が現存する平地居館として貴重である。また、京極氏の根本被官筆頭今井氏の箕浦城跡や箕浦庄の地頭土肥氏の居館とされる殿屋敷遺跡などの発掘調査が行われているほか、近江地域には、若宮氏・岩船氏・宇賀野氏などの平地居館跡がある。

また、米原市は畿内・北陸・東海との結節点にあり、古来より陸路ならびに琵琶湖を利用した湖上の交通の要所として重要な位置にあった。こうした交通の要衝には自然と人や物が行き交い、江戸時代には市内を中山道・北陸道・北国脇往還が通過し、六つの宿場町が置かれた。

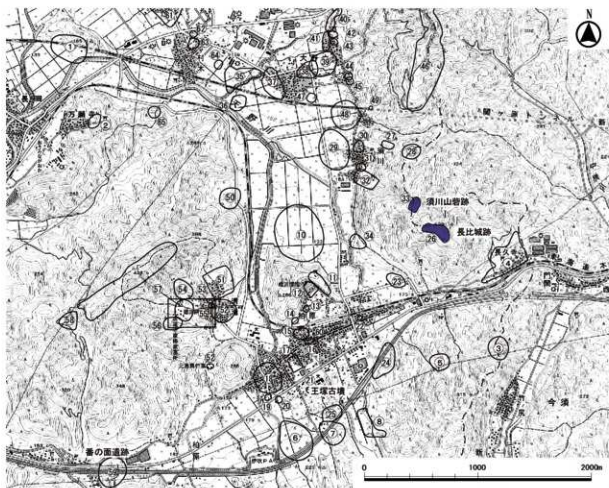
註

- (1) 小江 慶雄 1956「滋賀県番の面陣式住居遺跡」『京都学芸大学学報 A-No. 9』京都学芸大学
- (2) 中川 泉三 1913『近江国坂田郡志 下巻』滋賀県坂田郡役所
- (3) 山東町史編さん委員会 1991『山東町史 本編』山東町

第3節 姉川・小谷合戦の歴史(図3、4)

(1) 姉川・小谷合戦以前の歴史

鎌倉時代、近江守護職を代々世襲していた佐々木氏は、仁治2年(1241)、信綱の息子の代に大原氏、高島氏、六角氏、京極氏の四氏に分流した。京極氏は、四男氏信が愛知川以北六郡を与えられ、柏原に館を構えたことに始まる。その後、鎌倉幕府滅亡から南北朝時代における京極高氏(道誉)の活躍もあって、次第に台頭し、室町時代には湖北三郡の守護権と飛騨・出雲・隠岐の守護職を有して、本家である六角氏の力をしのぐようになった。



- | | | | |
|-------------|---------------|-----------------|------------|
| 1 琴岡山道跡 | 17 箕浦館道跡 | 33 須川山砦道跡 | 49 妙楽寺道跡 |
| 2 源順寺道跡 | 18 柏原御殿道跡 | 34 駒平大塚古墳 | 50 小泉道跡 |
| 3 向山の砦道跡 | 19 妙法寺道跡 | 35 青露道跡 | 51 北谷道跡 |
| 4 長久寺道跡 | 20 長塚古墳 | 36 杉の木道跡 | 52 殿村氏館道跡 |
| 5 庵宝院開運道跡 | 21 王塚古墳 | 37 大野木道跡 | 53 膳願寺道跡 |
| 6 花房道跡 | 22 神宮寺道跡 | 38 大野木館道跡 | 54 室持坊道跡 |
| 7 宝生寺道跡 | 23 白清水道跡 | 39 御墓道跡 | 55 清滝寺道跡 |
| 8 中垣内道跡 | 24 平林道跡 | 40 深谷道跡 | 56 龍仁寺道跡 |
| 9 北島具行跡 | 25 番匠垣内道跡 | 41 五反海斗道跡 | 57 柏原城道跡 |
| 10 葉広道跡 | 26 長比砦跡(長比城跡) | 42 今屋道跡 | 58 黒谷城道跡 |
| 11 金比羅神社古墳群 | 27 須川山城道跡 | 43 神宮寺道跡 | 59 番の面道跡 |
| 12 談義所道跡 | 28 美濃こえの道跡 | 44 叢勝寺道跡 | 60 柏原臨本陣道跡 |
| 13 小野道跡 | 29 須川道跡 | 45 伝因寺道跡 | 61 正明堂道跡 |
| 14 向山道跡 | 30 北畑道跡 | 46 大峰砦道跡(千疊敷砦跡) | 62 村木道跡 |
| 15 市場寺道跡 | 31 須川館道跡 | 47 五反田道跡 | 63 村木城道跡 |
| 16 柏原本陣道跡 | 32 管生寺道跡 | 48 石丸道跡 | 64 神ノ木塚道跡 |
| | | | 65 谷海道跡 |

図3 周辺の遺跡分布図

地図番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	種類	時代	備考
1	461-056	翠岡山遺跡	長岡	集落跡	奈良～平安	遺跡部・土師器
2	461-057	高野寺遺跡	石籠寺	社寺跡	不明	京極高麗の菩提寺・石塔
3	461-062	向山の磐道跡	長久	城跡跡	中世	
4	461-063	長久寺遺跡	長久	集落跡、社寺跡	不明	遺跡部・反輪陶器・瓦
5	461-064	富宝院開基遺跡	柏原	城跡跡	中世	
6	461-069	花房遺跡	柏原	集落跡	不明	遺跡部・土師器(明基遺跡)
7	461-071	宝生寺遺跡	柏原	社寺跡	不明	
8	461-072	中壇寺遺跡	柏原	城跡跡	不明	
9	461-074	北島具行御墓	柏原	その他墓跡	南北朝	(国史跡) ※京極隆盛により柏原で新首された南朝方朝方の墓所
10	461-075	葉広遺跡	柏原	集落跡	不明	
11	461-076	倉比羅神社古墳群	柏原	古墳群	古墳	円墳3基
12	461-077	談輪所遺跡	柏原	社寺跡	不明	弘仁6年最澄奉願伝承
13	461-078	小野遺跡	柏原	その他墓跡	室町	
14	461-079	向山遺跡	柏原	その他墓跡	不明	五輪塔
15	461-080	市場寺遺跡	柏原	社寺跡	不明	惠比須神社別当寺
16	461-081	柏原本陣遺跡	柏原	城跡跡	江戸	
17	461-082	貫城遺跡	柏原	城跡跡	不明	※其浦氏の居館で、塚堂に仕え柏原の守護に当たる
18	461-083	柏原御殿遺跡	柏原	城跡跡	不明	
19	461-084	妙法寺遺跡	柏原	社寺跡	不明	津島神社別当寺
20	461-085	長塚古墳	柏原	古墳	古墳	円墳
21	461-086	王塚古墳	柏原	古墳	古墳	円墳1基・横穴式石室・竪穴・竪穴、刀子・須恵器
22	461-088	神宮寺遺跡	柏原	社寺跡	不明	中仏道分派経院説、八幡神社別当寺
23	461-089	白清水遺跡	柏原	集落跡	不明	遺跡部
24	461-090	平林遺跡	柏原	その他墓跡	不明	弘仁6年最澄奉願伝承
25	461-091	善広墳内遺跡	柏原	城跡跡	不明	
26	461-092	長比郎跡	柏原・長久寺	城跡跡	不明	
27	461-093	須川山城遺跡	須川	城跡跡	中世	
28	461-094	美濃二之の遺跡	須川	城跡跡	中世	
29	461-095	須川遺跡	須川	集落跡	弥生	
30	461-096	北塚遺跡	須川	集落跡	不明	反輪陶器・須恵器・土師器
31	461-097	須川館遺跡	須川	城跡跡	不明	
32	461-098	管生寺遺跡	須川	社寺跡	不明	善久4年奉願伝承
33	461-099	須川山城遺跡	須川	城跡跡	中世	
34	461-100	駒平塚古墳	須川	古墳	古墳	円墳・須恵器
35	461-101	貫露遺跡	大野木	集落跡	不明	遺跡部・土師器
36	461-102	杉の木遺跡	大野木	集落跡	不明	遺跡部
37	461-103	大野木遺跡	大野木	集落跡	不明	石塔
38	461-104	大野木館遺跡	大野木	城跡跡	不明	
39	461-105	御長遺跡	大野木	集落跡、その他墓跡	弥生・平安	鎌・土師器・伝承地
40	461-106	深谷遺跡	大野木	集落跡	弥生	弥生
41	461-107	五反海戸遺跡	大野木	集落跡	不明	遺跡部・反輪陶器
42	461-108	寺尾遺跡	大野木	集落跡	不明	土師器
43	461-109	神宮寺遺跡	大野木	社寺跡	不明	元和年間奉願伝承
44	461-110	藤井寺遺跡	大野木	社寺跡	不明	沙石寺末寺
45	461-111	依田寺遺跡	大野木	社寺跡	不明	須磨寺末寺
46	461-112	大樽谷遺跡(千貫敷磐跡)	大野木	城跡跡	不明	(千貫敷)
47	461-113	五反田遺跡	大野木	集落跡	弥生	石籠
48	461-114	石丸遺跡	大野木	集落跡	不明	石屏・須恵器・土師器
49	461-115	妙楽寺遺跡	大野木	社寺跡、経塚	不明	
50	461-116	小泉遺跡	清滝	集落跡	不明	遺跡部・反輪陶器
51	461-117	北谷遺跡	清滝	その他墓跡、社寺跡	不明	
52	461-118	殿村氏館遺跡	清滝	城跡跡	不明	
53	461-119	藤原寺遺跡	清滝	社寺跡	不明	京極高麗の菩提寺
54	461-120	宝持寺遺跡	清滝	社寺跡	不明	
55	461-121	清滝寺遺跡	清滝	社寺跡	不明	京極氏歴代墓・重隆寺(一部国史跡・一部市史跡)
56	461-122	能仁寺遺跡	清滝	社寺跡	不明	京極高麗の菩提寺(一部国史跡) ※京極高麗の菩提寺跡
57	461-123	柏原城遺跡	清滝	城跡跡	不明	(一部国史跡) ※現在の清滝寺全域が館跡と考えられている
58	461-125	黒谷城遺跡	神河内	城跡跡	中世	
59	461-134	善の宮遺跡	神河内、柏原	集落跡	縄文	竪穴建物(市史跡)
60	461-169	柏原本陣遺跡	柏原	城跡跡	江戸	
61	462-024	正明堂遺跡	杉穴	社寺跡	不明	
62	462-025	村木遺跡	村木	集落跡	縄文	縄文土器・石棒
63	462-026	村木遺跡	村木	城跡跡	室町	
64	462-027	神ノ木塚遺跡	村木	その他墓跡	室町	
65	462-070	谷海遺跡	村木	社寺跡	平安	土師器・須恵器・反輪陶器

表2 周辺遺跡一覧表

そして、戦国時代の幕開けとなった応仁文明の乱の中では、京極持清が六角氏に代わって近江一國守護に任じられ、京極氏の勢力を大きく伸張させた。この頃の京極氏の本拠地は基本的には柏原館（柏原城遺跡、図3-57）であるが、建武4年（1337）、高氏は甲良荘に館（勝楽寺城跡、図4-3）を移し拠点としている。

しかし、大永3年（1523）、浅見氏ら国人の攻撃で高清が尾張に追われた、いわゆる大吉寺梅本坊公事以降、北近江では浅井氏が台頭する。京極氏は浅井氏に「御屋形様」として象徴的に扱われ、一般には小谷城を拠点にした浅井氏三代に北近江の政権が代わったといわれているが、文書からの検証では、天文20年（1551）頃まで坂田郡南部を中心に京極高広による政権が機能しており、その居城は河内城であった。この河内城は、梓河内に所在する八講師城跡（図4-7）であった可能性が高いとみられる。しかし、浅井長政の代には、完全に京極政権の姿は消えてしまう。

こうして京極氏が没落し、新たに浅井氏が勢力を伸張していくことになるが、この政情の変化について六角氏が度々、北近江を攻める。しかし、京都の情勢にも注意を払わなければならなかった六角氏は、北近江に兵を留め置くことができず、最後まで近江を制圧することができなかった。坂田郡の南部に所在する鎌刀城（図4-8）・太尾山城（図4-9）・葛圃嶺城（図4-10）や日坂田郡城南端の佐和山城（図4-11）は、京極氏と六角氏、浅井氏と六角氏の争奪の場となり、度々その帰属を代えている。このうち、鎌刀城と太尾山城について発掘調査が実施されており⁽¹⁾、鎌刀城では礎石建物や石垣、枡形虎口などが検出されて、近江の築城技術の先進性が確認された。また、太尾山城でも櫓と考えられる礎石建物などが確認されている。

南近江の六角氏は、永禄6年（1568）、当主義賢の子、義治が、重臣の後藤氏の権勢を恐れてこれを謀殺したために、家臣団の反発を招き（観音寺騒動）、以後、六角氏は衰退する。さらに、浅井長政の進出、ついで織田信長の攻撃を受け、六角氏の時代は終わりを告げた。

（2）姉川・小谷合戦の歴史（図4）

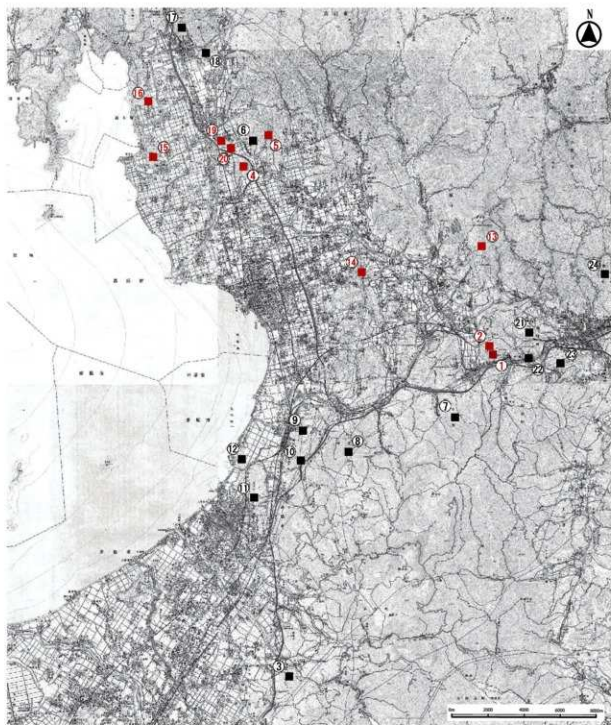
永禄4年（1561）、織田信長は浅井長政と同盟を結び、美濃の斎藤氏を攻略、さらに永禄11年（1568）には、亡命していた足利義昭を征夷大將軍にするという大義名分を得て、入京を果たした。しかし、元亀元年（1570）4月、信長が越前の朝倉氏攻めを始めると、朝倉氏とも同盟関係にあった浅井氏が突如織田軍を攻撃して、信長は一時的撤退を余儀なくされた。しかし、6月には浅井攻めの体制を整え近江へと侵攻する。これに対して浅井氏は、『信長公記』に「去程に、浅井備前越前衆を呼越し、たけくらへ・かりやす両所に要害を構え候」とあることから、越前朝倉氏の力を借りて、「たけくらへ・かりやす」に要害を構えたことが分かる。しかし、守備していた堀秀村・樋口直房は織田氏に内応し、両城はあっけなく開城し、信長がこの「たけくらへ」の要害に一両日留まったことが『信長公記』に記されている。

信長は一両日「たけくらへ」の要害に滞在した後、6月21日に小谷へ向けて軍を進め、諸勢を従え虎御前山に一夜在陣している⁽²⁾。この際には陣を敷いたのみで、本格的な築城は行われなかったとみられる。同月24日には、浅井方の家臣である上坂・三田村・野村肥後が立て籠もる横山城（図4-14）を四方から包囲し、信長と家康は横山丘陵の北端部に位置する龍ヶ鼻に陣取っている⁽³⁾。

一方、浅井・朝倉軍は織田軍の背後をつつため大依山に陣取り、その後姉川まで軍を進め、織田・徳川軍と対峙する。そして、同月28日早朝から姉川合戦が始まり、当初は浅井・朝倉軍が優勢だったが、次第に織田・徳川軍が優勢となり、浅井・朝倉軍は小谷城（図4-5）へ退却する。織田・徳川軍は小谷城付近まで追い打ちをかけたが、要害の地であったため横山城に軍勢を引き揚げた⁽⁴⁾。

その後、元亀元年（1570）9月16日から12月13日まで続いた「志賀の陣」や翌年5月6日の「箕浦表合戦」など、小谷周辺から舞台を移して合戦が繰り広げられたが、元亀3年（1572）7月21日に信長は虎御前山・雲雀山に陣を構え小谷城攻めを開始する⁽⁵⁾。

信長は同月27日に虎御前山二城を構えるように命じ⁽⁶⁾、8月初旬には虎御前山城（図4-4）は完成していたとみられ



- | | | | | |
|----------|-----------|----------------|----------|----------|
| 1 長比城跡 | 6 山崎丸・福寿丸 | 11 佐和山城跡 | 16 磯野山城跡 | 21 玉城跡 |
| 2 須川山砦跡 | 7 八講師城跡 | 12 礪山城跡 | 17 田上山城跡 | 22 今須城跡 |
| 3 勝楽寺城跡 | 8 鎌刀城跡 | 13 高安城跡（上平寺城跡） | 18 田部山城跡 | 23 松尾山城跡 |
| 4 虎御前山城跡 | 9 太尾山城跡 | 14 横山城跡 | 19 丁野山城跡 | 24 菩提山城跡 |
| 5 小谷城跡 | 10 葛蒲板城跡 | 15 山本山城跡 | 20 中島城跡 | |

図4 周辺の城郭分布図

る。『信長公記』に虎御前山城の様子が記されており、「御巧を以て、当山の景気、興ある仕立、生便敷御要害見聞に及ばざるの由にて、各耳目を驚かさされ候。」と絶賛している⁽⁷⁾。一方、朝倉軍は7月27日に大嶽に入り、8月2日には知善院尾に砦を構え⁽⁸⁾、織田軍に対し備えた。

天正元年（1573）8月8日、山本山城主阿閉貞征が織田軍に降伏し開城したのを皮切りに、同月12日には朝倉軍が立て籠もる大嶽・丁野山城⁽⁸⁴⁻¹⁹⁾を攻めて降伏させ、翌13日信長は退却する朝倉軍を越前まで追撃し、朝倉義景は同月20日に越前大野で自刃した。同月26日、信長は越前から虎御前山に帰陣し、29日小谷城の総攻撃に移る。同日久政は自刃し、翌日の9月1日に長政が赤尾屋敷で自刃し、小谷城は陥落する。

註

- (1) 中井 均 2006『米原町内中世城館跡分布調査報告書』（米原市埋蔵文化財調査報告書 第1集）米原市教育委員会
- (2) 『信長公記』元龜元年6月21日条
- (3) 『信長公記』元龜元年6月22日条
- (4) 註3
- (5) 『信長公記』元龜3年7月19日条
- (6) 『信長公記』元龜3年7月24日条
- (7) 『信長公記』元龜3年8月8日条
- (8) 『鳴記録』

参考文献

- 桂田 峰男 2004『滋賀県 山東町・柏原の町並み』（伝統的建造物群保存地区保存対策調査報告書）山東町教育委員会
 山東町史編さん委員会 1990『山東町史 別編』山東町
 山東町史編さん委員会 1991『山東町史 本編』山東町
 高橋 順之 2012『京極氏遺跡発掘調査報告書—京極氏館跡第1～3次、弥高寺跡第1・2次—』米原市教育委員会
 田中 勝弘・奈良 俊哉 1986『坂田郡山東町内遺跡詳細分布調査報告書』山東町教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
 中井 均 2002『玉城跡』『松尾山城』『岐阜県中世城館跡総合調査報告書 第1集（西濃地区・本巣地区）』岐阜県教育委員会

第3章 既往の調査 (図4、5)

第1節 大正～昭和初期の調査

長比城跡・須川山砦跡について調査が行われるようになったのは近代以降で、郷土史家によって地元で伝わる伝承を中心にまとめられた。大正2年に編纂された『近江坂田郡志』の中で、中川泉三は長比城について柏原村大字柏原・長久寺の野瀬山にあり、昔はこの付近を長比と称したことから、「長比砦」と呼ばれていると記している⁽¹⁾。また、中川は須川山砦跡についても言及しており、須川の山上にあり、この辺りを地元では「城山」と呼ばれていると述べている。さらに、昭和18年の『改訂近江坂田郡志』では、須川山砦は間道防備の砦の一つであると性格付けがなされている⁽²⁾。しかし、これらの地誌の段階では具体的な場所の比定、縄張図の提示、城郭の遺構に関する詳細を記述するところまでは至らなかった。

第2節 旧山東町・滋賀県教育委員会による調査

長比城跡・須川山砦跡の城郭遺構に関する本格的な調査が行われたのは1980年代に入ってからである。旧山東町や滋賀県の悉皆調査および地表面観察による個別の調査等により、長比城跡・須川山砦跡に関する基礎資料は1980年代以降飛躍的に蓄積されていった。

昭和58年から昭和60年にかけて、旧山東町教育委員会が財団法人滋賀県文化財保護協会に委託し、旧山東町内に所在する遺跡の分布調査が実施された⁽³⁾。この調査により、初めて長比城跡の場所の比定と縄張図が提示された。しかし、この調査では須川山砦跡の詳細な調査が行われることはなかった。

そして、昭和57年から平成4年にかけて、滋賀県教育委員会により城郭の悉皆調査が実施された。長比城跡・須川山砦跡が所在する坂田郡の調査成果について、平成元年に『滋賀県中世城郭分布調査報告書6(旧坂田郡の城)』(以下、県報告書6)が刊行され、その中で、長谷川銀藏・博美により長比城跡・須川山砦跡の縄張図が提示された⁽⁴⁾。長谷川は、長比城跡を周辺に所在する須川山砦跡、大峰砦跡、千景敷遺構(田中城)などととも、江濃国境の防塞ラインを形成する一連の城郭群として捉えている。また、遺構の主体を東曲輪と位置付け、東曲輪の東土塁の内側が凹地状となっている点に注目し、松尾山城跡(図4-20)、田屋城跡(滋賀県高島市)、田部山城跡(図4-18)などを類例として挙げ、浅井氏の縄張りの特徴であると述べている。そして、東曲輪の北と南の虎口は、小谷城跡の山崎丸・福寿丸(図4-6)と共通するとし、後年の改修を否定している。須川山砦跡についても山崎丸・福寿丸との類似性を指摘している。

この県報告書6の巻末資料には、その年度に行われたシンポジウムの講演録が収録されており、その中で村田修三が、大嶽・山崎丸・福寿丸、大野山城跡(図4-19)、中山の付城(福井県美浜町)とともに、長比城跡・須川山砦跡を事例に挙げ、朝倉氏の城郭では屈曲した土塁によって喰い違い虎口が形成される点を指摘しており、その築城技術を「北国型」と呼称した⁽⁵⁾。また、浅井氏が朝倉氏の築城技術を共有していた可能性を示唆し、浅井氏がその技術を実際に使用し始めるのは元亀元年以降と推測している。長比城跡について虎口の形状から西曲輪に先行して東曲輪が存在し、西曲輪が築かれた際に東曲輪も改修されたとしている。

旧山東町教育委員会および滋賀県教育委員会による分布調査の成果は、長比城跡・須川山砦跡の場所の比定と縄張図が提示されたことであり、また、村田による朝倉氏と浅井氏の築城技術共有の指摘は、以後の研究の方向性を示すものであった。

第3節 研究の進展

1990年代以降は、地表面観察による縄張り研究を中心に研究が進められていった。

中井均は、浅井領で朝倉氏の支援を受けて築かれた城郭には、畝状空堀群や随所で屈曲し横矢が掛かる分厚い土塁が共通して存在すると指摘している⁽⁶⁾。また、中井は、城郭構造から長比城の築城年代を16世紀後半に比定している。そして、浅井氏が六角氏に対して築いたとされる菖蒲嶺城跡^(図4-10)、磯山城跡^(図4-12)、太尾山城跡^(図4-9)を事例として挙げ、「別城一郭」の構造が多いことから、長比城跡の構造も浅井氏の境目の城の特徴と捉えている。

高田徹は、長比城跡・須川山砦跡について土塁の造り方や規模、塹壕の使用などに違いはあるが、外柵形状の虎口に共通性が認められると述べている⁽⁷⁾。また、東曲輪について、北虎口と南虎口を結ぶ通路が設定されており、南虎口を形成する土塁はその通路に対応して折れており、南虎口自体も通路に対応して設けられていることから、両虎口は一連の普請で築かれたとし、元亀元年の朝倉軍による築城を想定している。

石川浩治は、長比城跡西曲輪と東曲輪の構造の違いから、それぞれ別の勢力が守備していたと推測している⁽⁸⁾。そして、西曲輪の東虎口について、朝倉氏の関係する城郭の虎口よりも規格性を持って発達しており、縄文系城郭にみられる外柵形虎口のプランに近いことから元亀元年以降の改修を想定している。また、長比城跡が交通の要衝に位置しているため、国境を塞ぐ軍事的緊張は元亀元年だけでなく、賤ヶ岳合戦や小牧・長久手合戦、関ヶ原合戦等における改修の可能性も示唆している。

佐伯哲也は、長比城跡・須川山砦跡について現存する縄張りとは同時期・同一人物により構築されたとして述べている⁽⁹⁾。墨線に土塁を巡らし、土塁で構築された虎口を持つ点について、中山の付城との類似性を指摘し、中山の付城の虎口がストレートに進入するのに対し、長比城跡・須川山砦跡は喰い違い状に配した柵形虎口となっている違いについては、中山の付城が築城された永祿7年(1564)から長比城跡が築城された元亀元年までの技術的な進歩の過程と捉えている。同型の虎口として、朝倉氏が築城・改修したとされる大嶽・福寿丸・山崎丸を事例に挙げ、元亀年間における朝倉氏の虎口の典型であると述べている。また、西曲輪の東虎口について、後世の改修という説があることを述べているが元亀元年に築城した虎口と結論付けている。また佐伯は、『信長公記』の長比城跡に関する記事が元亀元年6月4日から6月19日の間に書かれている点に注目し、10日間程度での築城を想定している。

また、米原市教育委員会の桂田峰男、高橋順之らによって中井、石田の図を引用し、長比城跡・須川山砦跡の資料紹介がなされている⁽¹⁰⁾。高橋は長比城跡について、虎口の形状から東曲輪が西曲輪に先行して存在し、西曲輪が築かれた際に改修され、虎口の構造については朝倉氏の関与を示唆しており、村田や中井の見解を踏襲している。須川山砦跡については、外柵形状の虎口や畝状空堀群の存在により、遠藤氏の詰め城とする説を否定している。そして、曲輪の形状が長比城跡西曲輪と類似していることなどから長比城跡と須川山砦跡を一つの城塞群として評価しており、須川山砦跡が北を遮断する役割を担っていたとしている。また、長比城跡と須川山砦跡の中間に当たる尾根鞍部を兵の駐屯地に想定している。

第4節 研究史のまとめと課題

以上、縄張り研究を中心に研究史を概観した。先行研究の成果は以下の3点に集約できる。

- ① 長比城跡は北近江の境目の城で多く見られる「別城一郭」の構造が採用されていること、長比城跡東曲輪の土塁の内側が凹部状になっていることなど、浅井氏の縄張りの特徴を示している。
- ② 長比城跡の虎口の形状から、西曲輪に先行して東曲輪が存在した可能性があるが、東曲輪の北虎口と南虎口については一連の普請で築かれたとみられる。
- ③ 長比城跡と須川山砦跡は墨線に土塁を巡らし、土塁で構築された虎口を持ち、また外柵形状の虎口を設けることなど構造に共通性が認められることから、両砦(城)跡は同一時期・同一主体にこれらは越前朝倉氏が関与した城郭とも共通する。

このように、長比城跡東曲輪の東側土塁の内側に浅井氏の城郭の特徴である凹部状を呈していることや、東西曲輪の虎口の形状の違いなどから、西曲輪に先行して東曲輪が存在していた可能性が指摘されてきた。また、須川山砦跡については、須川の集落内に所在する遠藤喜右衛門直経の館跡（須川館遺跡、図3-30）とセット関係にある城とする説と元亀元年に浅井・朝倉氏によって長比城跡と同時に築かれたとする説が提唱されてきた。しかし両砦（城）において、これまで発掘調査が実施されておらず、これらの説に関して考古学的な検証は行われてこなかった。同様に、朝倉氏の築城技術とされてきた土塁や虎口構造についても考古学的に解明されてこなかった。また『信長公記』に、信長が「たけくらへ」の要害に一兩日滞在したことが記されていることから、建物の存在が想定されていたが、地下遺構について詳細な調査・研究が行われてこなかったことから詳細は不明であった。

上記の課題を解明すべく、総合調査を実施する運びとなった。調査を実施するに当たり、長比城跡・須川山砦跡について精力的に調査を進めて来られた中井均氏、高田徹氏、また朝倉氏および朝倉氏の城郭に精通しておられる水野和雄氏、湖北地域の文献史学を専門とされる太田浩司氏を専門委員に迎え、令和元年度から総合調査を実施した。

注

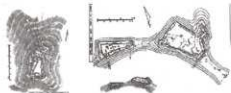
- (1) 中川 泉三 1913『近江坂田郡志 下巻』滋賀県坂田郡役所
- (2) 滋賀県坂田郡教育会 1943『改訂 近江国坂田郡志』西濃印刷株式会社出版部
- (3) 田中 勝弘・奈良 俊哉 1986『坂田郡山東町内遺跡詳細分布調査報告書』山東町教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- (4) 長谷川銀藏・博美 1989「野瀬山城（長比城）」『須川山城』『滋賀県中世城郭分布調査6 旧坂田郡の城』滋賀県教育委員会
- (5) 村田 修三 1989「湖北の城館」『滋賀県中世城郭分布調査6 旧坂田郡の城』滋賀県教育委員会
- (6) 中井 均 1996「城郭構造から信長の近江進攻を説く」『平成8年度秋季特別展 元亀争乱一信長を迎え討った近江一』滋賀県立安土城考古博物館
中井 均 2001「浅井・朝倉同盟の一考察—城郭構造を中心として—」『西田弘先生米寿記念論集 近江の考古と歴史』西田弘先生米寿記念論集刊行会
中井 均 2008「浅井氏と北近江の城」『戦国大名浅井氏と北近江—浅井三代から三姉妹へ—』長浜市長浜城歴史博物館
- (7) 高田 徹 2013「越前朝倉氏築城術の一考察—若狭国吉城付城を中心として—」『中世城郭研究 第27号』中世城郭研究会
- (8) 石川 浩治 2014「野瀬山城・須川山城」『近畿の城郭Ⅰ』戎光祥出版株式会社
- (9) 佐伯 哲也 2021『朝倉氏と城郭と合戦』（図説 日本の城郭シリーズ15）戎光祥出版株式会社
- (10) 桂田 峰男 2006「長比城」『近江の山城ベスト50を歩く』サンライズ出版株式会社
高橋 順之 2019「長比城」『須川山砦』『近江の山城を歩く』サンライズ出版株式会社

参考文献

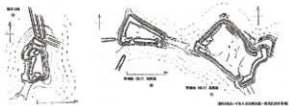
山東町 1992『山東町歴史写真集』山東町



山東町教育委員会 作図 (1986)



長谷川照藏・博美 作図 (1989)



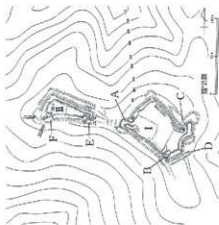
村田 修三 作図 (1989)



石田 雄士 作図 (2019)



中井 均 作図 (2006)



石川 浩治 作図 (2014)



依伯 哲也 作図 (2021)



長比城・須川山城

高田俊作復原、地味図平城建設、資料
平成25年4月20日調査
高田俊作図
50m

高田 俊 作図 (2013)

図5 長比城跡・須川山城跡 縄張り図 (S=1/5000)

第4章 姉川・小谷合戦関連城郭群の構成と本質的価値 (図4)

第1節 姉川・小谷合戦関連城郭群の構成

元亀争乱における織田氏と浅井・朝倉氏の抗争のうち、北近江を舞台に繰り広げられた合戦を一連の歴史性の下で捉え、それらの合戦に用いられた城郭を「姉川・小谷合戦関連城郭群」と定義する。姉川・小谷合戦について、歴史的、空間的な理解を得ることを目的として、遺構の残存状態が良く、文献史料等で姉川・小谷合戦に関わったことが把握できる城郭または関連する可能性がある城郭を構成要素として取り上げた。

まず、平成15年の「中世城館・近世城郭遺跡等の保存に関する検討会」において構成要素として挙げられた各城郭の概要、残存状況を述べる。

(1) 長比城跡 (図4-1)

長比城跡は、滋賀県と岐阜県の県境に位置する野瀬山山頂に所在しており、開発による破壊を受けておらず、遺構の残存状況は良好である。『信長公記』の元亀元年(1570)6月19日条に「去程に、浅井備前越前衆を呼感し、たけくらへ・かりやす両所に要害を構え候」とあることから、「たけくらへ」を当城跡に比定し、浅井氏が越前朝倉氏の力を借りて築城されたとする説が有力である。

(2) 横山城跡および関連遺跡 (図4-14)

永禄4年(1561)閏3月13日付け赤尾清綱書状や同日付けの中嶋直頼書状で、「横山入城衆」が観音寺に対して乱暴を働くことが記されていることから、この時期には横山城は浅井方の陣城として使用されていたことが分かる。また、『信長公記』元亀元年6月22日条によると、浅井氏の家臣である上坂氏・三田村氏・野村肥後が立て籠もっており、6月24日には信長が横山丘陵の北端部分に「龍が鼻」に陣所を設けて、横山城を包囲している。6月28日の姉川合戦後は、横山城は織田方の陣城として機能するようになる。『信長公記』の6月28日条に、「横山の城降参致し退出、木下藤吉郎定番として横山に入置」とあることから、開城後に秀吉が城番として入ったことが分かる。

横山城跡の主要遺構は、標高312mの最高峰に「Y字形」に連なる頂上部の尾根を中心として、東西南北に延びる各尾根や各谷沿いに存在する。これらの遺構群は「北城」「南城」に分けることができる。北城は階段状に削平地を設けているのみであるが、南城は土塁や塹壕、二重堀切を確認することができ、北城よりも発達した構造になっていることから、南城は秀吉入城後に改修された可能性が考えられる。また、関連遺跡は横山丘陵の各尾根に分布している。文献上、確認できる署名は「龍が鼻營」「龍が鼻陣所」のみであるが、多くの營は、古墳などの高まりを利用して曲輪や堀切などが設けられていることが地表面観察により確認できる。横山城跡および関連遺跡について、遺構の残存状況は良好といえる。

横山城跡および関連遺跡は、朝倉氏に関連した記録がないことから、浅井氏の城郭を織田氏が改修した城郭として「姉川・小谷合戦関連城郭群」に位置付けられる。

(3) 虎御前山城跡 (図4-4)

虎御前山城に関する文献の初見は、『信長公記』元亀元年6月21日条で、「信長公は諸勢を召列られ、虎御前山へ御上りなされ」とあることから、信長が小谷城を攻めるために虎御前山まで進出したことが分かる。しかし、この時は1日のみの在陣であり、普請や作事は行われなかったとみられる。本格的な普請・作事が行われたのは元亀3年(1572)に入ってからで、『信長公記』の元亀3年7月27日条に「虎御前山御取上の御要害仰付けらる」と

ある。また、同8月8日条に「虎御前山御取出御普請程なく出来訖」とあることから、完成したのは同日前後とみられる。そして、小谷落城を記録した8月27日条には虎御前山で久政の首実検が行われたことが記されており、以後廃城になったとみられる。文献記録から、虎御前山城は築城から小谷城が落城するまでの間、織田方の陣城として機能していたことが分かる。

虎御前山城跡は、虎御前山の南北に長い尾根上に1,500mにわたって複数の曲輪が点在する。北半分は開発の手が入っていないため、当時の遺構が良好に残存しているが、南半分は、キャンプ場や電波中継所などの開発により破壊が著しい。また眼前には小谷城跡が迫っており、浅井氏攻略の最前線であったことが分かる。

(4) 山本山城跡 (図4-15)

『信長公記』元亀3年7月19日条に「阿閉淡路守権龍も居城山本山へ、木下藤吉郎差し遣はされ、籠を放火候。」とあることから、浅井氏の家臣である阿閉貞征が同城に立て籠もっていたことが分かる。しかし、『信長公記』天正元年(1573)8月8日条に「江北阿閉淡路守、御身方の色を立て、」とあることから、この時に阿閉氏は信長につき、以降山本山城は織田方の城となったとみられる。

琵琶湖と湖北部の平野部を分断するように細長く南北に延びる地塁状の西野山丘陵の南端部に所在する。眼下には越前に通じる北国街道、西には琵琶湖の湖上交通を掌握できる交通の要衝に位置する。北国街道、湖上交通といった流通の大動脈を抑える位置にあることから、浅井氏の勢力基盤を知る上で重要である。また、全体的に遺構の残存状況は良好であるが、主郭の南側に位置する曲輪が過去に開発によって破壊されている。

山本山城跡には朝倉勢力が入った形跡がなく、現存している遺構は浅井氏の城郭がベースとなっているとみられる。しかし、天正10年(1582)まで阿閉氏が本城に在城していることから、後の時代に改修された可能性も考慮する必要がある(1)。

(5) 丁野山城跡・中島城跡 (図4-19、20)

『信長公記』天正元年8月12日条によると、「直ちに又、よの山、信長御取り懸け候、平泉寺の玉泉坊番手として権龍候、」とあることから、浅井・朝倉方である平泉寺の玉泉坊が丁野山城を番手として守っていたことが分かる。中島城については、江戸後期に描かれたとみられる「江陽浅井郡丁野山古砦之図」に「中島総左衛門」の名が記されており、浅井氏の家臣である中島宗左衛門が在城していたことが分かる。

両城跡は小谷城跡の西、虎御前山城跡の北に位置しており、小谷城の守備のために朝倉氏の技術を用いて築城されたとみられる。後世の改変を受けておらず遺構の残存状況は良好で、浅井・朝倉氏の築城技術を知る上で、標識的な遺跡である。

(6) 磯野山城跡 (図4-16)

磯野山城は、長浜市高月町磯野に館があったとされる磯野氏に関わる城である。本城に関する文献史料がほとんどなく、『浅井三代記』の中に、天文元年(1532)に浅井氏に対抗するため、磯野氏が磯野山に立てこもったことが記されるのみである。姉川・小谷合戦に関する文献には一切登場しない。

ほかの「姉川・小谷合戦関連城郭群」の城郭が土塁を備えるのに対して、磯野山城跡は土塁を一切備えず、主郭群の堀切と塹壕による防御のみとなっている。

磯野山城跡は、平成15年段階で「姉川・小谷合戦関連城郭群」の構成要素として挙げられているものの、姉川・小谷合戦に関する文献に登場せず、また城郭構造もその他の城郭と比べて古相を呈することから、本城郭群に含めるか否かについて再検討が必要である。

なお、平成15年に「滋賀県の中世城館遺跡の保存に関する検討委員会」が開催された段階では、須川山砦跡(図4-2)は本城郭群に含まれていなかったが、近年の調査・研究により浅井・朝倉氏によって長比城跡と同時期に築城された可能性が指摘されている(2)。また、京極氏遺跡の構成要素として既に史跡指定されている菊安城跡(上平寺城跡、図4-13)について、『信長公記』の元亀元年6月19日条に「たけくらへ」と共に記されている「かりやす」の「要害」として推定されており、「たけくらへ」「かりやす」は浅井・朝倉氏によって同時期に築城・改修された可能性が掘張り研究から指摘されている(3)。近年の調査・研究により、須川山砦跡と菊安城跡(上平寺城跡)は、本城郭群の構成要素に位置付けることができると考えられる。また両砦(城)は、開発による破壊を受けておらず、遺構の残存状況は良好である。

これまで、滋賀県側の城郭が構成要素として選定されてきたが、岐阜県側にも姉川・小谷合戦に関わった可能性がある城がいくつかある。1つ目は松尾山城跡である(図4-23)。松尾山は、関ヶ原合戦の際に小早川秀秋が布陣していた山として有名であるが、その場所に姉川・小谷合戦の際に浅井氏の城があった可能性がある。「遍照山文庫」所蔵文書に、元亀元年に浅井長政が美濃の長亭軒という城に樋口直房を入れていることが記されており、ただし書きに長亭軒とは不破郡松尾山のことであると記されていることから、松尾山に長亭軒という浅井氏の城があったことが分かる。現在、松尾山城跡は関ヶ原古戦場の構成要素の一つとして評価されているが、今後の調査により姉川・小谷合戦との関連性が明らかになる可能性がある。

2つ目は玉城跡である(図4-21)。玉城は、『美濃古史』に佐竹常陸介義春とその息子義義がいたことが記されていることから、南北朝時代には既に存在していたとみられる。しかし、現在残っている遺構は戦国期後半の様相を呈していることから、戦国期後半に竹中氏が江濃境目の城として改修したと評価されている(4)。しかし、近年関ヶ原町の調査により、『御城御備絵図』(関ヶ原歴史学習館蔵)の「玉城跡」の文字の横に「天正年間浅井家出張所」と記されていることが明らかとなった。時期が合わないものの、姉川・小谷合戦の際に浅井氏の境目の城として機能していた可能性が考えられる。松尾山城跡・玉城跡は今後詳細な調査を実施した上で、構成要素に含めるか検討が必要である。

注

- (1) 太田 浩司 2021「浅井氏家臣「阿閉氏」の転身-羽柴秀吉と対立した信長家臣-」『淡海文化財論叢 第13輯』淡海文化財論叢刊行会
- (2) 村田 修三 1989「湖北の城館」『滋賀県中世城郭分布調査6 田坂田郡の城』滋賀県教育委員会
高田 徹 2013「越前朝倉氏築城術の一考察-若狭国吉城付城を中心として-」『中世城郭研究 第27号』中世城郭研究会
佐伯 哲也 2021「朝倉氏と城郭と合戦」(図説 日本の城郭シリーズ15) 戎光洋出版株式会社
高橋 順之 2019「長比城」「須川山砦」『近江の山城を歩く』サンライズ出版株式会社
- (3) 高田 徹 2013「越前朝倉氏築城術の一考察-若狭国吉城付城を中心として-」『中世城郭研究 第27号』中世城郭研究会
- (4) 中井 均 2002「玉城跡」『岐阜県中世城館総合調査報告書 第1集(西濃地区・本巣地区)』岐阜県教育委員会

第2節 姉川・小谷合戦関連城郭群の本質的価値

本城郭群の本質的価値は、元亀争乱における姉川・小谷合戦に用いられた織田氏と浅井・朝倉氏の双方の城郭が複合して構成され、当時の合戦の在り方や状況を歴史的・空間的に把握できる点にある。構成要素のうち、織田氏の城郭として虎御前山城跡が挙げられ、眼前に小谷城跡が迫ることから、小谷城攻めの陣城として機能したことが分かる。一方、浅井・朝倉氏の城郭としては長比城跡、丁野山城跡、中島城跡、山本山城跡が挙げられ、それぞれ小谷城を守るための防衛ラインとして築かれた城である。横山城跡については、当初は浅井氏の小谷城防衛ラインとして機能し、後に織田氏の小谷城攻めの陣城として機能するようになったことから、両者によって使用された城郭として位置付けられる。また、平成15年段階では、構成要素に含まれていなかった須川山砦跡や既に史跡京極氏遺跡の構成要素となっている荊安城跡（上平寺城跡）も浅井・朝倉氏の城郭として本城郭群の構成要素に位置付けられると考えられる。

長比城跡は、史資料やこれまでの縄張り研究により、姉川・小谷合戦時の「たけくらへ」の「要害」に推定されており、近江と美濃の国境に築かれていることから、浅井氏の織田氏に対する防衛ラインの最前線に位置付けられると考えられてきた。また、隣接する須川山砦跡についても同様の評価が与えられてきた。両砦（城）の本城郭群における位置付けを検証すべく、今回詳細な測量調査や発掘調査および文献調査を実施した。調査成果については後述する。

第5章 文献調査の成果

第1節 文献史料

(1) 長比城・須川山砦に関する文献史料の残存状況

現在のところ、長比城（跡）に関する文献史料は少なく、巻末の史資料編に示したように、築城された16世紀の様子を示す史料は9点で、廃城後の様子について記された史資料は15点である。絵図資料に至っては1点のみとなっている。また、須川山砦（跡）について記された文献史料は今回の調査において確認できなかった。

以下では、長比城築城以前の記録、長比城に関する記録、廃城後の記録、絵図資料の順にそれぞれ基本的な史料を取り上げ解説する。なお本文中の【史料一】などの番号は、巻末の史資料編の史料番号と対応している。

(2) 長比城築城以前の記録

長比城築城以前の野瀬山周辺の状況が分かる史料が残っており、一条兼良が記した『藤川記』(1)の中に、文明5年(1473)に一条兼良が当地を通行した際に「右ひたりみて過行はあふみみちの二の山そたけくらへする」と詠んだ歌が記されており、この歌から当時この辺り一帯が「たけくらへ」と呼ばれていたことが推測できる。

ほかに、『大乘院寺社雑事記』(2)の文明11年(1479)7月26日条に、「タケクラへ」関の関銭は50文であったことが記されており、「タケクラへ」に関が設けられ、その関銭が50文であったことが分かる。この記事から「たけくらへ（タケクラへ）」が当時から交通の要衝であったことが分かる。

(3) 長比城に関する記録

長比城について記された基本的な文献として、まずは『信長公記』【史料四】が挙げられる。『信長公記』の元亀元年6月19日条に「去程に、浅井備前越前衆を呼越し、たけくらへ・かりやす両所に要害を構え候」と記されており、越前朝倉氏の力を借りて、長比城・刈安城（上平寺城）を築城・改修したことが分かる。また「六月十九日、御馬を披出、堀・樋口謀叛の由承り、たけくらへ・かりやす取物も不敢退散也、たけくらへに一兩日被成御逗留」とあり、守備していた堀秀村・樋口直房が織田氏に内応したことにより両城はあっけなく開城し、信長が「たけくらへ」の要害に一兩日留まったことが『信長公記』に記されている。

『信長公記』は織田方の記録であるが、浅井方の史料として『鳴記録』【史料六】が残されており、「去程に、元亀元年の春の比、織田信長、浅井下野守久政・同備前守長政無許に及しかへ、小谷より美濃口をさへとして、野瀬刈（安脱力）堀次郎、同家子樋口三郎兵衛尉を入置けるか、其比堀へいまた若年なりしか、三部兵衛か所存にて忍心替し、野瀬の要害へ信長の勢を引入、をの居城かまのはへ引退しかへ、刈安を始近辺の城々、悉く明退けり」と記されている。「野瀬」「刈（安）」と併記されていることから、「野瀬」は「たけくらへ」の「要害」を指していることが推測でき、内容は、浅井氏が美濃口の抑えとして「野瀬」「刈（安）」に堀秀村と樋口直房を入れ置いたが、堀が若年だったため、樋口が織田方の内応に応じ、長比城に織田軍を引き入れたことが記されている。堀・樋口は、織田軍を長比城に引き入れた後は、居城である鎌刃城へ退却しており、長比城が居城ではなく、浅井主導のもとで築かれた江濃の国境を抑えるための陣城であったことが分かる。

ほかに、長比城が機能していた時期の様子が分かる資料があり、「毛利家文書」【史料五】に収められている九ヶ条からなる織田信長覚書の手紙に「浅井備前元来少身候間、成敗非物数候処、信長在京中ニ越前衆相語、濃・江堺日之節所を拘、足懸二三ヶ所拵、可罷支度候き、去十九日向彼地出馬候、同日敵城右之新所を初、彼是四ヶ所落居候、且得利本望候事」とある。織田信長の在京中に浅井長政と越前衆が語らい、江濃国境に砦を設けて

信長の侵攻に備えたこと、そして4か所を味方につけた(落居した)ことが記されている。その4つの砦とは、長比城東曲輪、長比城西曲輪、須川山砦、菊安城(上平等城)であった可能性が考えられる。ただし、覚書は城数の概略を提示した可能性があることや、長比城の両曲輪を1つの城と数えて別の城がこの4つの砦に含まれる可能性などが考えられることから、上記で示した城の比定はあくまで可能性の一つとして提示しておく。

また、同時代の史料である可能性が考えられるものとしては、山東町史編さん委員会の調査で見つかった「長久寺杉山家文書」の中に、竹中重治が長久寺村に宛てたとみられる回状の写しが残されている。堀秀村が信長の陣に入ったことにより、近々信長が出馬するので、里人は粗相のないようにという内容が書かれている。しかし、偽文書の可能性が高く、山東町史の資料編に掲載が見送られたという経緯もあることから、この史料については、慎重に取り扱う必要がある。

(4) 廃城後の記録

長比城廃城後、野瀬山は柏原村・長久寺村の草刈りの場として機能するようになる。両村の間では野瀬山を巡る争いがあつたようで、柏原宿に残されている『萬留帳』【史料十二】や醒井の「江龍家文書」【史料十三～十八】に、野瀬山を巡って柏原村と長久寺村が山論を繰り広げられたことが記されている。

このように野瀬山は、江戸時代には草刈り場として機能を果たしていたが、一方で城跡としても認識されていたようで、越前福井藩の参勤交代経路の見聞録である『東山道記』【史料二十一】に「長比・菊安」と云う古城山右に見ゆる」と記されている。ただし、福井藩は関ヶ原宿から越前まで北国脇往還を通行したこと、長比が右に見えるは誤りである。ほかに、文政六年(1823)に菊枝樓繁路が記した『伊勢参宮旅日記』【史料二十二】に「一柏原 志り半 近江国・美濃国境 此所半道程行、美濃と近江の寝物語り、家五六軒有、本宿は少行て有、餅名物也、小田(ママ)信長公の城跡見ゆる」と記されており、柏原宿では長比城跡を織田信長の城として紹介していたことが分かる。『東山道記』や『伊勢参宮旅日記』の記述に誤りはあるが、近江と美濃の国境を通行した人々からは「長比・菊安」の城跡として認識されていたことは重要である。

また、江戸時代に入ってから中世の城郭とその城主について書かれた記録も残っており、醒井の「江龍家文書」に収められている「近江国郷土在銘鑑」【史料十】の柏原屋敷主の項目に樋口三郎兵衛の名が、長久寺の項目に堀治郎の名が記され、「江州佐々木南北諸士帳」【史料十一】の柏原の項目にも樋口三郎兵衛の名を確認することができる。

第2節 絵図資料

長比城について記された絵図資料は管見の限り1点のみで、江戸幕府の道中奉行が作成した「中山道分間延絵図」(図7, 8)に、「宇野瀬山」と記された尾根があり、その隣の尾根に長比城を示すとみられる「古城跡」の文字を確認することができる。

また、関ヶ原町が所蔵している関ヶ原合戦に関する絵図資料を調査したが、長比城や須川山砦について描かれた絵図は確認できなかった。しかし、江戸時代に描かれた「御合戦御備絵図」(3)の玉城山の隣に「天正年中 浅井家出張所」と記されていることを確認した(図6)。玉城が浅井家の出張所として使用されていた可能性が考えられるが、天正年中と時期が合わないことから、玉城が浅井氏の境目の城として機能したのかについては今後検討が必要である。



図6 御合戦御備絵図

第3節 まとめ

最後に、今回実施した文献史料・絵図資料の調査成果についてまとめる。

まず、築城時期・築城主体について、【史料四】の『信長公記』に、「去程に、浅井備前越前衆を呼越し、たけくらへ・かりやす両所に要害を構え候」とあることから、元亀元年に浅井長政が越前朝倉氏の力を借りて、長比城・菊安城(上平等城)を築城・改修したことが分かる。

また当時、長比城は織田方と浅井方で異なった名称で呼ばれており、【史料四】の『信長公記』によると、織田方からは「たけくらへ」の「要害」と呼称されており、浅井方からは、【史料六】の『鳴記録』により「野瀬」と呼称されていたことが分かる。

次に場所の比定について、「中山道分間延絵図」に野瀬山にある神明神社が描かれており、そのすぐ上に長比城を指すとみられる「古城跡」の文字が記されている。また、江戸時代に書かれた見聞録や旅行記などから、野瀬山に「長比」城跡もしくは「古城跡」があることが認識されていたことがうかがえる。

上記のとおり、長比城について記された史料はあるものの、須川山砦について記された文献史料は管見の限り全く確認できない。しかし、立地上長比城と須川山砦が一連の城郭群として築かれた可能性が高く、そのことがうかがえる史料が残っている。【資料五】の「毛利家文書」に収められている、毛利元就に宛てた織田信長覚書により、浅井・朝倉氏が信長在京中に江濃の境目に砦を構えたこと、調略により4か所の砦が味方に付いたことが記されている。この4か所の砦は、長比城西曲輪、同東曲輪、須川山砦、菊安城(上平等城)であると考えられ、長比城と須川山砦が元亀元年に同時に築かれた一連の城郭群であった可能性がこの史料からうかがえる。

このように、文献調査の成果から築城時期・築城主体を推測することができ、場所の比定や名称についても明らかとなった。また、須川山砦についても長比城と同時に築かれた可能性が高いとみられる。

註

- (1) 京都市歴史資料館蔵
- (2) 国立公文書館蔵
- (3) 関ヶ原町歴史民俗学習館蔵



図7 中山道分間延絵図

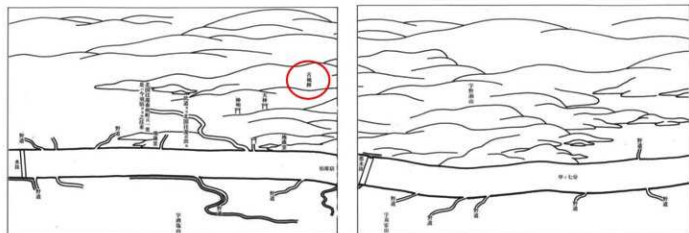


図8 中山道分間延絵図 トレース図

第6章 測量調査の成果

第1節 航空レーザ計測および赤色立体地図の作成 (図9)

長比城跡・須川山砦跡において、これまで先学により縄張り図が提示されていたものの、詳細な地形測量図は作成されてこなかった。遺跡を持つ本質的価値の解明と今後の保存管理のため、令和元年度から令和2年度にかけて測量調査を実施し、詳細な地形測量図の作成を試みた。

測量の範囲は、野瀬山の長比城跡・須川山砦跡が所在する部分を中心に計測し、図化作業を行った。測量調査を実施するに当たり、長比城跡・須川山砦跡の所在する野瀬山山頂部は樹木が生い茂っていること、また、長比城跡と須川山砦跡とに距離があり標高差も著しいことから、通常の測量では地形の把握が困難であるため、広範囲で樹木の葉の隙間から地盤に到達して地形計測することの可能な航空レーザ計測による測量調査を選択した。そこで、令和元年度に航空レーザ計測を実施し、令和2年度に前年で取得したデータを基に、赤色立体地図を作成した。

航空レーザ計測は、アジア航測株式会社に委託し、航空レーザ計測システムを搭載した航空機により計測を行った。令和元年12月13日に計測を実施し、飛行高度500m、飛行速度72km/h (20m/s)、測量範囲は0.84km²とし、計測密度を10点/n以上、計測コースは3コースとした。航空レーザ計測時には手持ちカメラにより、航空写真を4カット撮影した。

また、赤色立体地図の作成についても、アジア航測株式会社に委託し、令和2年5月12日から3月19日にかけて作成した。

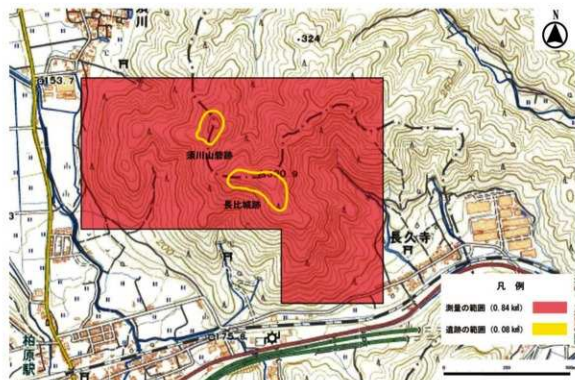


図9 航空レーザ測量の範囲 (国土地理院地図に加筆)

第2節 遺構の分布と構造

航空レーザー測量を実施し、赤色立体地図を作成した結果、長比城跡・須川山砦跡の範囲内に人工的に形成されたとみられる平坦面（以下、曲輪という）および土塁や堀といった遺構が確認された。これらを長比城跡・須川山砦跡に伴う城郭遺構とみなし、その様子について報告する。なお、測量結果を示す図について、全体を縮尺 1/5000、1/2500 の赤色立体地図と 1/2500 の遺構図で示し、長比城跡西曲輪、須川山砦跡を 1/700 の遺構図で、長比城跡東曲輪を 1/800 の遺構図で個別に示した。

今回、図化された遺構について、これらを適切に識別し、管理するために長比城跡・須川山砦跡に統一した遺構番号を付した。遺構番号の付与については、長比城跡・須川山砦跡の範囲を地形や遺構の分布状況を考慮して地区区分を行い、これに対する枝番号として各遺構に番号を付した。遺構番号については個別の遺構図に示した。なお、長比城跡と須川山砦跡の間にある鞍部について、明確な城郭遺構は確認されなかったが、駐屯部として使用された可能性があることから、遺構番号を付与せず地点と表記とした。地区区分については、以下のとおりである。

長比城跡 西曲輪（遺構番号 1-1～7）

長比城跡 東曲輪（遺構番号 2-1～11）

須川山砦跡（遺構番号 3-1～6）

駐屯部（地点A）

（1）長比城跡（図 10-14）

西曲輪（図 10-13）

西曲輪（標高：約 380m、遺構番号 1-1）は、長さ 61.7m、最大幅 32.3m、最小幅 13.2m で、曲輪の形状は三角形形状を呈する。曲輪の周囲は上部幅 2.1m～3.5m、下部幅幅 8.4m～10.5m、高さ 1.2m～1.4m の土塁が囲繞する。曲輪内の平坦面の東側半分は西側半分に比べて一段高くなっており、全体的に東から西にかけて緩やかに傾斜している。また、曲輪の北側斜面には幅 2.1m の犬走り（1-2）が設けられている。

西曲輪の虎口は曲輪の南（1-3）と東（1-4）の二方向に開口する。南虎口は平虎口で、曲輪を囲繞する土塁の一部に開口部を設けて構築される。南虎口の前面に東西方向に延びるスロープ状の通路があり、その通路から東側土塁に当たって北に折れて進入させる構造になっている。東虎口は、虎口内で通路がクランクする峻い違い虎口が採用されている。通路はスロープ状になっており、虎口前面と曲輪内部とに約 1m の比高差がある。

また、西側斜面と南側斜面に堅堀（1-5、6）が一条ずつ設けられている。堅堀はそれぞれ長さ 14m、幅 2.8m（1-5）、長さ 12m、幅 2.8m（1-6）を測る。2本の堅堀を設けることにより、進入ルートを南虎口方向に制限している。東虎口の前には、長さ 8.4m、幅 2.1m の堀切（1-7）が一条設けられている。虎口の前に堀切を設けることによって進入路を狭め、進入する人数を制限している。

東曲輪（図 10-12、14）

東曲輪（標高：約 390m、遺構番号 2-1）は、長さ 73.2m、幅 58.8m で、曲輪の形状は四角形状を呈する。曲輪は周囲を幅 5.8m、高さ 1.5m の土塁が囲む。北側と西側の土塁と比べ、南側と東側の土塁が高くなっている。特に、東側の土塁が分厚く高くなっており、折れを備え、横矢がかかる仕組みとなっている。このことから東を意識した構造となっていることが分かる。曲輪内の平坦面は自然地形をそのまま残したような形状をし、北西方向から南東方向にかけて、緩やかに傾斜している。東曲輪の北側、南側、東側に犬走り（2-7～10）が設けられている。

東曲輪の虎口は、曲輪の西（2-2）と南（2-4）、北（2-3）の三方向に開口する。西虎口は掘りくぼめられて築かれた

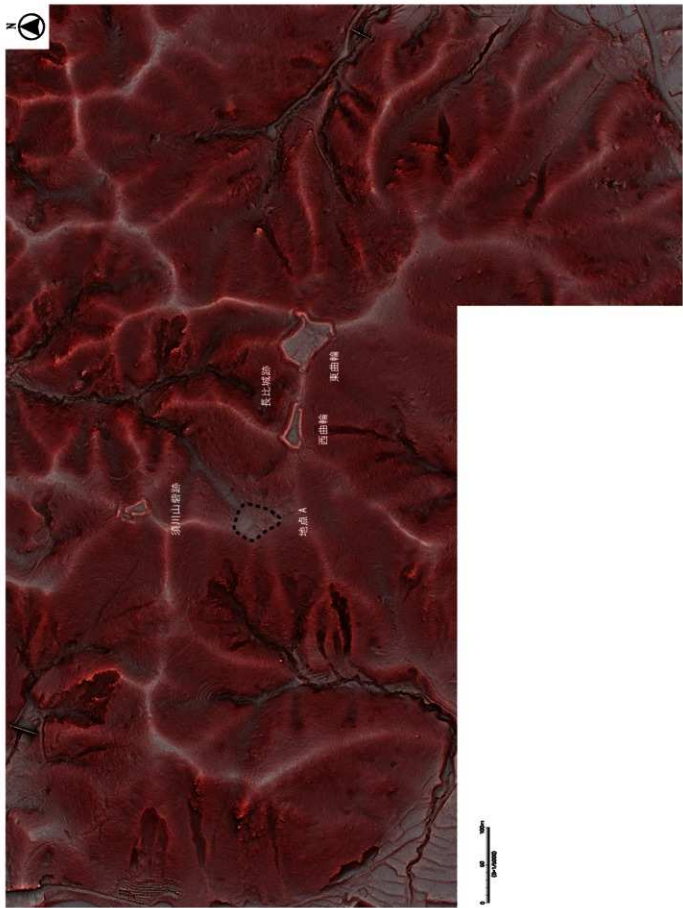


图 10 長比城跡・須川山砦跡 赤色立体地図

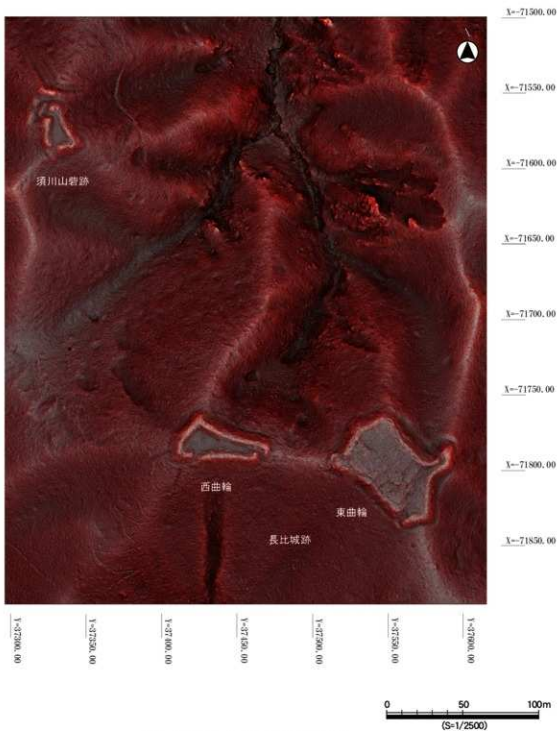


圖11 長比城跡・須川山砦跡赤色立体地圖

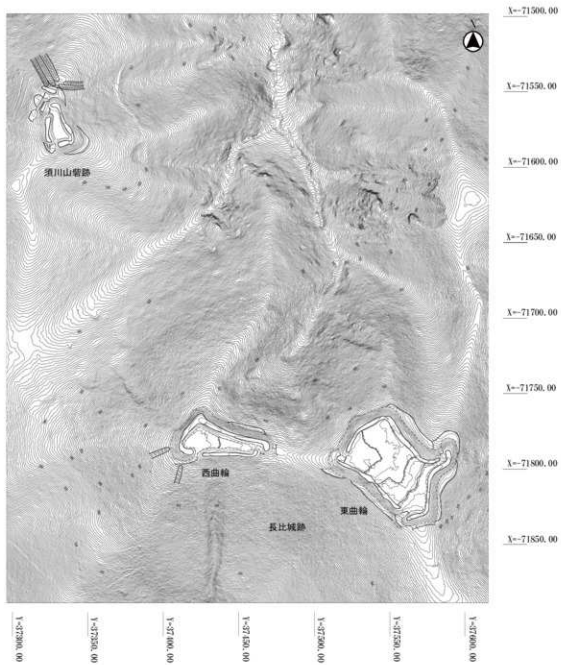
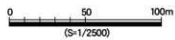


図12 長比城跡・須川山磐跡遺構図



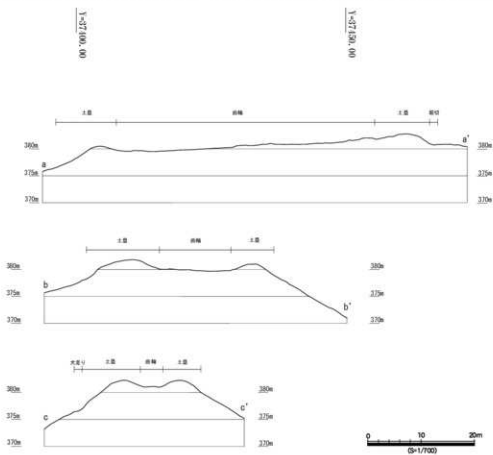


圖13 長比城跡西曲輪遺構圖(上)、断面圖(下)

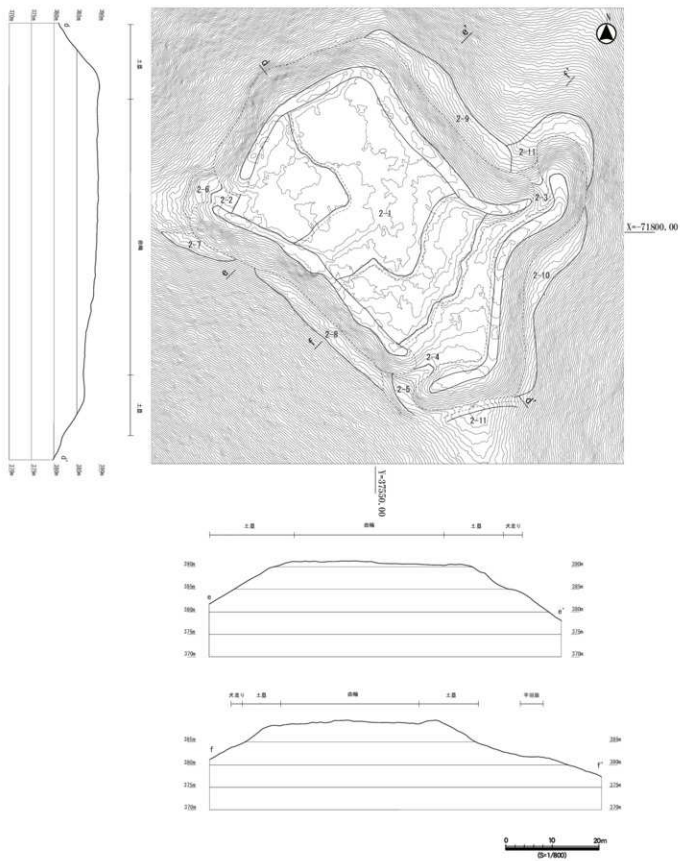


図14 長比城跡東曲輪遺構図(右上)、断面図(左上・下)

とみられる内枘形状の虎口を採用し、虎口の前には北から南にかけて傾斜するスロープ状の平坦面 (2-6) が設けられている。直進で進入するのではなく、西曲輪方向から尾根を進むとまず虎口の西側土塁に当たり、北に折れてスロープ状の平坦面に進む。さらに平坦面内部で東に折れて曲輪に進入させる構造となっている。南虎口 (2-4) も西虎口と同様に内枘形状の虎口を採用し、虎口の前にスロープ状の平坦面 (2-5) を備える。北虎口 (2-3) は峻い違い虎口が採用され、虎口の前面には平坦面 (2-11) が設けられている。平坦面と虎口との比高差は約 2m を測る。

また、南の虎口の前には長さ 16m、幅 2m の堀切 (2-11) が一条設けられている。虎口の前に堀切を設けることによって、虎口方向に進入ルートを設定させ、また進入路を狭めることによって、進入する人数を制限している。

(2) 須川山砦跡 (図 10-12 15)

須川山砦跡の主郭 (標高: 約 352m、遺構番号 3-1) は、長さ 29.4m、最大幅 22m、最小幅 10.2m で、曲輪の形状は長比城跡西曲輪と同様に三角形を呈する。曲輪は周囲を幅 7.3m、高さ 1.2m の土塁が囲む。曲輪内の平坦面の東側半分は西側に比べて一段高くなっている。

虎口は、主郭の南 (3-2) と北 (3-3) の二方向に開口する。南の虎口は土塁に開口部を設け、その開口部の前に長比城跡と同様にスロープ状の平坦面を設け、曲輪を囲む土塁よりも一段低い土塁を設けることによって、外枘形状の虎口を呈している。北の虎口も同様に土塁に開口部を設け、その開口部の前に曲輪を囲む土塁よりも一段低い土塁を設けることによって、外枘形状の虎口を呈している。両虎口の前は高低差のある切岸が設けられている。主郭の北西側に 2 つの曲輪 (3-5, 6) を備え、南東方向には帯曲輪 (3-4) を備える。

主郭の北側に堀切 (3-7) が設けられており、さらに堀切の北側には高さ 1.5m、幅 5.8m の分厚くて高い土塁が設けられている。その堀切の外側斜面に補助の遮断線として、北斜面に三本、東斜面に二本の連続する塹壕 (3-8) が設けられている。

(3) 駐屯部 (図 10)

駐屯部 (地点 A) は、長比城跡と須川山砦跡の間にある鞍部に位置しており、南北約 40m、東西約 50m の広がりを持つ平坦面である。今回測量調査において明確な城郭遺構は確認されなかったが、広大な面積を有することから、従来から駐屯部である可能性が指摘されてきた⁽¹⁾。

陣城に駐屯地が設けられる事例は多く、多田暢久が天神山城跡 (滋賀県長浜市)、東野山城跡 (滋賀県長浜市) などを事例として挙げ、陣城プランの特徴は、基本的に本郭部と駐屯部の二重構造で成り立っていることを指摘している⁽²⁾。また、多田は陣城が築かれる目的として、①合戦に備える軍勢の野営地の確保、②敵の攻撃に耐えうる陣地としての機能の 2 つを挙げ、陣城の二重構造はこの 2 つの要求の反映としている。

長比城跡・須川山砦跡も多田が指摘する二重構造で成り立っていた可能性が考えられ、長比城跡西曲輪・東曲輪および須川山砦跡は敵の攻撃に耐えうる陣地としての機能を果たし、駐屯部 (地点 A) は軍勢の野営地としての機能を果たしていた可能性が考えられる。また、多田は陣城の駐屯部で現状の地表面で遺構が確認できない場合でも、小屋掛けや炊事の痕跡を確認できる可能性も指摘している。地点 A の地表面に明確な遺構はないものの、鞍部に広大な平坦面を設けており、野営地としての機能を果たした可能性があることや今後遺構が見つかる可能性が高いことから、遺跡範囲に含めて保護を図るべきであると考えられる。

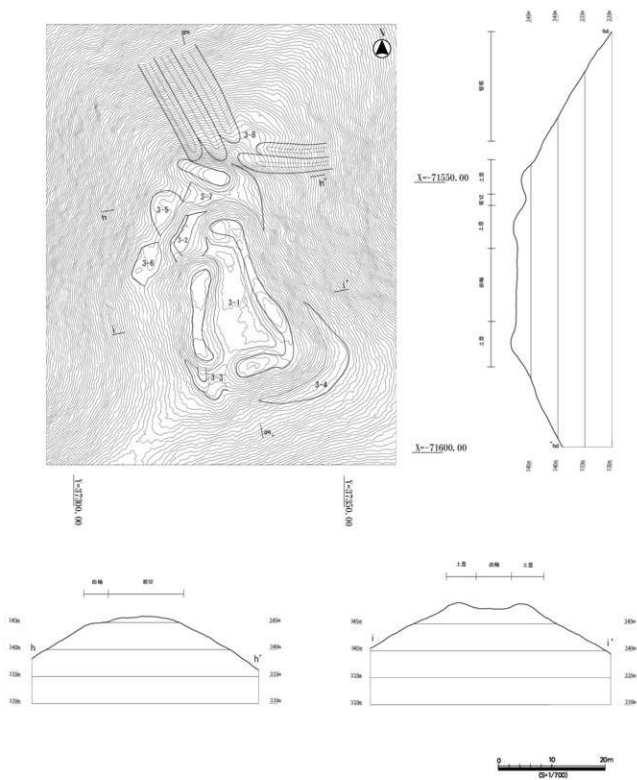


図15 須川山脊跡遺構図(左上)、断面図(右上・下)

第3節 登城道 (図16~17)

周辺の街道および登城道について、長比城跡・須川山砦跡が所在する野瀬山の南山麓には東山道が通り、関ヶ原町今須から野瀬山の谷を抜けて須川の集落へとつながる須川道が通っていた。地理的状況から、長比城は東山道を、須川山砦は間道である須川道を抑えるために築かれたとみられる。そして、両砦(城)と同時に整備された刈安城(上平寺城)は、山麓を通る北国脇往還を抑えるために築かれたと考えられ、東からくる信長軍の通行ルートを抑えるためにそれぞれ築かれたことが分かる(図16)。また長比城跡からは、浅井氏の居城であった小谷城跡が所在する小谷山と当時の織田氏の居城であった岐阜城跡が所在する金華山を目視できる。登城道について、今回の測量調査において断片的に道の痕跡を確認することができたが、土砂崩れなどにより道が崩れてしまっており、それぞれの道の全体像を確認することができなかった。しかし、基本は尾根筋を通るルートで城まで登っていたとみられ、長比城・須川山砦に至る登城ルートとして以下の6ルートを想定したい(図17)。

- ① 今須の集落から登るルート・・・今須の集落から尾根筋を通り、長比城東曲輪の北虎口に至る。
- ② 長久寺集落から登るルート・・・長久寺の集落から尾根筋を通り、長比城東曲輪の南虎口に至る。
- ③ 柏原集落から登るルート1・・・柏原の集落から尾根筋を通り、長比城西曲輪の南虎口に至る。
- ④ 柏原集落から登るルート2・・・柏原の集落から尾根筋を通り、長比城西曲輪、地点Aに至る。
- ⑤ 柏原集落から登るルート3・・・柏原の集落から尾根筋を通り、途中で分岐し須川山砦の南虎口と地点Aに至る。
- ⑥ 須川集落から登るルート・・・須川の集落から尾根筋を通り、須川山砦の北虎口に至る。

②と③に関しては、直接東山道に通じていたとみられることから、大手道のような中心的な道だった可能性がある。

第4節 まとめ

今回、航空レーザ測量を実施して赤色立体地図を作成した結果、遺構の構造や分布を視覚的に把握することができ、遺構が良好に残存していることが分かった。最後に遺構の分布と特徴的な遺構から長比城跡・須川山砦跡の構造について見ていく。

長比城跡の東曲輪が野瀬山の最高所に位置し、そこから西へ約35mの位置に西曲輪が所在している。東曲輪と西曲輪の比高差は約10mである。そして、鞍部を挟んだ北尾根の頂上に須川山砦跡が所在している。長比城跡の西曲輪と須川山砦跡は直線距離で約230m、比高差は約30mである。鞍部に遺構が存在する可能性もあったが、測量の結果、遺構は確認されなかった。しかし、鞍部には広いスペースがあり、傾斜も緩やかであることから、駐屯などに使用された可能性は十分考えられる。

次に城郭構造について見ていくと、長比城跡西曲輪と須川山砦跡は三角形の曲輪に高く分厚い土塁が周囲を囲繞する。一方東曲輪は、西曲輪や須川山砦ほど高い土塁ではないものの、同じく周囲を土塁が囲繞する。また、西曲輪および須川山砦跡の虎口は、土塁の一部に開口部を設けて、その前面にスロープ状の平坦面を設けることによって折れを有する外枳形状の虎口を採用している。一方東曲輪の虎口は、内枳形状の虎口が採用されているが、虎口の前面には西曲輪、須川山砦跡と同様にスロープ状の平坦面を備える。また両砦(城)は小規模な城郭にも関わらず虎口を二つ以上有していることなども共通し、城郭構造上共通する点が多い。

堀について、長比城跡西曲輪の東端と東曲輪の東端に堀切が一条ずつ、西曲輪の南虎口付近に堅堀が二条設けられており、虎口方向に進入ルートを限定させ、また進入路を狭めることによって、進入する人数を制限している。須川山砦跡は北端に堀切を設けた後、堀切の北側に分厚い土塁を設けることによって防御を堅固なものとしている。また堀切の外側に、連続堅堀群が設けられており、防御の補助線として機能している。

測量の結果、長比城跡・須川山砦跡には遺構が良好に残存していること、また共通する城郭構造を有していることが明らかとなった。両砦(城)に共通する城郭構造について、先行研究でも指摘されているとおり、越前朝倉氏の国吉城

攻めの際に築かれた中山の付城（福井県美浜町）などにも見出すことができ、『信長公記』で記されているとおり朝倉氏の協力の下で築かれた可能性が考えられる。

以上、測量調査の成果から長比城跡・須川山砦跡の構造を見てきたが、本章で述べた内容は現状の地表面観察に基づくものであるため、曲輪の機能や変遷、曲輪内の建物構造、そして築城年代について考古学的な手法によって明らかにする必要がある。上記課題を明らかにすべく、両砦（城）跡の発掘調査を実施したので、次章でその発掘調査の成果について述べる。

註

- (1) 高橋 順之 2019「長比城」「須川山砦」『近江の山城を歩く』サンライズ出版株式会社
- (2) 多田 暢久 1989「陣城プランの特徴について—賤ヶ岳陣城群を中心に」『近江の城 第32号』近江の城郭友の会

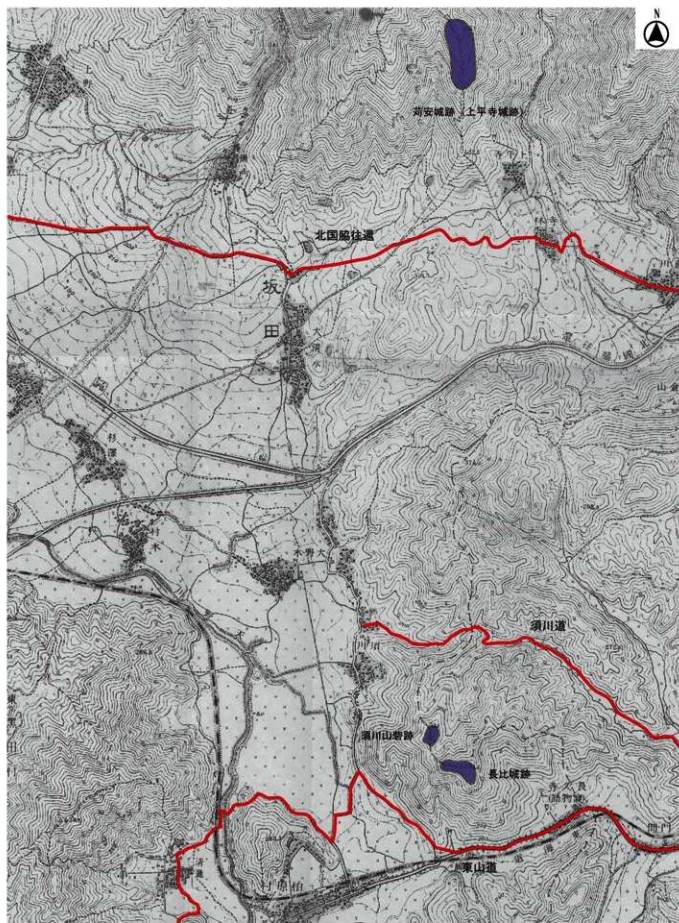


図 16 主要街道位置図 (大正9年測「関ヶ原」に加筆)

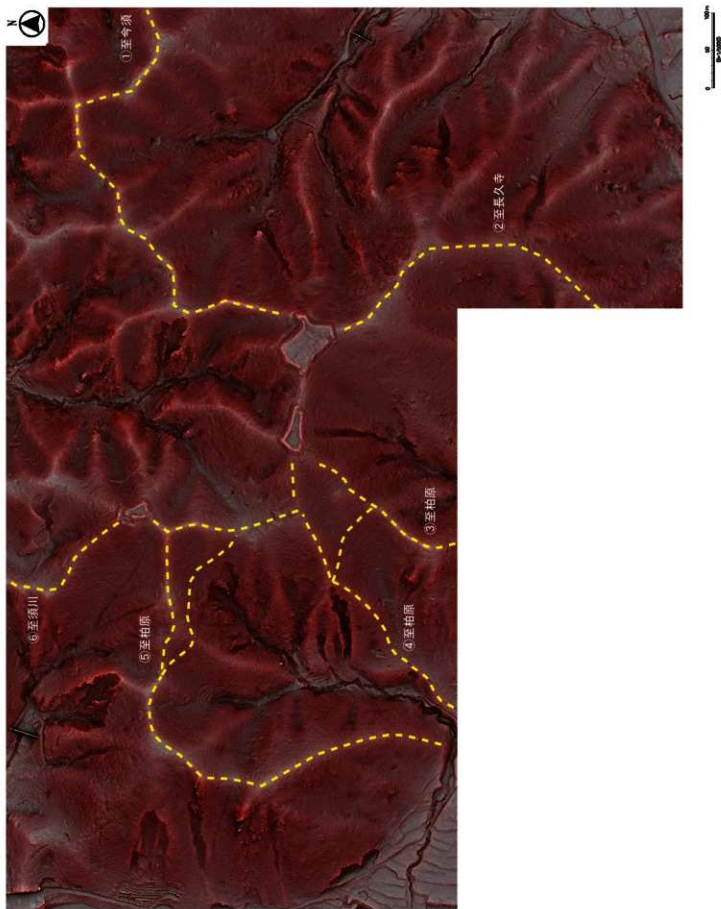


図17 長比城跡・須川山跡跡 想定登城ルート

第7章 発掘調査の成果

第1節 調査の目的と方法

長比城跡・須川山砦跡について、先述のとおり縄張り研究によって一定の評価がなされてきたが、考古学的な調査は行われてこなかったため、築城年代や曲輪内の建物構造については不明であった。そこで、築城年代の把握、曲輪内の建物の有無や建物構造の把握および土塁の構造確認を目的として発掘調査を行った。調査を行うに当たり、調査委員会および滋賀県文化財保護課に指導・助言を受けながら調査を実施した。

長比城跡・須川山砦跡は滋賀県米原市と岐阜県関ケ原町にまたがって所在しているが、今回は米原市側のみ発掘調査を実施することとなった。そこで現地視察の際に、文化庁から本市が補助金を受けて発掘調査を行う関係から確実に米原市域で調査ができるよう、現地に境界杭を設定して調査を実施するように指導を受けた。しかし、長比城跡はこれまで境界測量が実施されていなかったことから、調査開始前にアジア航測株式会社に測量を委託し、本市担当課と関ケ原町地域振興課および地権者立会いの下、境界杭の設置を行い、その後調査を実施した。なお、須川山砦跡に関しては平成15年度に地籍調査による測量が実施されており、現地に境界杭が残ることから境界測量が不要であった。

調査は、遺構の保存を前提に、トレンチおよび一部の拡張による遺構の確認、サブトレンチによる堆積状況および地山面の確認と土塁の規模・構造の把握を行った。トレンチの配置は、境界や植林などの制限がある中で必要かつ最小限の調査範囲で有効なデータが得られるよう、遺構の構造と土塁の構造を把握できるように設定した。

調査終了後は、ふるいをかけて出た砂を用いて遺構面を養生し、また土塁の断ち割り箇所およびサブトレンチを設定した箇所には土嚢で養生し、その後調査で出た排土を用いて埋戻しを行った。

各年度の調査面積と調査期間は以下のとおりである。

【令和3年度（2021）】

長比城跡 トレンチ3か所 調査面積 50 m² 令和3年（2021）6月8日～8月10日

【令和2年度（2020）】

須川山砦跡 トレンチ4か所 調査面積 15 m² 令和2年（2020）7月1日～8月11日

第2節 長比城跡の調査成果

1 調査区設定と順序

（1）調査区設定（図18）

長比城跡は、各曲輪の年代の把握と建物遺構および虎口構造の確認を目的として、東西曲輪にそれぞれ調査区を設定し確認調査を実施した。

西曲輪は、南虎口（遺構番号1-3）に長辺11m、短辺1m、面積11 m²の長方形の第1トレンチを設定し、調査を行った。調査中、遺構・遺物が確認されなかったことから、トレンチの中央部分から東西に拡張する形で、それぞれ長辺2.6m、短辺1.5m、面積3.9 m²の正方形の面的トレンチを土塁の法面部分に設定した。また、土塁の土層確認と構造の把握を目的として、拡張トレンチの北端にサブトレンチを設けた。

東曲輪は、南虎口（遺構番号2-4）に長辺13.2m、短辺1.5m、面積19.8 m²で第2トレンチを、曲輪（2-1）の第2トレンチから北西方角に当たる場所に、長辺6.5m、短辺1.5m、面積9.75 m²で第3トレンチを設定した。調査中、遺構・遺物が確認されなかったことから、第2トレンチから拡張する形で、北側に長辺2.6m、短辺2.2m、面積5.72 m²の面的トレンチを設けて遺構の有無を確認した。そして、土塁の土層確認と構造の把握、南虎口前面に設けられた平坦面の土層堆積状況の確認を目的として、第2トレンチにサブトレンチを2か所設けた。

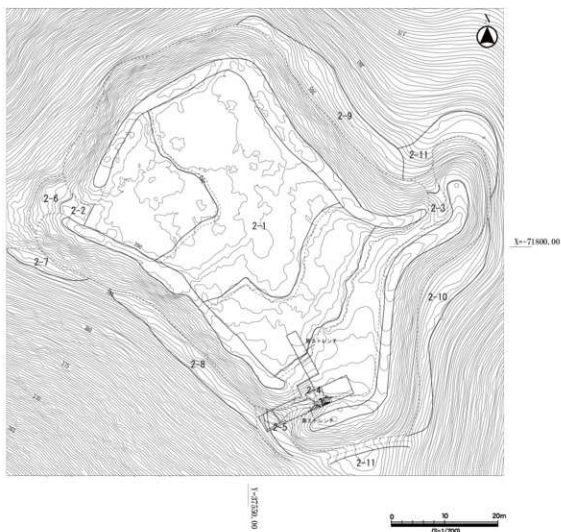
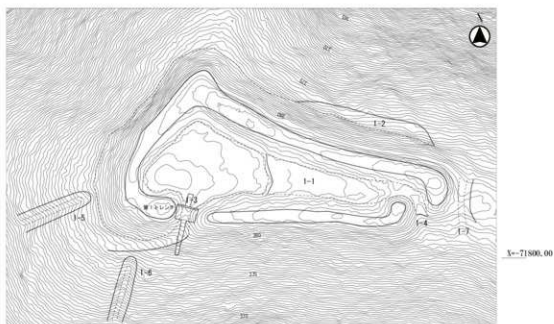


図 18 長比城跡西曲輪トレンチ配置図 (上)、長比城跡東曲輪トレンチ配置図 (下)

(2) 層序

西曲輪の層序について、地表面の標高は、375.8m～380.4mで、層厚5cm～10cmの表土である腐葉土（1層：10YR3/1 黒褐色砂質土）の下に、礫が混じる層（6層：7.5YR5/6 明褐色砂質土）が堆積する。6層は地山で、この層の上面（標高約375～380m）が遺構面とみられる。全ての層で遺物を確認できず、堆積時期は不明である。

東曲輪の層序について、地表面の標高は、383.4m～388.3mで、層厚5cm～10cmの表土である腐葉土（1層：10YR3/1 黒褐色砂質土）の下に、礫が混じる層（12層：7.5YR5/6 明褐色砂質土）が堆積する。12層は地山で、この層の上面（標高約383～388m）が遺構面とみられる。西曲輪同様、全ての層で遺物を確認できず、堆積時期は不明である。

2 調査の成果

(1) 西曲輪

第1トレンチ (図18～20)

表土直下5cm～10cmで地山である6層（7.5YR5/6 明褐色砂質土）を確認し、この層の上面で精査を行ったが、礎石や柱穴といった建物遺構を確認することはできなかった。

土塁の構造把握を目的として土塁の立ち割りを行ったところ、下層に自然地形が残されていることが分かり、その上に東側土塁は4層（5YR5/6 明赤褐色砂質土）、2層（5YR4/6 赤褐色粘質土）が堆積し、西側土塁は5層（5YR5/8 明褐色砂質土）、3層（7.5YR5/6 明褐色粘質土）が堆積していた。4層と5層は尾根を削平して平坦面を設けた際に出た土とみられ、礫が多く含まれていた。また、2層と3層は礫を全く含まない粘質土である。自然地形を残し、その上に礫を含む層と礫を含まない粘質土を積み上げて構築する手法は、須川山跡跡の土塁構築手法と共通する。

虎口を構成する土塁の法面勾配は比較的緩やかで、20～25度であった。また、土塁のすそを検出したことにより、虎口の開口が約75cmであることが分かった。

また、虎口の前面で切岸を検出した。切岸法面の勾配は40度と急勾配で、土の堆積状況から地山を削って切岸が構築されていることが分かった。土塁のすそおよび切岸を検出したことにより、虎口前面の通路の幅が75cmであることを確認した。

なお、遺物については第1トレンチで出た全ての排土をふるいに掛けたが確認されなかった。

(2) 東曲輪

第2トレンチ (図18、21～22)

表土直下5cm～10cmで地山層である12層（7.5YR5/6 明褐色砂質土）を確認した。この層の上面で精査を行ったが、礎石や柱穴といった建物遺構は確認されなかった。第6トレンチで遺構が確認されなかったことから、西にトレンチを拡張し、精査を行ったが、こちらでも建物遺構は検出されなかった。

建物遺構は確認されなかったが、虎口内側部分において東西方向に延びる土塁（土塁1）を検出した。土塁の標高は約386.6mで、土塁1の南側に当たる虎口内部との比高差は約1mを測り、土塁法面の勾配は25度である。土塁1の法面には黒粘質土（図22の7層：10YR2/2 黒褐色粘質土）によって礫が張り付けられていた。礫の材質はチャートで、地山を掘削した際に出たとみられる礫が使用されている。通路の横にある土塁は人の出入りにより崩れやすく、崩落防止のために礫が張り付けられたと考えられる⁽¹⁾。実際に張り付けられた礫の一部が崩落しており、土塁の南側にまともな礫が堆積していた。なお、この土塁1について、調査前は地表面観察において視認されていなかったが、検出された後で赤色立体地図を見直したところ存在を図上で確認することができた。

土塁1の構造確認を目的として、土塁1の南側にサブトレンチを設定した。調査の結果、下層に地山（12層：7.5YR5/6 明褐色砂質土）を確認し、地山の上に10層（7.5YR3/3 暗褐色砂質土）、8層（10YR3/4 暗褐色粘質土）、7層（10YR2/2

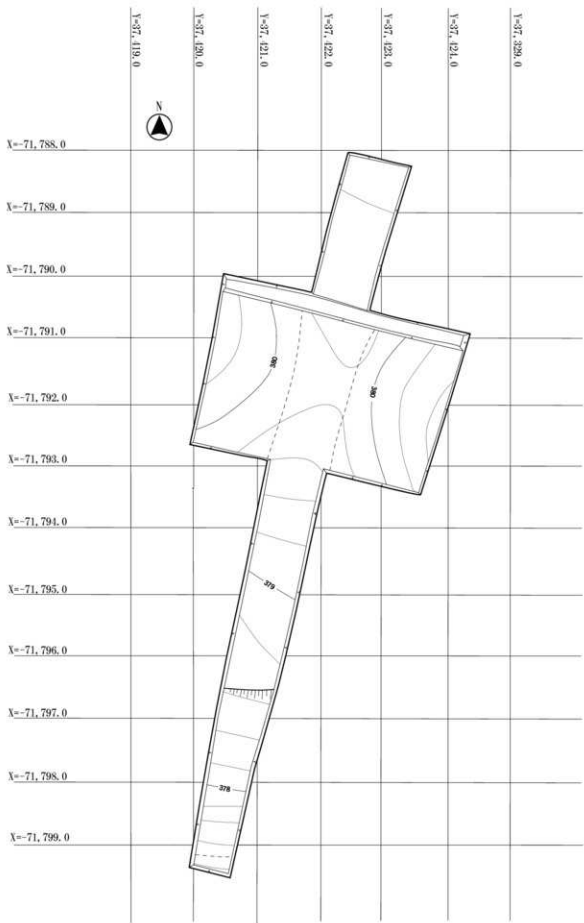
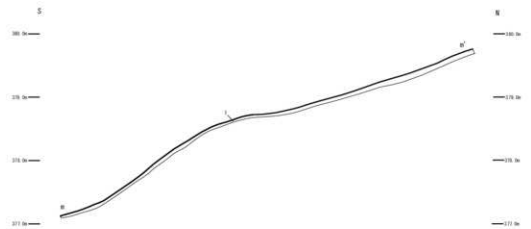
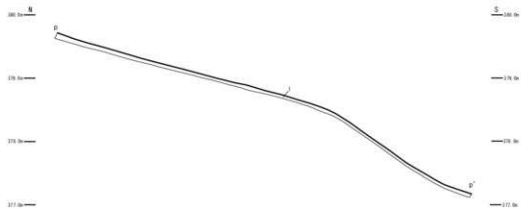


図 19 長比城跡西曲輪 第 1 トレンチ平面図



西壁断面図① S=1/60



東壁断面図② S=1/60



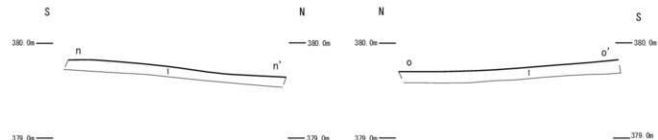
南壁断面図 S=1/40



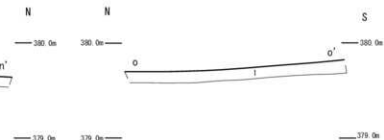
北壁断面図 S=1/40



サブトレンチ断面図 S=1/40



西壁断面図② S=1/40



東壁断面図② S=1/40



S

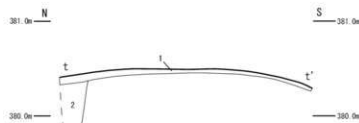
N



拡張トレンチ南壁断面図① S=1/40



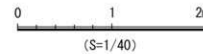
拡張トレンチ西壁断面図 S=1/40



拡張トレンチ東壁断面図 S=1/40



拡張トレンチ南壁断面図② S=1/40



(S=1/40)

層名	土質・土色	備考	
1層	Hue10YR3/1黒褐色砂質土	しまり弱い	
2層	Hue5YR4/6赤褐色粘質土	しまりやや強い 粘性あり	
3層	Hue7.5YR5/6明褐色粘質土	しまりやや強い 粘性あり	
4層	Hue5YR5/6明赤褐色砂質土	しまり強い	4~15cmの礫混じる
5層	Hue5YR5/8明褐色砂質土	しまり強い	5~10cmの礫混じる
6層	Hue7.5YR5/6明褐色砂質土	しまり強い	5~25cmの礫混じる

図20 長比城跡西曲輪 第1トレンチ土層図

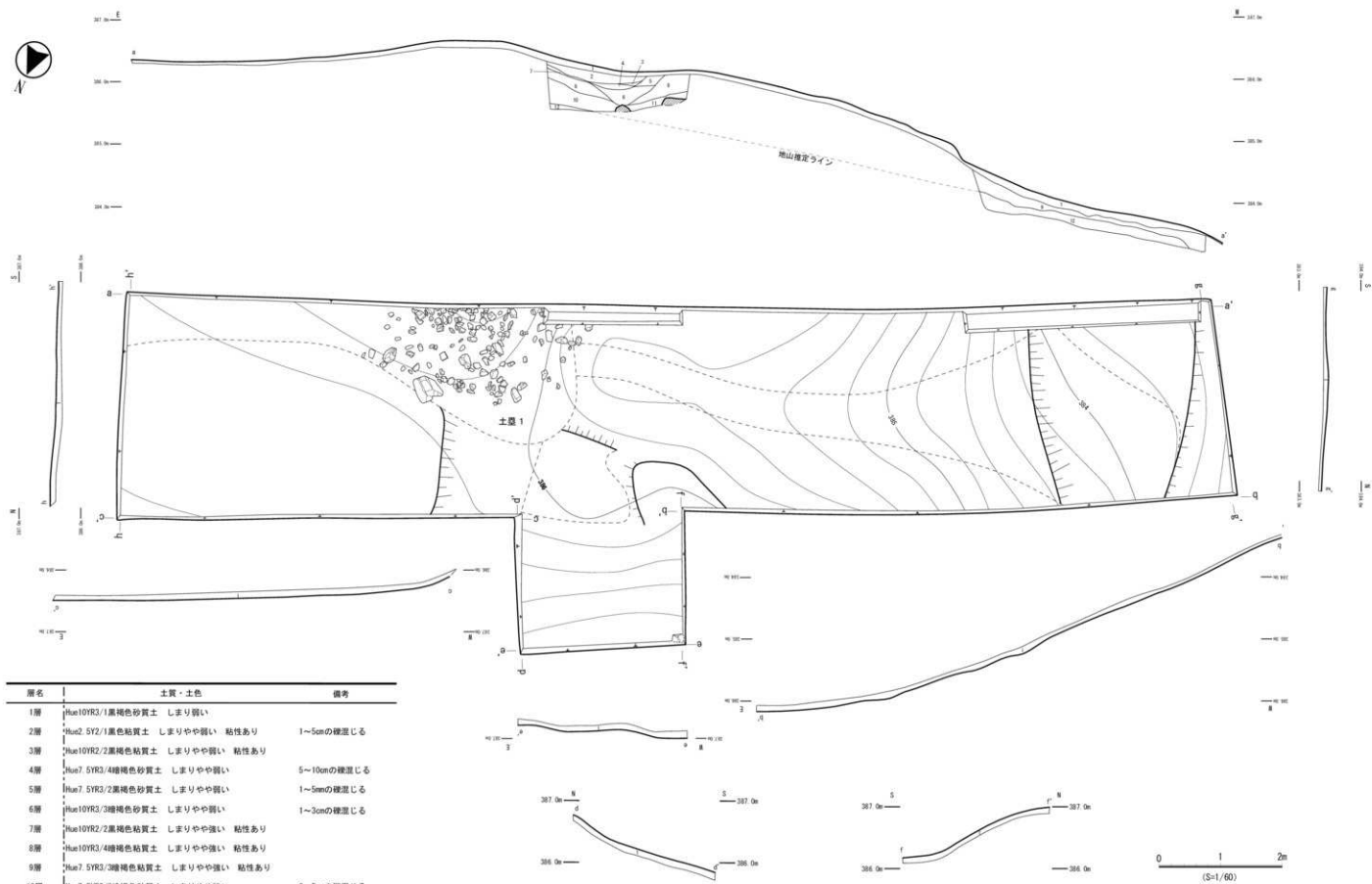


図22 長比城跡東曲輪 第2トレンチ平面図、断面図

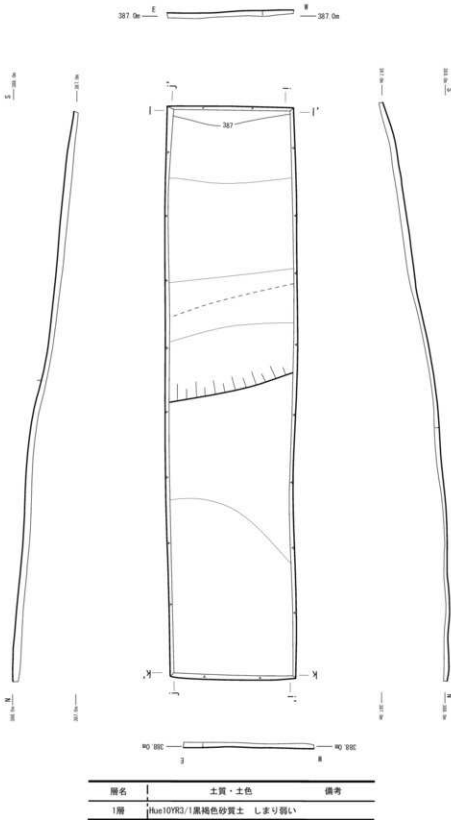
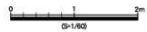


図 23 長比城跡東曲輪 第3トレンチ平面図、断面図



黒褐色粘質土)の順に盛土により構築されていることが分かった。また、虎口を構成する東側土塁の構造を確認するため、サブトレンチを延長したところ、東側土塁は11層(10YR3/3暗褐色砂質土)、9層(7.5YR3/3暗褐色粘質土)の順に盛土により構築されていた。そして、土塁1と東側土塁の間は6層(10YR3/3暗褐色砂質土)、5層(7.5YR3/2黒褐色砂質土)、4層(7.5YR3/4暗褐色砂質土)、3層(10YR2/2黒褐色粘質土)順に盛られ、最後に土塁1に黒色粘質土(7層)によって礫が張り付けられて土塁が構築されていることが判明した。

また、虎口前面に設けられた平坦面にサブトレンチを設定し、堆積状況を確認したところ、地山(12層:7.5YR5/6明褐色砂質土)の上に9層(7.5YR3/3暗褐色粘質土)を盛って造成されていることが分かった。この平坦面の幅は約2.4mを測り、南東から北の方向にかけて、スロープ状となっている。

なお、遺物については第2トレンチで出た全ての排土をふるいに掛けたが確認できなかった。

第3トレンチ (図18、23)

表土直下5cm~10cmで地山である12層(7.5YR5/6明褐色砂質土)を確認した。この層の上面で精査を行ったが、礎石や柱穴といった建物遺構を確認することはできなかった。

なお、遺物については第3トレンチで出た全ての排土をふるいに掛けて調べたが確認できなかった。

3 小結

西曲輪について、南虎口において礎石や柱穴が確認されなかったことから、恒常的な門が存在していなかった可能性が考えられる。また、根太などの土台の上に柱を据えた門の可能性も想定されるが、開口部の下部が備斜状に盛り上がり、土台を据えにくい構造となっており、かつ遺構面で土台を据えた痕跡は検出されなかった。仮に、土台による門があったとしても、土塁法面の勾配が20~25度と非常に緩やかであり、土塁と門との間にスペースができるため、門が機能しない構造になってしまう。なお、土塁法面にはそのスペースを遮るような扉や柵を設けた跡は今回検出されなかった。ただし、今回の調査区が南虎口部分に限定されていることから、曲輪内側に建物が存在した可能性も考慮しなければならないだろう。

西曲輪の土塁について、須川山砦跡の土塁と同じく、自然地形を残しその上に礫を含む土と含まない粘質土を盛って土塁が築かれていることが分かった。また、虎口内の土塁のすそおよび虎口外側において切岸を検出したことにより、虎口内外の通路幅が約75cmの規格で設定されていることも確認できた。検出した切岸は削り出して設けられており、法面勾配は40度と急勾配である。横矢がかかる虎口前面の通路へと動線を誘導するために、この切岸や2本の堅壁が設けられたとみられる。

東曲輪においても、建物遺構や遺物は確認されなかったが、今回東曲輪南虎口の虎口内側部分において新たに土塁1が検出された。従来は、地山を掘りくぼめて設けられた、直進で曲輪に進入する内枳形状の虎口と考えられてきた。しかし、虎口の内側においてこの土塁1を新たに検出したことにより、曲輪へ至る動線に折れを有する内枳形状の虎口であることが判明し、従来考えられてきた虎口よりも発達した虎口が採用されていることが明らかとなった。南虎口およびその構成要素である東側土塁が先行して存在し、後の改修により土塁1が築かれた可能性も考えられたが、両土塁の土層の堆積状況から、東側土塁と土塁1が同時に築かれたことが分かった。

今回の調査結果により、東曲輪の虎口から曲輪に至る動線について、以下のルートが想定される（図24）。

- ① 堀切・土塁により狭められた通路を通る。
- ② 虎口の前に設けられたスロープ状の平坦面に入る。平坦面で右に折れ、虎口内部へ入る。
- ③ 虎口内は外側から内側に掛けて狭まる通路を通り、土塁1に当たり、左に折れる。
- ④ 一段高いテラス状の平坦面に入り、土塁・切岸にあたり右に折れ、土塁の横を設けられたスロープ状の通路を土塁1の横を通り曲輪内部へと至る。

虎口の前面に設けられた平坦面（②）の標高は383.6mで、虎口内部の標高（③）は385.6mを測る。テラス状の平坦面（④）の標高は386mで、曲輪内部の標高は386.3mを測り、虎口前面の平坦面（②）と曲輪内部とに比高差が2.7mあり、非常に高低差のある構造となっている。虎口前面に設けられたスロープ状の平坦面（②）に至る直前の通路（①）は、土塁や横堀により幅が狭くなっているが、平坦面（②）は、わざわざ盛土を以てまで平坦面の面積を広げている。この東曲輪の南虎口は、野瀬山に築かれた曲輪群の中で最も美濃側に位置し、東山道から尾根を伝って直接この虎口に至ることができることから、この虎口は出撃を意識して、平坦面の幅や虎口内の動線幅を他の虎口よりも広めに確保したのではないだろうか。



図24 東曲輪南虎口の動線模式図

註

（1）土塁や斜面に縄を張り付けたもしくは積み上げる事例はほかでも確認されており、例えば鹿背山城跡の主郭1-1の土塁Cの斜面において、円礫集積遺構が確認されている。

参考文献

大坪州一郎 2018『鹿背山城跡総合調査報告書（発掘調査編）』（木津川市埋蔵文化財調査報告書 第19集）、木津川市教育委員会

第3節 須川山砦跡の調査成果

1 調査区設定と層序

（1）調査区設定（図25、26）

須川山砦跡は、築城年代の把握、建物遺構の確認を目的として、主郭（遺構番号3-1）の中央東寄り²に2m×3mでトレンチ（第4トレンチ）を設定し、調査を実施した。その後、第1トレンチから南と西の方向に拡張する形で、幅0.7m～0.8mの面的トレンチ（第5、第6トレンチ）を設けて遺構の有無を確認した。そして、土塁の規模・構造の把握を目的としたトレンチ（第7トレンチ）を東に設けて、土塁の断ち割りを行った。

（2）層序

調査区内における地表面の標高は、352.06m～352.185mで、層厚約10cmの表土である腐葉土（1層）の下に、一部土塁から流れたとみられる土（3層）が堆積し、縄が混じる層（7層）と続く。7層は地山で、この層の上面（標高約352m）が遺構とみられる。全ての層で遺物を確認できず、堆積時期は不明である。

2 調査成果

第4トレンチ (図25~27)

建物遺構の検出を主目的として、主郭（遺構番号3-1）の中央東寄りに長辺3m、短辺2m、面積6㎡の正方形のトレンチを設定した。

表土掘削後すぐに地山と思われる層（7層）を検出した。下層を確認するためにトレンチの北端と南端でサブトレンチを設定して検出した面より更に10cmほど下げたところ、この層の堆積が続くことから7層が地山であると判断した。この層の上面が遺構面と考えられることから、7層上面で精査を行ったが、礎石や柱穴といった建物遺構は検出されなかった。なお遺物について、第4トレンチで出た全ての排土をふるいに掛けたが確認できなかった。

第5トレンチ・第6トレンチ (図25~26、30~31)

第4トレンチにおいて遺物・遺構が確認されなかったことから、第4トレンチの西南隅からL字状に拡張する形で、長辺4m、短辺0.8m、面積3.2㎡の長方形のトレンチ（第5トレンチ）、長辺4m、短辺0.7m、面積2.8㎡の長方形のトレンチ（第6トレンチ）を設定した。また、土層の堆積状況の確認と後世の調査で検証が行えるよう、第4トレンチと第5トレンチおよび第4トレンチと第6トレンチの間にセクションベルトを設定した。

第4トレンチと同様に表土直下約10cmで7層を確認した。この層の上面で精査を行ったが、礎石や柱穴といった建物遺構を確認することはできなかった。なお、遺物については第5トレンチ、第6トレンチで出た排土を全てふるいに掛けたが確認されなかった。

第7トレンチ (図19、23~25)

土塁の構造把握を主目的として、第4トレンチ南東隅から延長する形で長辺5.65m×短辺0.5m、面積2.825㎡の長方形のトレンチを設定した。

第4～6トレンチと同様に表土直下約10cmで遺構面を検出した。土塁の高さは約1.5mを測り、雨などで少しは土が流れている可能性はあるものの、大きく崩れておらず、ほぼ当時の高さを保っていると考えられる。土塁の上部幅1.5m前後で、下部幅については曲輪側で土塁の立ち上がりを確認することはできたものの、斜面側土途中から関ヶ原陣に位置し、全てを掘削することができなかったが、下部幅は6m程度であると考えられる。

土塁の横断面形は台形状を呈する。土塁法面の勾配は曲輪側35度、斜面側45度を測り、曲輪側の方が傾斜は緩くなっている。土塁の堆積状況について、土塁の下層に地山層である7層（5YR4/6赤褐色砂質土）が堆積しており、尾根を削平して平坦面が設けられる際に、この部分だけ削平されずに残されたとみられる。この7層の上に切岸側から6層（5YR4/6赤褐色砂質土）、5層（10YR4/6褐色粘質土）、4層（5YR4/6赤褐色砂質土）3層（10YR4/3にぶい黄褐色粘質土）が盛土されていることが分かった。6層と4層は土質、土色などの土の状態から尾根を削平した際に出た土とみられ、礫が多く含まれていた。また、5層と3層は礫を全く含まない粘質土である。礫を含む層と含まない層と交互に積まれて構築されていることが分かった。なお、この粘質土の出どころは不明であるが、斜面側に礫を含まない粘質土が堆積していることが多いことから、おそらく斜面を切岸にした際に出た土が使用されているのではないかと考えられる。

なお、遺物については第7トレンチで出た排土を全てふるいに掛けたが確認されなかった。

3 小結

調査の結果、今回の調査区内において建物遺構を確認することはできなかった。曲輪に建物には設けられず、陣を敷いただけの可能性が考えられるが、岩盤を削って平坦面が設けられており、ただ駐屯するのみならここまでの削平は不必要であることから、何らかの建物が設けられていた可能性も考えられる。多田嶋久が陣城において軽量の土台建物が使

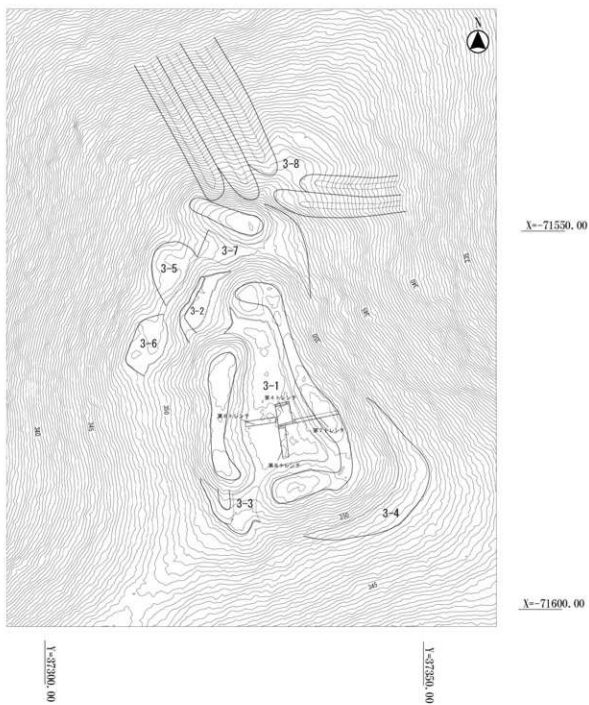


図25 須川山群跡 トレンチ配置図

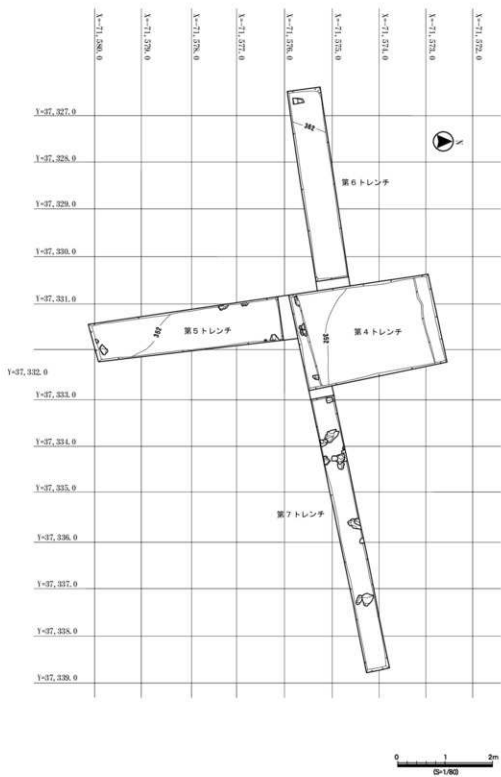
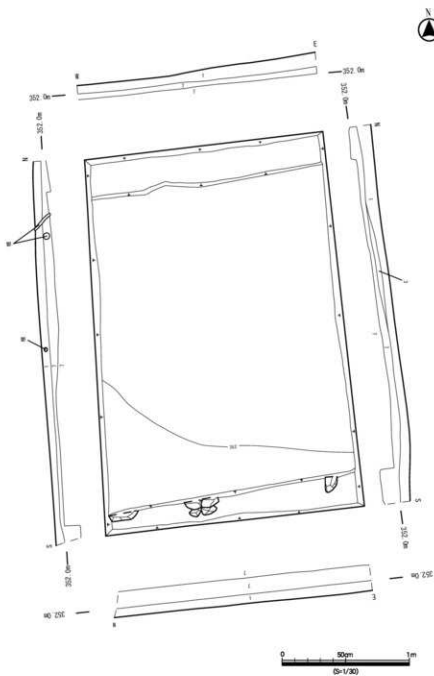
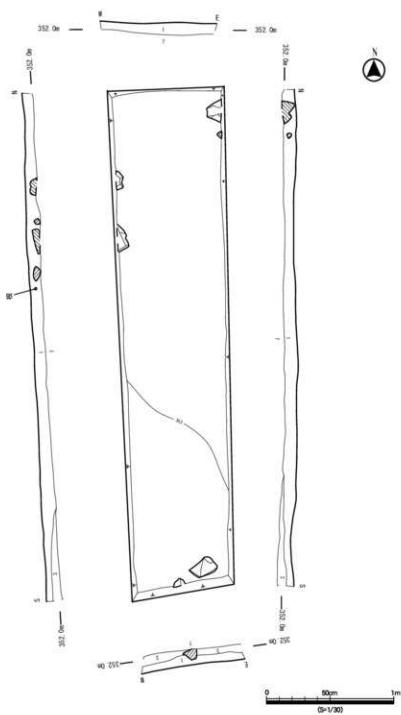


図26 須川山遺跡 平面図



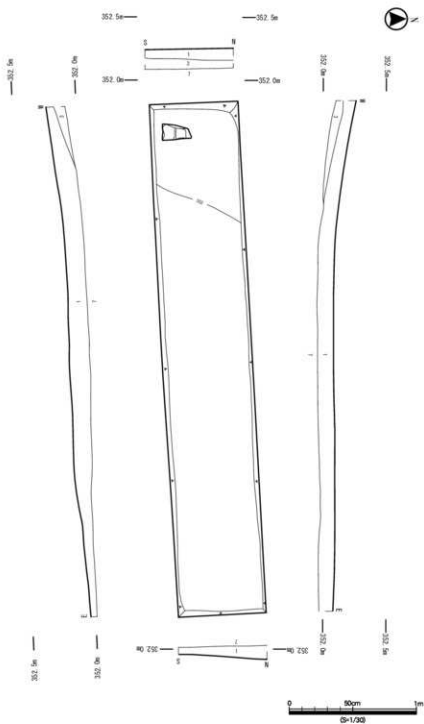
層名	土質・土色	備考
1層	Hue10YR3/1 黒褐色砂質土	腐葉土
3層	Hue10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	
7層	Hue5YR4/6 赤褐色砂質土	2~20cmの礫を含む

図27 須川山砦跡 第4トレンチ平面図、断面図



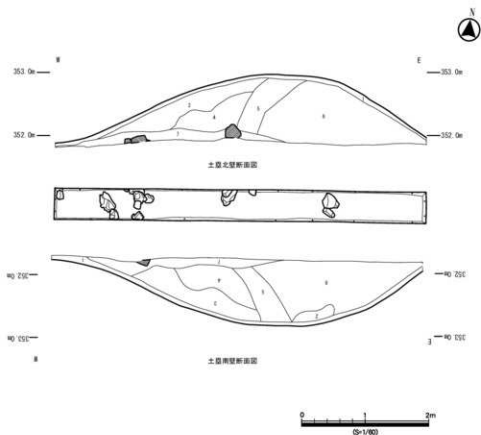
層名	土質・土色	備考
1層	Hue10YR3/1 黒褐色砂質土	腐葉土
3層	Hue10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	
7層	Hue5YR4/6 赤褐色砂質土	2~20cmの礫を含む

図28 須川山岩跡 第5トレンチ平面図、断面図



層名	土質・土色	備考
1層	Hue10YR3/1 黒褐色砂質土	腐葉土
3層	Hue10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	
7層	Hue5YR4/6 赤褐色砂質土	2~20cmの礫を含む

図29 須川山跡跡 第6トレンチ平面図、断面図



層名	土質・土色	備考	解釈
1層	Hue10YR3/1 黒褐色土	腐葉土	表土
2層	Hue10YR3/1 黒褐色土	根による攪乱	攪乱層
3層	Hue10YR4/2 にぶい黄褐色粘質土		盛土層
4層	Hue5YR4/6 赤褐色土	2~15cmの礫を含む	盛土層
5層	Hue10YR4/6 褐色粘質土		盛土層
6層	Hue5YR4/6 赤褐色土	5~15cmの礫を含む	盛土層
7層	Hue5YR4/6 赤褐色土	2~20cmの礫を含む	地山

図30 須川山砦跡 第7トレンチ平面図、断面図

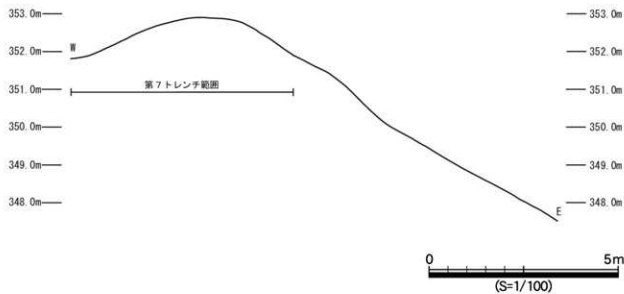
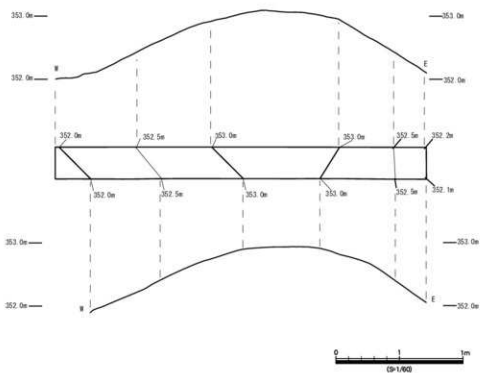


図31 土塁道構面エレベーション図（上）、現地表面エレベーション図（下）

用された可能性を指摘しており①、須川山砦跡においても地盤が強固であることから、根太を土台とした建物が建てられていた可能性がある。また今回、調査面積が15㎡と限られることから、今回の調査区外に建物遺構が存在する可能性も想定しなければならないだろう。

建物についてまとめると、以下の可能性が考えられる。

- ① 建物が設けられず障を敷いただけの可能性
- ② 地盤が強固であることから、根太を土台とした軽量建物が建てられた可能性
- ③ 調査面積に限られることから、今回の調査区外に建物遺構が存在する可能性

須川山砦跡からは遺物が出土しなかったことから、築城年代は不明であるが、土層の堆積状況などから改修された可能性は低く、城が機能していた時期は一時期であると思われる。

土塁の構造について、先述のとおり下層に自然地形を残し、その上に尾根を削平した時に出た「礫を多く含む砂質土」と「礫を含まない粘質土」との五層により斜面側から盛られて構築されていることが判明した。

土塁の構築工程について盛土の様相から、以下の工程が推測される(図23)。

- ① 尾根を削平して平坦面が電けられる際に、土塁を構築する部分についてはあらかじめ自然地形を削り残す。
- ② 斜面側に土塁の核になる土を盛る。尾根を削平した際に出た土が使用され、高さを稼ぐためや土塁を安定させるために大きめの礫が多く入れられる。
- ③ ②で盛られた土が曲輪側に崩れないよう、粘質の強い土を盛る。また、しまりがかなり強いことから、上面をたたき固められている可能性が考えられる。

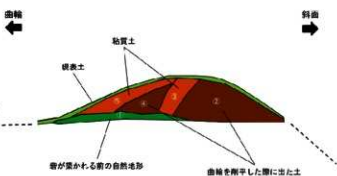


図23 須川山砦跡 土塁模式

- ④ 尾根を削平した土を斜面側から曲輪側に斜め積みをする。②よりも小ぶりの礫が多く含まれる。
- ⑤ 粘質の強い土を斜面側から曲輪側に斜め積みをする。しまりがかなり強いことから、③同様に上面がたたき固められている可能性が考えられる。

下層に自然地形が残されていることから、高さを稼ぐために自然地形を生かしつつ、合理的に土塁が構築されていることが分かる。また、出た土をそのまま掻き揚げて構築されるのではなく、土の使い分けがなされており、自然地形が残されていることと併せて考えると、築城前に土塁の位置などの詳細な計画・設計(縄張り)が行われ、その後土木工事(普請)が行われたことが想定される。

また、工程の②と③で土塁の高さが決定しており、斜面側を遮断する土塁として完結しているものの、更に工程④、⑤を追加し土塁の上部幅を拡張している。須川山砦跡は曲輪面積が狭い城にもかかわらず、あえて曲輪面積を狭めてまで、土塁の上部幅を確保していることから、土塁上に構築物が設けられた可能性がある。今回、土塁上面で建物遺構は確認されなかったが、土塁の構造から根太などの土台を用いた櫓列、もしくは塙などの存在が推測される。

註

- (1) 多田 暢久 2003 「織豊期城郭における軽量礎石建物について—近畿地方の陣城事例を中心に—」『織豊期城郭 第8号』織豊期城郭研究会

第4節 まとめ

今回の発掘調査の成果は、以下の3点に集約される。

- ① 長比城跡・須川山砦跡において建物遺構・遺物が確認されなかった。
- ② 土塁の構造が判明し、長比城跡と須川山砦跡の土塁の構築手法に共通性が見い出せる。
- ③ 法面に石を張り詰めた土塁を検出したことにより、虎口内の動線が判明した。

以上の3点についてそれぞれ考察を試みる。まず、建物遺構・遺物が確認されなかった点についてみていく。

陣城における建物の様相について、多田暢久は『織田文書』に取められている織田信長から樋口直房・木下秀吉へ宛てた書状に「佐和山おさへの諸執出(砦)之道具共、兩人かたへ可預置候、小谷表之普請之用ニすべく候、(後略)」とあることから、陣城内の建物が解体して持ち運び可能な一定の規格材によるプレハブ造りだった可能性を推測している①。さらに多田は陣城で遺構が検出されない点に注目し、地面への直置きした根太を土台とする建物の存在を示唆している。

また、木島孝之は中世城跡、特に山城の発掘調査において、多数の建物跡が検出されることが少ないことから、①痕跡が残りにくい建物が主流を占めていた、②元より建物自体が殆ど存在しなかった可能性を提示している②。そして、一定の期間、風雨・雪・日射を凌ぐ必要があることから山城にそれなりの数の建物が存在したとし、②の可能性を否定しつつ痕跡が残りにくい建物について考察しており、地面に直置きした地覆土台の上に柱・床束を据える「直置地覆土台式」建物や木製礎盤の上に柱・床束を据える「木製礎盤式」建物が山城に設けられていた可能性を示唆している。そして、中世山城の発掘調査では、全体的に建物跡の検出が少ない傾向にあるのは、掘立柱建物よりもむしろ「直置地覆土台式」建物や「木製礎盤式」建物が主流を占めていた可能性があることと述べている。

長比城跡については、今回建物の存在が想定される曲輪部分は調査しておらず、虎口部分のみの調査であることから、建物遺構が検出されなかったとみられる。曲輪の中心部分を調査した須川山砦跡は、もともと建物自体が設けられなかった可能性があるものの、作事遺構である建物遺構が検出されなかった理由として、上記のとおり多田や木島が指摘している遺構として残らない根太などの土台を据えた建物やプレハブ工法の建物が存在していた可能性も考えられる。

また、今回長比城跡・須川山砦跡において遺物が全く出土しなかったことから、遺物による両砦(城)の築城年代は不明である。陣城において遺物が出土しないことは多く、天正6～8年(1578～80)の三木城包圍戦で織田軍の付城として築かれた慈眼寺山城跡、加佐山城跡、這田村法界寺山ノ上付城跡、明石道峯構付城跡(兵庫県三木市)などの発掘調査において、城が機能していた時期の遺物は出土していない。このとおり、陣城では遺物が出土しないことが多く、陣城には遺物として残らない道具で飲食料が供給されていたか、もしくは城として機能していた期間が短いことから廃城後に持ち出された可能性が考えられる。長比城跡については虎口部分を対象とした調査であったことから、遺物が出土しなかったとみられるが、須川山砦跡については、上記の可能性も検討しなければならないだろう。

上記のとおり、陣城において建物遺構・遺物が出土しないことが多く、今回の調査において長比城跡・須川山砦跡で建物遺構・遺物が確認されなかったことから、両砦(城)が陣城であることが推定できる。

次に土塁の構造について、長比城跡・須川山砦跡の土塁は下層に自然地形を残し、その上に「礫を多く含む砂質土」と「礫を含まない粘質土」との互層により構築されていることが明らかとなり、両砦(城)の土塁の構築手法が共通することが確認できた。また、土塁に改修された痕跡などを確認することができないことから、両砦(城)が機能したのは一時期であると推測される。

最後に虎口内の動線について、これまで陣城における虎口内の動線について不明な点が多かった。しかし、今回東曲輪の南虎口部分の調査において、虎口内側に東西方向に延びる土塁を検出したことにより虎口内の動線を確認することができ、従来は折れを持たない内枳形状の虎口だと考えられてきたが、虎口内で折れを持つより発達した内枳形状の虎

口であることが明らかとなった。

註

- (1) 多田 暢久 2003「織豊期城郭における軽量礎石建物について—近畿地方の陣城事例を中心に—」『織豊城郭 第8号』織豊期城郭研究会
- (2) 木島 孝之 2021「考古資料（柱穴・礎石）から城郭の建物の姿を推定できるのか」『城郭談話会 第4回特別例会 考古資料〔遺構・遺物・層位〕から城郭建築〔作事〕に迫る！—その可能性と限界を探る—』城郭談話会

第8章 考古学的・歴史学的分析

第1節 城郭構造からみた「姉川・小谷合戦関連連城郭群」について

高田 徹

はじめに

長比城・須川山砦は、隣接した位置にあること、縄張りに類似性があることをもって、従来から同時期に、同じ築城主体により、一体的に築かれたといった評価がなされてきた。その際、しばしば「別城一郭」「一城別郭」といった縄張り評価がなされることが多かった。本来、江戸期の軍学用語であった「別城一郭」「一城別郭」だが、意外に文献に基づいて語られることが少ない。そこで本稿では、まず「別城一郭」「一城別郭」について整理した上で、長比城・須川山砦においてどのように用いるべきかを提言する。

次いで長比城・須川山砦について、主に虎口の配置と選地面を通じて一体性・連携性の有無等について検討する。関連して長比城・須川山砦の縄張り上の特徴について概観する。

続いて朝倉・浅井氏の築城術に触れた上で、「姉川・小谷合戦関連連城郭群」中の城郭、それらと関係性を有する城郭(検討対象城郭)について概要を述べる。その上で「姉川・小谷合戦関連連城郭群」の価値について触れることにしたい。

1 「別城一郭」「一城別郭」について

長比城の縄張りについては、「別城一郭」あるいは「一城別郭」と評価されることがある。これらは江戸期の軍学において用いられる用語である。

一例として山鹿素行『武教全書』(廣瀬1944)での記述を見てみると、「分数。一城別郭、別郭一城」項で「分散するときは一城別郭、別城一郭也」とし、一説として一つの城に堀・土塁をもって区画したのが「一城別郭」、すでに別郭となっているもの、互いに連携するものを「別郭一城」と説く。また本城を二つ構え、一方に人質を入れ置き、あるいは副将軍の居城とした上で、敵が攻めてきた際には連携して撃退するものを「一城一郭」とであると説明している。

一方、用語辞典として定評のある『日本城郭辞典』(鳥羽1971)では、「別城一郭」と「一城別郭」の説明は「城とは城全体を、郭とはその内部の区画をいう」と、ほぼ同内容の説明から始まっており、両者を明確に区分するには至っていない。

村田修三氏は、「一城別郭」は並び立つ主要な曲輪の一つが陥落しても、他の曲輪をもって奪還できるような構えを指すとする(村田1981)。「別郭一城」は、城内の区画された曲輪どうしが援護し合って、一体的に防御を強化する縄張りをいう、とする。また「別城一郭」は、「それぞれ単独の城としての縄張りを備えた二つの城が、近接して存在し、互いに支援し合って一つの作戦を行えるようになったものをいう」とも述べている。村田氏によれば「一城別郭」と「別城一郭」は他の面からの言い換えた用語であるという。その上で村田氏は、「近世城郭では該当しそうなものがなく、それぞれの曲輪が別個の機能を分け持つ程度の解釈に止めるのが良い」と指摘している。

軍学においても解釈は一樣ではなく、堀・土塁によって区画される範囲、区画ごとの距離間等が具体的に示されるわけではない。当然ながら中世史料に登場する用語ではなく、江戸期の軍学において後付けされた見方と言えよう。それ放だろるか、『武教全書』も『日本城郭辞典』も、抽象的、循環的な記述に止まっている。

そもそも中世城郭の縄張りをどれだけ念頭に置いたものであったのか、多分に疑問視されるものである。往々にして地形的影響を受ける中世山城の場合、鞍部を介して独立的な曲輪が設けられる例が散見されるし、自然地形の尾根を挟んで(距離をあけて)出曲輪が設けられることも然りである。

長比城の場合、東西に尾根を介して二つの曲輪(西曲輪・東曲輪)が並ぶ。これら曲輪はそれぞれ独立した虎口を有し、全体が土塁によって囲い込まれて、完結した縄張りを呈している。両者は一本のほぼ自然地形とな

った尾根を挟んで離れており、互いに虎口を対峙させたかのような配置である。少なくともほぼ自然地形となった尾根を堀や土塁等で連結したり、取り込んだりした形跡はない。

一方、両者の距離は約35mに過ぎず、向かい合う虎口を十分に視認できるほどである。こうした距離間、位置関係で見るとならば、両者を「一城」とみなし、「別郭」どうして構成されていたとみなすことは可能であろう。一方で両者を「別城」とみなし、それが「一城」的に機能していたと想定することもできる。

また、今のところ遺物の出土もなく両者の時期差はおろか、それぞれの構築時期を考古学的に明らかにすることもできない状況にある。

しかしながら、近接した二つの曲輪は虎口が向かい合うことから、中間のほぼ自然地形となった尾根上が通路であった点は疑う余地がない。そして両者が連携して、効果的な防御を意図していたこともほぼ確実である。現代において細部におけるシミュレーションは如何様にもできるわけで(往時においても予測外の戦闘は当然ありえたことだろう)、残された遺構から「一城別郭」か「別城一郭」か、問うこと自体が非生産的である。むしろ、独立的な曲輪が併存する状態を端的に示すといった範囲内で、こうした用語を使うか、あるいは「一城別郭的」、「いわゆる別城一郭」等と用いるのが妥当であり、現実的であるまいか。もちろん東学用語以外に置き換えることもできないはないが、一定程度研究者間で浸透している状況もあり、遺構の状態を伝えやすい側面もある。曲輪が散在がちになる山城の場合、どこまでが「一城」の範囲とみなされていたか躊躇われる場合は意外と多いものである。

そもそも良質な資料である『信長公記』にいう「たけくらべ」の範囲さえ決して明らかとはならない。それは敵対勢力である織田方による呼称に過ぎず、実際に構築・維持した浅井・朝倉方がどのように呼称していたかは明らかではない。城郭の範囲とて、攻め手・守り手で一致したとは限らないであろう。こうした点も、念頭におく必要がある。

2 長比城と須川山砦の一体性

先に見たように、長比城の西曲輪と東曲輪はそれぞれ独立的な配置ながら、互いに虎口を向かい合わせにしており行き来ができる。加えて近接する位置関係にあり、「一城別郭的」等と言いうる造りとなる。ならば西曲輪の尾根続きにある須川山砦との関係性はどうかだろうか。

長比城西曲輪から西へ延びた尾根を下ると、北へ向かって延びる鞍部がある。その先にあるのが須川山砦となる。アップダウンはあり、途中で明瞭な城郭遺構こそ見られないが、両者は一続きの尾根でつながっている。

ならば虎口・通路の位置関係ではどうか。須川山砦の南側の虎口は、西曲輪に向かう尾根に対して開いている。ところが西曲輪は、須川山砦に続く尾根とは直結しない。須川山砦側から尾根を上がってくると堀切こそ設けられていないものの、西曲輪の西側土塁が逆断している。西曲輪の西側虎口の両脇には、ハの字形に開いた堅堀を設けている。これら堅堀に挟まれた間に虎口から下る通路があったのは確実であり、通路は現在の登山道と同じく南西へ延びる尾根を下っていたと考えるのが自然である。堅堀に挟まれたすそ部辺りからトラバースすれば、須川山砦方向に行き着くことはできる。さほど傾斜が急なわけではないが、若干迂回する形となる。西曲輪の虎口の向きと通路の方向性から言えば、須川山砦との連動性はいくらか弱いと言わざるを得ない。

しかしながら西曲輪・東曲輪と須川山砦は、縄張り上の共通する特徴を有している。すなわち① 曲輪周囲に土塁を全周させる。② ①に関わるが土塁の占める割合が大きく、内側の曲輪の規模を狭めている。③ 土塁の天端幅が広がったところが多い。④ 土塁の外側裾部に、犬走り状のわずかな平地が延びたところがある。⑤ 小規模ながら二つ以上の虎口を有する。⑥ 折りを有する外柵形状の虎口を持つ。⑦ 曲輪の端部に虎口が存在することにより、曲輪内を横断する通路が想定できる。等である。

加えてこれらの近接性、一続きの尾根上に位置することも踏まえれば、やはり両者の関係性は強く、軍事的な連携性を持っていたと思えるのである。

ここで西曲輪・東曲輪・須川山砦の虎口の開口部(向き)を通じて、その行き先を考えてみる。厳密に往時の

道の位置を明らかにするのは難しい。ただし一般的には虎口に近接し、上り下りしやすい尾根を下る道があったと認識するのが自然であろう。堀切や堅堀で遮断する尾根筋ならば、基本的に道は延びていなかった可能性が高いとみられる(註1)。

図33は明治39年の地形図「近江長浜」に、各虎口から想定される方向性(→)道を、矢印で模式的に書き込んだものである(ただし、互いに向かい合う位置にある虎口に関わるものは除いてある)。図33によれば、東曲輪の北虎口からの道は、主尾根を東へ下れば岐阜県関ケ原町妙応寺付近へ至る。ただし主尾根上には、やや起伏がある。主尾根途中からは南東方向の長久寺へ下りすることもでき、これは現在も山道として利用されている。また主尾根から北側へ派生する尾根を下れば、岐阜県関ケ原町妙応寺と米原市大野木を結ぶ道と交差する。中狭川支流に沿った道であり、須川山砦の北側で峠越えとなる(以下、須川道と仮称する)。主尾根からこの方面へ下る尾根は、いずれも傾斜がきつくない。上りやすく、下りやすいといえる。

南虎口からは、そのまま南へ尾根を下り、東山道が走る米原市長久寺近くに至ったとみられる。西曲輪の西側虎口からは、これも尾根を下って東山道が走る米原市柏原の神明神社近くに至ったとみられる。これは現在の登山道にほぼ等しい。

一方、須川山砦の北側虎口からは尾根をそのまま下れば北西麓の大野木集落に至る。大野木集落からであれば、須川道はすぐ先にある。尾根上を進めば須川道に至ることができるのだが、こちら側の尾根には堀切と堅堀群を配している。須川道側からの侵入を強く拒み、そちら側への出撃を抑制していたとみられる。南虎口から続く尾根を南下すると、西曲輪直下では堅堀に阻まれて若干迂回を要するが、比較的スムーズに移動は可能となる。

上記の点から東曲輪は南側の東山道と須川道、西曲輪は東山道を、それぞれ押さえられる位置に築かれていることが分かる。一方の須川山砦も須川道を押さえられる位置に築かれているが、東曲輪よりは近接する。須川道に対し、一層強く干渉できる位置に築かれていたのが須川山砦と言えよう。

私見によれば街道を見下ろす位置、街道へ繰り出すことができる城郭は、付近において有利な戦場が展開できる。地の利を生かし、後方(城郭)を拠り所として戦場に特化することが可能となる。状況に応じて城郭から出撃・退却、そして籠城することができる。そのため道を通行しようとする敵対勢力は、城郭が存在することにより軍事行動に障害・支障が生じるわけである(高田2017)。これこそ城郭が道を押さえられることにほかならない。

このように東・西曲輪(長比城)と須川山砦を併せることで、東山道と須川道を押さえられる効果が期待できる。しかしながら、これでは付近の道を押さえられる上では不十分である。周知のように付近は米原市と関ケ原町の境界部であり、山地が狭まる。そこを通過する道も隘路状となったところがあり、山地を抜ける道自体も限定化されたものとなる。こうした中、須川山砦の北約3.5kmの位置には北国脇往還が走っている。迂回路となるが北国脇往還を利用すれば、東・西曲輪(長比城)や須川山砦による直接的な干渉を受けることはない。

ところが北国脇往還を押さえられる位置には、上平寺城(菊安城)が存在していた。『信長公記』は元龜元年に浅井長政は越前勢を呼び込み、「たけくらべ・かりやす両城に要害」を構えたと記す。長比城と上平寺城がこの時期一緒に築かれた理由は、織田信長が浅井領(本城である小谷城)へ攻め込むことを警戒して領国の境目で阻止し、状況に応じて迎撃することにあっただけだ。

ここに須川山砦を加えて考えてみるとどうだろうか(図2参照)。これらはほぼ南北方向に並ぶ形となり、全体によって北国脇往還・須川道、そして東山道を押さえられるようになる。連携的・効果的な遮断が期待できることからすれば、『信長公記』には登場しないものの、須川山砦は長比・上平寺城と同時期に築かれていた(機能していた)と考えるのが妥当である。

ここで気になるのは、長比城に比べて須川山砦が単郭で小規模であるという点である。これについては主要道であった東山道に対し須川道は名称も伝えられておらず、間道的な存在であったためであろうと考えたい。すなわち軍勢が通るとしても少人数程度が想定され、対応させて城郭の規模を小さくし、守備兵も少なく配置



図33 虎口～山麓ルート 模式図 (明治39年測「近江長浜」に加筆)



図34 街道および城郭群 位置図 (明治39年測「近江長浜」に加筆)

していたと考える。

もっとも縄張り、特に虎口の向きから考えると、須川山砦と西曲輪は直接的な連携が想定しにくい。しかしながら先述した縄張り面での共通性から同時期の機能が想定され、築城主体や守備兵は組織的に道を押さえ、道を封鎖することができたと理解できる。さらに『信長公記』の記述と併せみるならば、戦路上は織田方を阻止する街道封鎖城郭群、あるいは境目防衛城郭群と言いうものとなろう。

『信長公記』によれば、織田方は樋口・堀氏の調略を行って浅井方から返還させた。樋口・堀氏の本拠は鎌刃城(米原市)である。いくら前線(長比～上平寺城)で織田方の動きを封じようとも、後方が敵方に通じてしまえば、たちまち孤立し、挟撃されてしまう恐れが出てくる。鉄壁の備えであったかもしれないが、長比・上平寺城の兵は「取物も取敢へず退散なり」と呆気なく退城してしまうことになる。この一時から、これら城郭の戦路上の位置づけが窺い知られるわけである。

つまり須川山砦と長比城は城郭単位としてはそれぞれの独立性は高いが、同時期に共通した戦略に即して築かれた城郭群と評価できる。遺跡として一つの城郭とみなすか、別の城郭とみなすかはともかく一群の城郭どうしと捉えよう(註2)。

ただし、戦術面つまり個別城郭としては街道封鎖城郭群あるいは境目防衛城郭群であることを念頭に置きつつ、縄張りを通じて考える必要がある。さらには縄張り上の特徴等を通じて、築城主体との関係性、技術上のレベル等をあぶりだし、「姉川・小谷合戦関連城郭群」との比較検討を行うことが求められる。

3 長比城と須川山砦の特徴

先に長比城と須川山砦の特徴として、①～⑦を挙げた。これに加えて一方の城郭にみられる特徴を挙げておく。

長比城では、⑧ 西曲輪と東曲輪の向かい合う虎口は、他の虎口と比べて抑制されている。⑨ 堀切の Usage が限定である。⑩ 曲輪内部に段差がある。⑪ 塹壕二本をハ字形に開き、通路を確保し、かつ斜面側から虎口に接近することを阻んでいる。と。須川山砦では、⑫ 複数の塹壕を連続して設けて塹壕群としている。となる。

これら①～⑫の特徴について、順に詳しく見ていきたい。まず①であるが、一般的に山城は地形上の高低差を有効利用し、多くを切岸によって防壁する。切岸に土塁を加えれば、一層遮断性が高まるのは明瞭である。ただ②と関わるが、土塁を広く設ければそれだけ内側の曲輪面積を狭めることになる。須川山城では南北に二つの虎口が向かい合っており、虎口と虎口をつなぐ形で曲輪内を横断する道が想定できる(⑦)。

西曲輪においても、同じことが言えよう。東曲輪も基本的に同じであるが、こちらは曲輪面積が相対的に広い。道に費やす範囲は目立たない。それでも北側虎口と南側虎口を結ぶ形で凹地が延び、これが道として確保されているのは疑いなくところである。

ただでさえ狭くなりやすい曲輪内を横断する道があり(⑦)、更に土塁が全周することになれば曲輪面積は減る。建物を建てた広がり確保しづらくなる。建物を建てていたにせよ、虎口をつなぐ動線に影響を及ぼしていたか、あるいは建物によって曲輪内部の動線が入り組んでいたかのどちらかになっていたと予測できる。こうした点と関わるのであろうが、発掘調査によっても須川山砦の曲輪内部からは明瞭な建物痕跡が見出されてはいない。

これも一般的な話だが、山城では土塁を用いるとしても概して限定的となる(山上 2021)。むしろ必要な部位(虎口周り、堀切に面した付近等)に限定して用いる傾向があった。

なにより長比城で注意すべきは、土塁の天端幅が広いことであり(③)、対応して下幅(馬踏)も広がっている点である。須川山砦では発掘調査により、極めて興味深い事実が明らかになった。調査された土塁の南壁断面は下幅が約6mであり、上幅は明瞭ではないものの2m前後が想定される。高さは約1.5mとなる。土塁はいくら崩れているのは間違いがないが、前後に崩れた土が大きく堆積した状態は認められなかった。したがって、

高さは現状と大きな違いはなかったと考えられる。

断面の観察を通じて土塁の構築に当たっては、曲輪縁辺に下幅約2.5m、高さ約1.5mの小土塁を築く。次いで小土塁の内側に、土を寄せかけるように横方向に積み上げるといった構造が判明した。調査範囲外となるが、土塁の外側すそは切岸であっただろうから(註3)、外側からみた土塁+切岸は更に高かったはずである。

訝しいのは、小土塁を築いた段階で土塁全体の高さはほぼ決定していることである。切岸をプラスさせた小土塁だけの状態でも、外側に対する遮断性は確保できている。それにも拘わらず、内側に土を寄せ掛けて幅を広げているのは何故か。その分、土を多く必要とするし、何より曲輪面積を減らしてしまうことになるわけである。

筆者は土塁の上幅を広げるため、あえて上記のような構造を採用したと理解する。土塁の上部を確保するため、下幅もそれに応じて広く取ったということである。土塁の上幅を広げた理由は、兵を配置し、土塁上からの迎撃を意図したためであろう。もともと、むき出しとなった土塁上に兵が立てば、城外側から矢や弾丸を打ち込まれてしまう。発掘調査で確認できたわけではないが、土塁上部には柵あるいは土台を用いた塼(高田2021a)が設けられていたと考えられる。それらの内側に兵が立ち、移動できるスペースを確保する関係上、上幅が広がっているのであろう。

こうしてみると広い面積を確保した東曲輪は別として、西曲輪や須川山砦は曲輪自体を守るためよりも、土塁による直接的・中心的な防御、そして迎撃を強く意図していたと捉えられる。曲輪の外縁を囲い込むことよりも、土塁による戦闘性を重視した城郭であったと言えるのではないかと。

次に、それぞれが二つ以上の虎口を有する(⑤)である。これも一般的な話になるが、単郭の城郭に複数の虎口を有するのは珍しい。曲輪の規模にもよるが、大抵は一つで事足りる。須川山砦が山麓の居館とセットになった詰城であったのならば、南側虎口のみで充分である。堅堀群に近接した位置にあえて虎口を設ける必要性もない。虎口を減らせば曲輪面積は広く確保できるし、曲輪の奥に建物配置も行いやすくなる(曲輪内部の有効利用にもつながる)。

メリットを損じながらも複数の虎口を設けたのは、一つには土塁上部での戦闘重視に対応させたためであろう。そしてもう一つは複数方向への出撃を前提としており、さらには多面的な戦闘を想定していたためと考えられる。

堀切を設ければ、一応は尾根筋に対する警戒・遮断は対応できる。防御上、兵を配置する箇所をいくらか軽減できるというものである。しかし、長比城・須川山砦では堀切を用いる場所が限定である(⑨)。これは堀切を設けて遮断するよりも、尾根上からの出撃を強く意識していたためであろう。

先に街道封鎖城郭群あるいは境目防衛城郭群と評価したが、山中に籠っているだけでは敵をみすみす通過させてしまうおそれがある。状況を鑑み、山上から出撃して敵を陽動・挑発する対処も時として必要となる。こうした戦術に対応した虎口配置であったのではないかと。

ところで長比城西曲輪の西虎口での発掘調査では、門跡を示すような柱穴も、礎石も見つからなかった。こうした場合、門を建てる以前に廃絶したとか、未完成の城郭であったとの見方もできなくはない。あるいは土台を据えた上に親柱・控柱を立ち上げた門構造も想定してみるべきであろう(高田2021a)。ただし、開口部の下部は平坦ではなく、蒲葺状にわずかに盛り上がる。この状態であると、門柱を立ち上げる横架材としての土台が据えにくくなる。蒲葺状に盛り上がるのは外側から曲輪内部をいくらか覆い隠すとともに、虎口の開口部も土塁の延長として位置付けていたためではないだろうか。

あるいは門に関わる遺構が見出せないことからすれば、常態的に門が存在しない状況も想定すべきかもしれない。外柵形状の虎口になるわけであるから(⑤)、門がなくてもストレートに侵入されるわけではない。虎口部分に侵入を受けても、土塁上部で迎撃することもできるし、そもそも曲輪内部にさしたる建物(守るべきもの)がなければ、たとえ虎口内部に侵入を許しても大過あるまい。有事には開口部を逆茂木等で塞ぐことでよし、とした見方も提示しておきたい。

虎口の遮断性という点では、開口部に面した土塁法面が緩やかであることも注意される。虎口の遮断性を少しでも強める上では隣接する土塁との開口部の幅を狭めるのが望ましい。狭めるにせよ人が通り抜けられる幅は不可欠であるし、門があったのなら扉が開閉できる幅を確保する必要がある。さらに虎口開口部を挟んで向かい合う土塁法面もできる限り、急であるのが望ましい。もちろん、土塁であるから勾配をきつくするにも限度がある。しかし、当該部分での土塁法面の勾配は20～25度前後である。付近でも土塁が崩落した形跡が確認されないから、城郭が機能した時にも同様の勾配であったと考えられる。

かかる勾配では、門が存在していたとしても脇を通り抜けられてしまう。土台を敷いて柵・扉を建てていたかもしれないが、それならば法面に土台を固定していた痕跡が残されそうなものである。発掘調査では、法面から扉等の痕跡は確認されなかった。虎口にともなう土塁の法面処理はどうしていたのか、門の有無とともに、検討課題となる。

次に⑧に関してだが、西曲輪と東曲輪は向かい合って虎口を設けている。このことは各曲輪の独立性が強く、単独で防御ができたことを示している。仮に西曲輪が陥落しても、残る東曲輪で防御が可能であるということである(その逆もあり)。虎口構造だけに限れば、どちらが優位であるか(主郭相当であるか)判断しにくいほどである。

西曲輪の東虎口は外枳形状を呈するが、堀切をともなうわけではない。一方の西虎口は外側に延びる通路を開き込むように、やや長い塹壕二木を斜面に延ばしている(⑩)。後者の方が虎口周りの防御が入念であると言える。

東曲輪の西虎口は、平入り状ながら外側にテラス状の平場を設けて外枳形状とする。これも堀切を伴わない。これに対して北虎口も南虎口も、片側の土塁が大きく張り出した外枳形状となる。北虎口は虎口に関わる動線部分が高い。南虎口については発掘調査によって、内部に今一つ土塁状の高まりを有していることが確認された。そして虎口外側には堀切をともなっている。

他の虎口と比較すると、西曲輪と東曲輪との向かい合う虎口は軍事性がいくらも抑制されている。それぞれの独立性は高くとも、西曲輪と東曲輪は結び付きの強さ、並列性を示すものと言えよう。

長比城の主郭がどこかと言えば、まとまった面積を有するのは東曲輪にあてられよう。三つの虎口を有するのは東曲輪のみであり、規模の大きさに対応して虎口の数も多いことから、そのように考えられる。ただし、東曲輪の内部には段差・傾斜を有する(⑪)。西端辺りが最も高く、東へ向かって下降する。最も高い西端あたりが通常ならば曲輪の最奥部に当たり、何らかの建物が想定できる場所となる。下位となる東端側には北虎口と南虎口が設けられているとおりである。

ところが、事はそれほど単純ではない。と言うのは最も高い西端には、西虎口が設けられている。西虎口から北・南虎口へつながる道が延びていたと考えられるし、何より西曲輪側から入ってくる動線とも接する。この点から見れば、西端が曲輪の最奥部であったとは言いがたい。そして東曲輪と、全く主郭に相応しいとも言えなくなってくる。少なくとも一般的な主郭とは、やや異なっていると言わざるを得ない。こうしたところにも恒常的に維持管理される領主層の城郭ではなく、特殊な状況下で構えられた城郭、つまりは臨戦下で築かれた城郭であったゆえの様相が現れているのではないかと。

最後に須川山砦に見られる塹壕群である(⑫)。須川山砦の北端は堀切と組み合わせた塹壕によって尾根を潰している。先述したように、これは北側尾根続きからの侵攻を遮断・阻止しようとの表れである。それだけ北側尾根続き(つまり須川道)側からの侵攻を危惧していたためであり、地形的な弱点として築城者は認識していたわけである。北側に延びる尾根は最短距離で須川道のある谷に達している。やや傾斜が急であるし、谷部自体が隘路である。それでも一気に駆け上れば須川山砦近くに達するであろうから、特に警戒したのであろう。

塹壕群の南側には堀切があり、堀切に面して北側虎口がある。北側虎口を守る上でも塹壕群は有効である。ただ一部で堀底道を兼ねるため、虎口前の動線としてはややごちなさを感ずる。

限定的に塹壕群を用いたのは、必要不可欠と考えた箇所限定したためであろう。ただし、北側へ延びる尾

根から北西へ派生する小尾根を遮断するには至っていない。この小尾根も須川道方向へ延びているが起伏を有し、距離が長い。そして須川集落方向へ下りる道と被るため、あえて遮断しなかったとみられる。南側に続く尾根も南虎口との関係から同様に考えられる。

これに対して南東に続く尾根は、やや傾斜が緩やかである。こうした部分には堅堀群や堀切を設けていても良さそうなのであるが、そうはなっていない。尾根上の状況、尾根裾部(谷)との関係性、城郭全体の縄張りや踏まえて設けなかったとみられる。他の遺構についても言えることだが、必要性のないところには普請を施していない。普請(含む作事)の選択がなされているためであろう。逆に、個々の曲輪に土塁を全周させること、複数の虎口を設けるということが必要不可欠、と築城者はみなしていたのではあるまいか。

4 朝倉方の城郭

(1) 城郭の特徴について

『信長公記』の記述では長比城と上平寺(菊安)城について、浅井氏が主導的に両城を築かせ、越前朝倉方を呼込んで守備させたと読み取れるが、浅井氏による意向を受けて朝倉方が築城・守備したと読むこともできる。いわゆる元龜争乱時には浅井・朝倉方は近江を中心に共闘し、対織田氏戦を展開している。そのため浅井氏と朝倉氏の築城術にどれくらい差があったのか、区別が可能なか現状でははっきりしないところが多い。

ただし、朝倉氏については近江国以外の若狭・越前国でも築城しているし、『信長公記』の記述を通じて近江での単独築城が知られるものがある(註4)。以前筆者は長比城も加えた上で、中山磐(福井県美浜町)を中心とした朝倉氏城郭の特徴として次の13点を挙げた(高田2013c)。

- A 主郭部が土塁囲みである。
- B 主郭は自然地形に沿って、湾曲する傾向が強い。
- C 地形的に平坦な尾根が近接するにも拘わらず、堀切で城域をまとめる。
- D 主郭から下位の曲輪に土塁を延ばして連結する。
- E 主郭部から離れた位置に堀切を設け、中間の尾根上を確保する。
- F 外枳形状の虎口を有する。
- G 主郭の虎口が対称的な(あるいは向かい合う)位置に設けられ、虎口とそれに関わる動線の位置が集約されている。
- H 一部張り出した土塁線から横矢掛かりが効くが、明瞭な折りを伴わない。
- I 堀障子が認められる。
- J 虎口から斜めに下りる動線が付けられている。
- K 部分的に曲輪周りに横堀を巡らす。
- L 主郭の土塁内側は低くなり、曲輪内部には起伏を残す。
- M 尾根に斜めに切り込むように堅堀が設けられる。

若狭・近江国に築かれた朝倉氏に関わる城郭のいくつかは、上記A～Mを複数有する点で共通する。また朝倉氏に関わる城郭は、時期もさることながら築城する方面(地域)によってバリエーションを使い分けていた可能性が考えられるものである。

これらは個々でみるならば、さして特徴的と言えるほどのものではない。主郭部が土塁囲みとなる山城はさほど一般的ではないが、それでも全国的に見れば類例をいくつか見出すことはできる。つまり、朝倉氏の専売特許と言えるほどのものではない。外枳形状虎口も、類例はいくつかある。しかしながら、朝倉方は比較的早い時期から用いていた可能性がある。

(2) 「姉川・小谷合戦関連連城郭群」中の朝倉方城郭

「姉川・小谷合戦関連連城郭群」中、朝倉氏との関りが強かったと考えられるのは、丁野山城と中島城となる。これら二城の概要を述べることにする。

まず丁野山城である。丁野山城は、『信長公記』によれば朝倉方の越前平泉寺玉泉坊が守備していたが、天正元年（1573）8月2日に信長の攻撃を受けて降伏し、退城している。『東浅井郡志』では、元は中島宗左衛門の城であったが、朝倉方の堀江甚介・平泉寺西林坊が守ったとする。

岡山とも呼ばれる丁野山は、かつて北側に八幡ノ岡、北東側に山王台と呼ばれる尾根が続いていたが、昭和中に崩されてしまった。『東浅井郡志』所収の「丁野山古蹟図」によれば、それぞれの尾根頂部には土塁囲みか切岸によって囲われたような曲輪を描き、その並びに曲輪らしき表記をする。今となっては、曲輪等が存在したかどうかを確認することができない。しかしながら、同図の丁野山城部分はかなり簡略化、デフォルメされているけれども曲輪・堀の配置に共通するところがある。中島城についても同様である。こうした点からみれば、失われた八幡ノ岡・山王台にも何らかの遺構が存在した可能性が高いであろう。ただし、絵図では丁野山城の東側尾根続きにある中島城東方「大鳳山」には平坦地・曲輪を思わせる高まりを描く。現地には高まりや平坦面が存在しており、一部に城郭由来と考えられるものがある一方、古墳を含んでいる。

さらに、城域に重なるように弥勒寺・山王社がある。寺社に関わる平坦面が混在している、あるいはそれらを利用して陣が営まれた可能性も考えておくべきであろう。

岡山の頂にある丁野山城本体は、堀切によって遺構が完結した状態で残されている。先述のように北側に延びていた尾根は削り取られてしまっている。しかしながら、北側尾根続きに向かって堅堀を組み合わせた堀切を設け、堀切の内側に櫓台・堅土塁を構えている。このため北側尾根続きとは直接的につながらなかったと考えられる。つまり近接する八幡ノ岡・山王台に城郭遺構が存在していたとしても相互に独立性が高かったと考えられる。

主郭周りは特異な構造である。主郭自体は中央部に填丘状の高まりを有し、全体はいびつな方形である。切岸によって防御しており、土塁は見られない。主郭周りは帯曲輪となり、その外側、斜面との間に土塁が設けられている。帯曲輪は、横堀状を呈している。外側にある土塁と横堀状となった帯曲輪があるため、主郭はあえて土塁を設けなかったのではないかと。

帯曲輪の南北では土塁の幅が大きく広がって櫓台となる。櫓台はいずれも尾根筋に向かって張り出しており、凸状となる。尾根に向かい合う幅を限定させ、効果的な防御を図った処置となる（高田 2015）。

帯曲輪東側の虎口は、土塁を通過した後に左へ折れる造りである。更に折りを誘う正面は、主郭の墨線となっている。虎口から続く道は、中島城のある尾根方向へ向かって延びていたのは間違いない。

一方南東部の虎口は、櫓台と土塁を喰い違いに配置している。その先（南側）の通路は隘路状となり、かつ櫓台側面を通らせる。さらに先は櫓台の先端裾で堀切と堅堀を喰い違いに配し、中間部分に折りを有する土橋を設ける。南側尾根筋からの侵入を警戒するとともに、尾根を下る通路を保持していたと理解される。堀切と堅堀を組み合わせた、典型的な喰い違い虎口は珍しい。

このように丁野山城は対称状に櫓台を配し、折りをともなう技巧的な虎口を用いる。地形に影響されてややいびつになったところはあるが、全般的に整合的な造りである。周回な計画性・規格性による築城と評価できる。天正元年時に朝倉氏による築城として指標的な存在となり、その軍事性の発達度を示すものと言えよう。

次に中島城である。同城は丁野山城から南東に延びた尾根上に位置する。全体を土塁囲みとして完結した縄張りとなっている。また丁野山に続く尾根に堀切を入れていることから、独立した城郭とみなすことができる。もっとも先述のように丁野山城東側の虎口は、中島城方向の尾根に向かって開いている。道の行き着く先が気になることであるが、隣接して丁野山城を支援・連携していたことは想像に難くない。

今少し詳しく縄張りを確認すると、主郭は東西に細長い、いびつな方形である。土塁の上幅は広めであり、

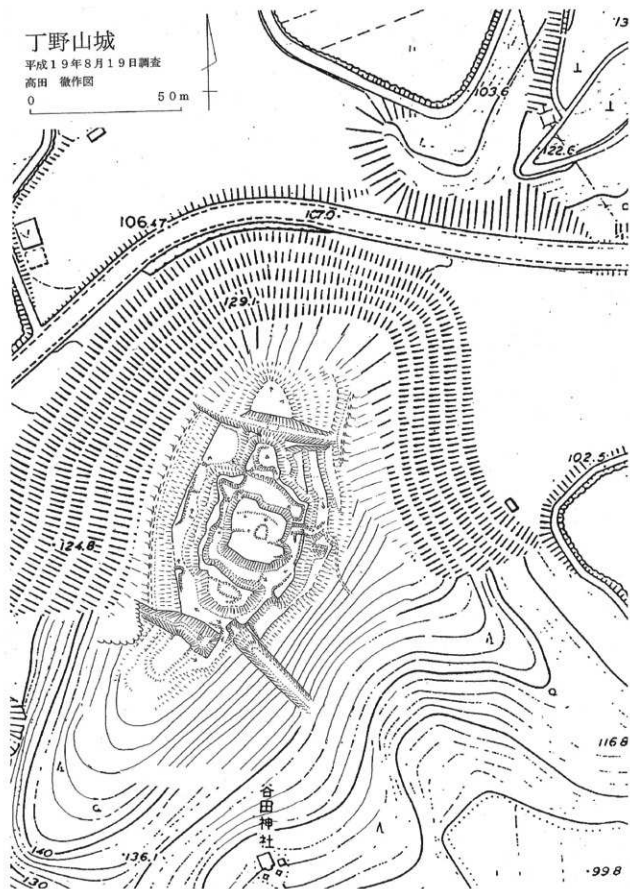


図35 丁野山城 縄張り図



図36 中島城 縄張り図

土塁上部で兵の移動・配置が可能になったと考えられる。主郭の北側には土塁を喰い違わせた虎口がある。

主郭の北・東据には横堀状の帯曲輪がある。帯曲輪の外側は土塁となるため、主郭との間は横堀状となるわけである。主郭虎口は帯曲輪に対して開いているので、横堀としての遮断機能も期待できるが、通路・曲輪としても機能したと考えられる。帯曲輪の北東隅は開口し、虎口に比定できる。東側の外縁にある土塁が北側に張り出しているのが注意される。

虎口から尾根上を下ると、不明瞭な平坦地を介して堀切に達する。現状では土橋が掛かるが、後に造られたものであろう。すると先の虎口から、どこで下っていたのか、どこへつながろうとしていたのかを考えねばなるまい。主郭西側には堅堀が単独で存在するが、何らかの意図があったはずである。周囲に存在した通路、遮断すべき範囲等から、これら堀切・堅堀も理解すべきであろう。それには丁野山城を含めた丘陵部の理解、山麓部の景観まで視野に入れた検討が求められる。

なお中島砦から堀切を越えた東側尾根上には、古墳の高まりが認められる。墳丘上はやや平坦で、周囲には帯曲輪状の平坦面が存在する。一部に曲輪・切岸を思わせる箇所を認めるが、完結した城郭とみなすことはできない。

墳丘自体が周囲に平坦面を伴うこともあり、城郭(陣)かどうかの判断はよほど明瞭な城郭遺構、古墳由来とは考えにくい遺構でも見出されない限り、判断は難しい。似た遺構は、小谷城の南東方向にあり、朝倉方が陣を置いた大依山においても認められるし、虎御前山城の南側尾根上にも認めることができる。合戦時の城郭遺構・範囲を考えるに当たり、こうした遺構をどのように位置づけるかは大きな課題となる。

これに関連する『東浅井郡志』所収の「丁野山古砦図」なお岡山の南東尾根続きとなる山脇山には「寄手明智日向守光秀」と記される。絵図では距離感と方位がやや分かりにくい、虎御前山城の北西約400mの位置にある。織田方の明智光秀による付城が存在したとしてもおかしくない位置であるが、傍証する史・資料は見当たらない。現地は未踏査ながら尾根上に古墳が点在し、帯曲輪状の平坦面等が残されているようである(註5)。

丁野山城・中島城に共通するのは、小谷城周縁を防衛する位置にあることである。次に述べる大嶽砦、焼尾砦、福寿丸、山崎丸の更に外縁に位置し、防衛の一翼を担っていたと推定される。

(3) 湖北におけるその他の朝倉氏城郭

『信長公記』にはいわゆる元龜争乱時、湖北、特に小谷城を衛星的に防衛し、また朝倉氏本国の越前国境近くに築かれた城郭を列記した箇所がある。すなわち「同日(天正元年8月13日)落城の数、大づく・やけ尾・つきがせ・よの山・たべ山・義景本陣田上山・引権・志津が嵩、若州粟屋越中所へさし向ひ候付城共に拾ヶ所退散。」とある。「同日落城」と記すが、厳密には天正元年8月13日までに落城した10ヶ所の城郭が挙げられている。すなわち大嶽砦(大づく)・焼尾砦(やけ尾)・丁野山城(よの山)は8月12日、月ヶ瀬城(つきがせ)は8月8日、に開城・落城している。

このうち大嶽砦と焼尾砦は小谷城の尾根続きにあって、いずれも外縁部を守っていた。月ヶ瀬城は平地部にあって浅井方の山本山城と小谷城のつなぎとなり、山本山城～月ヶ瀬城～小谷城という防衛ラインを形成したものである。やや後方に位置するが、丁野山城もこの防衛ラインの一角に位置付けることも可能であろう。田部山城(たべやま)、田上山城、幾ヶ岳砦(志津が嵩)は越前国境近く、足田城(引権)は近江国境近く、朝倉氏本領とのつなぎの役割を担ったと考えられる。「若州粟屋越中所へさし向ひ候付城」は、粟屋氏の国吉城(福井県美浜町)に対して設けられた付城(中山の付城か)となる。

大嶽砦は、浅井氏の本城である小谷城の一角にあり、主郭部背後の最高所に位置する。天正元年8月10日の時点では朝倉方の番手として、「斎藤・小林・西方院三大将人数五百ばかり」で籠城していた(『信長公記』)。攻め手側による把握とは言え、三名の大将による混成守備であったこと、500人ほどの籠城軍があったことが知られる。大嶽砦の築城・改修時期については、必ずしも明確ではないが、最終段階では朝倉氏によって在陣さ

れていたのは間違いない。同年8月12日に織田方による強襲を受けて落城し、小谷城(主郭部)攻めの足場とされた。

主郭部は、上幅を有する土塁で囲込む。虎口は折りをともなう桁形状となっている。巨大な二重堀切によって北西尾根続き(徳尾砦方向)を遮断し、南西尾根続き(福寿丸・山崎丸方向)には堅堀群、折りを有する土塁によって警戒する。先行する時期の縄張りをベースにしている可能性はあるが、天正元年時の朝倉方による改修部分を多く含んでいることであろう。

小谷城主郭部から谷を隔てた北側対岸、尾根上に設けられた丸山の福寿丸・山崎丸は、朝倉方によって築かれたと考えられる。いずれも通路を折り曲げながら、曲輪内部に引き込み、そして通過させている。通路が占める範囲が大きく、曲輪自体を守ろうとする意識は希薄である。むしろ通路の関門となり、土塁を主体とした防脚体勢を窺わせる造りとなる。

徳尾砦は浅井方によって築かれたものである。『信長公記』によれば、織田氏の東襲を警戒した浅井久政が築き、守備したのは重臣の浅見対馬守であった。天正元年8月12日、浅井方から寝返って織田方を引き入れた。砦比定地の尾根上は、自然地形に近く、明瞭な遺構はみられない。駐屯を主とし、せいぜい軽微な作事を中心とした砦であったのだろうか。

月ヶ瀬城はほかの城郭の多くが山地・丘陵に築かれているのに対し、平地部に築かれていた(高田 2021 b)。山本山城と小谷城の間に適当な丘陵が存在せず、かつ織田方との抗争以前から城館が存在していたことが当地に築かれた理由であろう。現状では明瞭な遺構が確認できず、城郭としての広がりもはっきりしない。

田部山城(長浜市)は、長細く延びた曲輪全体を土塁囲みとするのが特徴的である。土塁の内側は通路状となる。曲輪の両端は堀切を設けるが、堀切に面して虎口がある。南西側の虎口は、喰い違い状になっている。内部には起伏を残しており、建物が建ちそうなスペースは限られる。

当城については朝倉氏による駐屯を示す史料が存在している上、越前国境に近い地理的状況を鑑みれば朝倉氏による単独築城と考えられる。逆の言い方をすれば、浅井氏が関与した可能性は低いであろう。

賤ヶ岳合戦の折、羽柴軍の陣所となった田上山(砦)は、元龜年に朝倉義景本陣となっている(『信長公記』)。羽柴軍による改修は顕著であるが、縄張りには朝倉氏によるとみられる痕跡を指摘することができる。すなわち土塁囲みの状態が田部山城と類似する上、ほかの部分と縄張り上の差異が指摘できる。天正11年(1583)の賤ヶ岳合戦の際に羽柴秀長陣となっているから、この折の改修を受けているとみられる。

賤ヶ岳砦は賤ヶ岳合戦の折、桑山重晴らの陣となっている。これも賤ヶ岳合戦時の改修を受けているとみられる上、近代以降の公園化により改変されたところが目立つ。それ故、朝倉氏が築いた遺構がどれだけ残されているかが読み取りにくい(高田 2013 b)。

とはいえ賤ヶ岳砦も田上山城も、時期を隔てた合戦において使用されており、越前国境近くの要地に築かれていたことが知られる。

遺構の残らない城郭、後の賤ヶ岳合戦に際して改修された城郭を含むが、上記の城郭は「姉川・小谷合戦関連城郭群」の朝倉方城郭の選地・構造・戦略等を考える上で念頭に置く必要があるものとなる。田部山城については遺構も良好に残り、賤ヶ岳合戦時の改修が考えられない。朝倉氏の縄張りを伝える可能性が高く、「姉川・小谷合戦関連城郭群」の一つとして検討対象にすべきではないか。

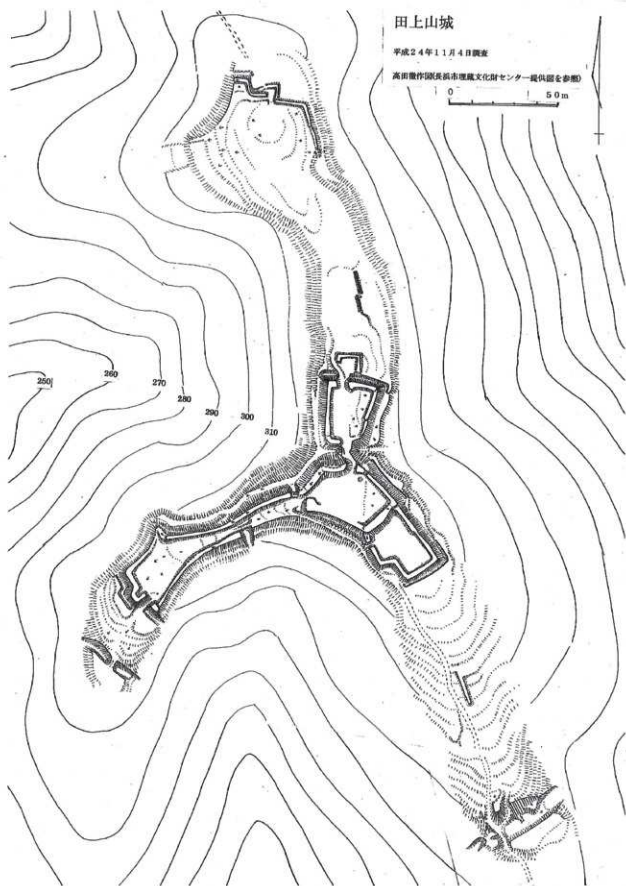


図 37 田上山城 縄張り図

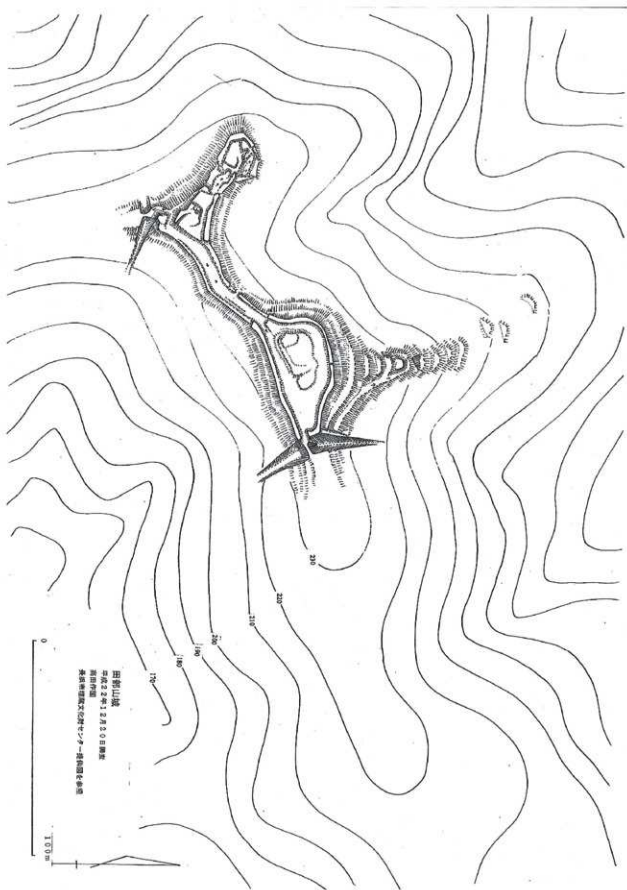


図 38 田部山城 縄張り図

5 浅井方の城郭

浅井領にはいくつかの城郭が築かれたが、このうち「姉川・小谷合戦関連城郭群」に関わるのは横山城と山本山城となる。横山城については後に織田方となり、その際の改修を受けているとみられる。

小谷城の最右翼となる山本山城は、浅井氏重臣であった阿閉氏が守っていた。ただし、阿閉氏は織田方に寝返り、浅井氏と運命を共にしなかった。天正10年(1582)まで山本山城に在城しており(太田2021)、それまでの間の改修を受けていることも考えておくべきである。

山本山城は、南北に延びた尾根上に曲輪と連ねる(高田2019)。残念ながら主郭南側の曲輪は破壊・改変を受けているが、北側尾根上に連なる曲輪は良好に残されている。堀切で区画し、折りをともなう土塁を構築している。後の改修も考慮すべきだが、浅井領における城郭の発達を考える上で指標的な存在と言えよう。

6 織田方の城郭

長浜市・米原市で検討対象とされる「姉川・小谷合戦関連城郭群」のうち、織田方とされる城郭は横山城および磐(長浜市・米原市)と虎御前山城(長浜市)である。

横山城については、浅井方の城郭を織田氏が奪取しており、さらに天正11年(1589)の腰ヶ岳の合戦時の使用が知られる。南側と北側の曲輪群で造りが異なっているが、時期差によるものか構築者の違いによるものか、はたまた機能差によるものかが不明である。現時点で浅井氏段階の遺構を止めているのか、織田氏による改修がどの程度及んでいるのかがはっきりしない。北側尾根筋には古墳を利用した陣(陣所)とみられる遺構が点在する。類似した遺構は虎御前山城、浅井・朝倉方となるが中島城でも認められ、陣・陣所としての利用の在り方として注目される。

虎御前山城は、築城時期が元龜3年(1571)であり、およそ10日余の普請・作事によって完成された。廢城は翌4年とみられ、築城・廢城時期が明らかである。加えて小谷城を攻めるために設けられた織田軍による付城であり、本営的な向城であって、その築城目的も明瞭である。小谷城を圧迫・監視することになったわけだが、『信長公記』によれば山上の座敷からの眺めは優れていたという。付城・向城でありながら、遊興的な空間も備えていたことが知られる(高田2013c)。

縄張りの概要を述べると、主郭は狭隘ながら枡形状の虎口を備える。尾根上には古墳の墳丘を残しつつ、細長い曲輪を延ばしている。小谷城に近接した東端の曲輪(伝・木下秀吉陣)は、横堀・土塁を設けており、(小谷城に対する)最前線にある曲輪として相応しい構造である。

近年になって主郭南側に開く谷部を囲い込む、特徴的な遺構が確認された。すなわち二本の尾根上から山麓に達する土塁・堀であり、谷部の入り口にも土塁は続く。谷部入り口は、現状で破壊・改変されたところがあるが、虎口が存在していたと考えられる。山上の主郭部から山麓に達する通路が、土塁で囲い込まれた尾根上あるいは谷部に延びており、これを防御する土塁・堀と評価できる(高田2019)。小谷城に向かって攻め出し、形勢が危うくなれば城内に退く虎口・通路として設けられたのであろう。

天正9年(1581)に羽柴秀吉が鳥取城攻めに当たり、周囲の山上に築いた陣城群に類似した堀・土塁遺構が認められる(吉田1985)。規模・構造の点では鳥取城攻めの陣城群の方がかなり発達しているが、虎御前山城の土塁・堀は先駆的な遺構であると言えよう。何より元龜3年時点で、浅井・朝倉方との抗争時においてかかる城郭を築いていた点は注目される。織田氏築城術の発達度を示すものである。

なお、わずかに地刺を残すのみだが虎御前山城の南西にある八相山から宮部村までの間は悪路であったため幅三間々中(約6.3m)の軍道を整備し、小谷城に向けた側(東側)に高さ一丈(約3m)の築地を50町(約5.5km)にわたって築いている(『信長公記』)。軍道を守る長大な防塁を築いているわけであり、兵站線の確保にもつ



図39 山本山城 縄張り図

虎御前山砦

滋賀県長浜市

平成17年4月16日

6月10日

平成28年8月21日調査

高田 徹作図

0 200m

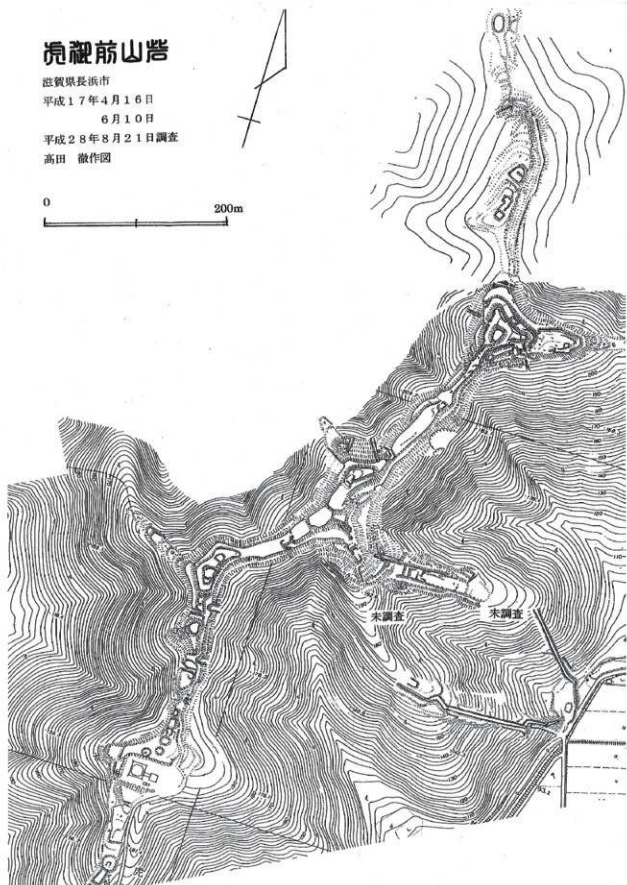


図40 虎御前山城 縄張り図

ながった(高田 2021 b)。かかる普請による大規模な攻城戦は織田方の優勢を思わせるが、一方で領国内での多面的な戦闘が付城の構築・発達を促した面もあったとみられる。戦闘の激化、長期化が織田氏の城郭構造を複雑化させ、そして発達させたとみられる。

おわりに

長比城・須川山砦、そして対象外となる上平寺城は、街道封鎖城郭群あるいは境目防衛城郭群と評価した。戦略上、一連の城郭群として位置付けができるものとなる。「一城別郭」「別城一郭」なる見方も、一概に否定されるものではない。他に適当な用語も思い浮かばない上、これら城郭をイメージしやすいものでもある。ただし、意味するところを理解し、誤解を与えぬよう注意すべきであろう。

長比城・須川山砦は、特に土塁構造が特徴的である。それは城郭の防御の在り方、兵の配置、戦略上の城郭の位置付けを窺わせるものであり、元龜争乱時の朝倉氏(含む浅井氏による関与)の築城術を示すものと評価できる。

丁野山城・中島城・山本山城は、浅井氏の本城である小谷城の防衛を補完するものである。前二者は小谷城周縁を防衛し、後者は外縁を防衛するとともに月ヶ瀬城を介して小谷城とともに浅井領の絶対的というべき防衛ラインを形成するものであった。

かたや横山城は浅井方の城郭を奪取しての織田方による向城であり、虎御前山城は小谷城に内薄した織田方による向城であった。これも巨視的に言えば、攻め手側の城郭群となる。

「姉川・小谷合戦関連城郭群」は、こうした攻守両側の城郭、争奪の対象となった城郭を包括する(図3参照)。両軍による攻防、戦術・戦略が城郭構造を通じて明らかにしうる価値を有する。

「姉川・小谷合戦関連城郭群」として検討対象とした城郭は、遺構の残り具合もよく、『信長公記』を中心とした文献史料により当該期に浅井・朝倉氏、織田氏の関与が確実である。両軍の攻防において、中心的な役割を果たしたのも疑いないところである。

ただ7城のみが姉川・小谷合戦において機能したわけではなく、ほかにもいくつかの城郭が機能していた。一例を挙げれば、田部山城である。他にも全容が未解明であったり、遺構が既に失われたりしたものがある。八相山～宮部間の防塁もその一つであり、考古学的な実態解明が求められる(註6)。

合戦における城郭は、しばしば繰り返して運用されるものである。合戦を契機に城郭が再整備(改修)を受けることもあるし、いったん廃絶した城郭が再び取り立てられることもある。米原・長浜市域では数ヶ所合戦の主戦場ともなっており、この時期に元龜年間の城郭の一部が再利用されていることは周知のことである。

史跡指定という枠組みに関しても、先行して「京極氏遺跡」として史跡指定された城郭中には上平寺城のように「姉川・小谷合戦関連城郭群」の対象となるべきものを含んでいる。「北近江城郭群」に挙げられる三田村氏館も、同様であろう。それぞれの枠組みで保存・整備が講じられることは理解できるが、一方で複合的な史跡指定という選択も検討されて然るべきではないか。すぐに回答を出すべき話ではないが、今後の課題として指摘しておく。



図41 「純川・小谷合戦関連城郭群」と防衛ライン想定図

註

- 1) 山城の発掘調査された堀切では、土橋遺構の確認例は少ない。土橋は廃城後に設けられたものが、意外に多いのである(高田 2016)。このことから堀切には橋を掛けず、対岸との遮断に徹した例が多かったのではないかと考える。
- 2) もっとも、これら城郭の配置だけでは須川道と東山道の間の遮断が十分ではない。これら間に城郭遺構の有無について確認が求められる。
- 3) 大走状となった部分は切岸のすそ部を止めている可能性がある。土塁を構築する際には足場となり、構築後には切岸前面にあって障害となったとみられる。
- 4) 近年、朝倉氏に関わる城郭(領国内・外、織田氏、一向一揆)を集成・解説した佐伯哲也 2021『朝倉氏の城郭と合戦』(戎光祥出版)が刊行された。個別城郭の縄張り図を挙げ、丁寧な解説がなされており、朝倉氏の城郭構造を俯瞰できる好著である。同書では朝倉氏の特徴として畷状空堀群(45頁)、枳形虎口(87・227頁)、馬出(133・177・191・258頁)等が挙げられるが、一方で他の城郭にこれら遺構が普遍的に認められるわけではないことも指摘する。それはともかく同書では個別解説で上記の点を指摘するものの、特徴に関わる総合評価がなされるには至らない。「ハイレベルな築城術を保有」(2頁)、「当時(元亀年間)の最高レベルの縄張り」(303頁)と評価するが、それらが何を指しているのか、何を基とした評価なのか具体的な話られるところがない。「累縁土塁・櫓台・土塁造りの虎口の祖形は若狭の城郭の縄張りだったと考えてよい。若狭出兵で若狭の城郭技術を学習した朝倉氏は、元亀年間にさらに発展させて近江の築城で見事に活かしたのである」(14頁)と指摘する点は注意されるが、こうした評価に至る過程が論述されていない。「朝倉氏の城郭の特徴を明確にすること」(3頁)を意図するとしながら、全体を通じて特徴は何であったのかが不明瞭なままである。また近江北部の城郭について「部分的には朝倉氏時代の遺構も残していることが近年の研究で判明している」(12頁)

と述べつつも、脚注において全く触れるところがない。この他にも同書には発刊年次からして触れるべき先行研究がほとんど挙げられていない。別稿(高田 2013c)で述べたように朝倉氏城郭の先進性は、村田修三氏によって早く指摘されていた(村田 1989)。佐伯氏は、村田氏の指摘、これを再評価した拙稿(2013b)も存知しているはずながら、参考文献として挙げることさえない。一般書であるとはいえ、これでは著者オリジナルの見解がどこからどこまでなのかが不明で

ある。惜しまれる点であると言わざるを得ない。

5) 長谷川博美氏による教示

- 6) 「姉川・小谷合戦関連城郭群」での検討対象として、磯野山城・尊勝寺城が候補に挙げられている。これら城郭については、どこまで姉川・小谷城合戦に関わるのか不明ながら浅井領内の城郭であることは明らかであり、全く関りがなかったわけではあるまい。これら城郭も含めた数多くの城郭が合戦時にどのように機能したのか、求められたものは何であったのかを視野に入れておく必要がある。合戦時にどれほどの城郭が存在したのか、そのうちのどれだけが合戦に関わったのか、合戦における関与度はどれくらいであったのかなど、できうる限り明らかにしていかなければならない。

参考文献

奥野高広・岩沢厚彦校注 1969『信長公記』（角川書店）

太田浩司 2021「浅井氏家臣「阿閉氏」の転身―羽柴秀吉と対立した信長家臣―」（淡海文化財論叢刊行会『淡海文化財論叢第13輯』）

黒田惟信 1927『東浅井郡志巻2』

高田徹 2013a「賤ヶ岳城郭群の評価に関する一考察」（長浜市教育委員会『賤ヶ岳合戦城郭群報告書―平成16年度田余呉町教育委員会賤ヶ岳合戦城郭調査―』）

高田徹 2013b「賤ヶ岳砦の復元」（長浜市教育委員会『賤ヶ岳合戦城郭報告書』）

高田徹 2013c「越前朝倉氏築城術の一考察―若狭国吉城付城を中心として―」（中世城郭研究会『中世城郭研究』27）

高田徹 2013c「織田期の「向城」―虎御前山砦の評価を中心に―」（織豊期城郭研究会『織豊城郭』13）

高田徹 2015「折れ（横矢掛り）の効果―田丹政国の事例を中心に―」（中世城郭研究会『中世城郭研究』29）

高田徹 2016「堀切に架かる土橋考―発掘調査事例を中心に―」（戦乱の空間編集会『戦乱の空間』15）

高田徹 2017「山城の湿地と虎口―和歌山県紀の川市・飯盛山城を事例として―」（戦乱の空間編集会『戦乱の空間』16）

高田徹 2019「山本山城」「虎御前山砦」（中井均編『近江の山城を歩く70』、サンライズ出版）

高田徹 2021a「縄張り研究の立場から考える城郭の作事―発掘調査成果を再考する―」（城郭談話会編『考古資料（遺構・遺物・層位）から城郭建築（作事）に迫る！―その可能性と限界を探る―』）

高田徹 2021b『近江の平城』（サンライズ出版）

島羽正雄 1971『日本城郭辞典』（東京堂出版）

廣瀬豊編 1944『山鹿素行兵学全集第五巻』（教材社）

村田修三「縄張り」1981『日本城郭大系別巻II 城郭研究便覧』（新人物往來社）

村田修三 1989「湖北の城館」（滋賀県教育委員会他『滋賀県中世城郭分布調査6（田坂田郡の城）』）

山上雅弘 2021「山城調査における造成と土木量計算（その2）」（中井均先生退職記念論集刊行会編『城郭研究と考古学』、サンライズ出版）

吉田淺雄 1985『羽柴秀吉の天正島取陣営跡之圖』（私家版）

第2節 文献史料からみた「姉川・小谷合戦関連城郭群」について

太田 浩司

はじめに

長比城は中世の東国道（江戸時代）の中山道を扼するために構築された、近江・美濃国境に所在した戦国大名浅井氏の領国防衛のための陣城である。その約250m北にある須川山砦も、長比城と一体に捉えるべきで、当時は両者合わせて長比城と呼んでいた可能性が高い。長比城については、既に拙稿（「江濃国境「長比城」の基礎的研究」中井均先生退職記念論集『城郭研究と考古学』所収、サンライズ出版、2021年）があるが、ここでも記したとおり両城（砦）は、築城が比較的古く浅井氏時代の遺構とみられる長比城東曲輪、それに織田信長と戦った元亀争乱時に、加勢の朝倉氏勢力によって築城された遺構とみられる長比城西曲輪・須川山砦とに分類できると述べた。

この拙稿と同時進行の形で、平成2年度・同3年度において、本書で詳細な報告がある須川山砦と長比城の発掘調査が、米原市教育委員会によって行われた。それによれば、

- ①令和2年度の発掘調査において、須川山砦が「詰城」でなく「陣城」として機能していたことが判明した。隣接し構造がよく似ている長比城西曲輪も同様に考えられる。これにより、より形態が古いとみられる同城東曲輪の築造年代や機能を考究する必要性が生じた。
- ②令和3年度の発掘調査において、長比城の東曲輪の南虎口内部において、表面に石が露出した土塁を検出した。このことで、この虎口が表面観察で知られるような導線が直線ではなく、屈曲のある虎口であった可能性が生じた。東曲輪について先の拙稿では元亀争乱以前に、浅井氏勢力により構築されたと結論していたが、この進んだ形の虎口の発見により、その時代感が正しいかの検証が必要となった。

本稿では、これらの課題に答えるため、元亀争乱に使用された「姉川・小谷城合戦関連城郭群」全体について、文献史学からの考究を加え、かつ現存する縄張を対照しながら、各城郭の築造年代を特定していく作業を行いたい。もとより、文献は断片的であり、全ての城郭について、時代が特定できるわけではないが、数多くの城郭を検討することにより、長比城に関する先の課題に答えられる面もあると思われる。特に、その城郭・縄張が元亀争乱以前の浅井氏時代から存在するか、元亀争乱によって朝倉氏や織田氏によって築城・改修されたものかを検証したい。

元亀争乱によって築造された城郭が、それ以前の城郭と大きな構造上の相違があるのならば、横山城のように織田軍に占領されていない限り、そこには助力を得た朝倉氏の城郭技術の移入を想定せざるを得ない。筆者は従来から、通説とは相違し浅井・朝倉同盟は、元亀争乱以前には存在しないという立場を取ってきた。つまり、姉川合戦は両者が初めて連携した軍事行動になると考える。城郭技術が同盟によって移入されるのは当然であり、元亀争乱前の城郭か、争乱過程に築城された城郭かを見分けるには、朝倉氏の城郭技術を如何に見定めるかが重要になってくる。

この点、佐伯哲也氏による近著『朝倉氏の城郭と合戦』（戎光洋出版、2021年）は大いに参考になる。朝倉氏の築城の特徴を、黒線土塁と枳形虎口、それに敵杖壘堀群という縄張の特徴にまとめられた。本稿でも、これらの特徴を、朝倉氏築城のメルクマールとして使用し、「姉川・小谷合戦関連城郭群」の文献上・縄張上の特徴と比較したい。ただ、黒線土塁は山本山城にも確認されるように、織田氏の築城技術と判断されるので、屈曲した自然地形に大幅な改修を加えた直線土塁を指標にした方が、より朝倉氏城郭の特徴を示すと思う。本稿では、黒線土塁の代わりに直線土塁を朝倉氏の城郭技術の指標とする。

以上、最初本稿の課題を簡潔に定義すれば、長比城東曲輪の縄張を、元亀争乱以前のものと評価するか、朝倉氏の改造によるかを考究することになる。

ここで具体的に言及する「姉川・小谷合戦関連城郭群」の城は、長比城のほか、菊安城（上平寺城の詰城）・横山城・山本山城・中島城・丁野山城である。また、小谷城大嶽・同福寿丸・同山崎丸・同月所丸や、信長軍の陣所である虎御前山城についても触れたい。なお、各城の城郭構造については、先の佐伯氏の著作の他、中井均編『近江の山城を歩く70』（サンライズ出版、2019年）の各城解説を参考とした。

1 菊安城の歴史と構造

上平寺城の一部として

菊安城について、「上平寺城絵図」（米原市蔵）では「霧箇城」とし、同図に見える登山道「七曲」の横に「刈安尾」と記すので「刈安尾城」とも言われる。ここでは、『信長公記』の元亀元年（1570）6月19日条に、「かりやす（要害）」と記されるので「菊安城」と呼ぶことにする。この菊安城は、戦国前期の北近江の守護の館であった「上平寺館」の「詰城」として築城されたと推定される。当時の城主は、京極高清である。この菊安城や、麓の上平寺館や家臣団屋敷、それに城下町を含めて「上平寺城」とここでは考えたい。

京極氏の盛衰を記した年代記『江北記』によれば、大永3年（1523）に京極高清と上坂信光を攻撃するため、「国衆」が「悉上手（上平）へ参候、かりやす尾の御城より御忍にて尾州へ御退候、（中略）国衆悉参て上手焼くつして」とあり、麓に展開した守護居所としての「上平（寺）」の館の他に「詰城」として「かりやす尾の城」＝菊安城が、この段階で存在していたことは確実である。この「上平寺城」の「詰城」であった菊安城が、麓の館が廃絶した後にも使用され、信長入攻時に浅井・朝倉氏の陣城として機能したと考えられる。ここでは、後者の段階の菊安城について見てみよう。

「織田信長覚書」に見る菊安城

かつて長比城について考察した挿権に触れたように長比城同様に、菊安城についてもその城名が登場する古文書は存在しない。ただ、「毛利家文書」に収める元亀元年（1570）7月10日付け、毛利輝元（吉田）宛ての9ヶ条からなる「織田信長覚書」の5ヶ条目にある城は、菊安城や長比城を指すのではないかと推定される。以下、該当部分を引用する。

〔史料1〕

- 一、浅井備前元来少身二候間、成敗井物之數候処、信長在京中ニ越前衆相語、濃江堺目之節所を尙、足懸二三ヶ所拵、可禦度候候き、去十九日向彼地出馬候、同日敵城右之新所を初、彼是四ヶ所落居候、且得利本望候事、

織田信長が越前国敦賀から京都に戻った4月の内に、浅井（備前）長政は越前国朝倉氏と語り、江濃国境に新しく2・3ヶ所の城を設け、信長の美濃国からの侵攻を防ごうとした。その内、信長の調略によって味方に付けた（落居した）城が4ヶ所とある。味方に付けた4つの城とは、長比城東曲輪、河西曲輪、須川山藪、菊安城の4ヶ所と考えられないだろうか。ただ、信長の言が城数の概略を示したのみとすれば、無理に数合わせするのは意味がない。ともかく、浅井氏が国境に構築した城郭に朝倉勢を入れたこと、それらは「新所」と表現されるほど、改造としても新たに築造した城に近かったことが伺える。その一つが、菊安城であったことは間違いない。

『信長公記』の記録

次に、信長の年代記として信憑性がある『信長公記』の記述を見てみよう。同書は元亀元年（1570）6月4日の近江国野洲川での六角承禎軍・一向一揆と柴田勝家・佐久間信盛との戦いの記述の後、以下のように記す。

〔史料2〕

去程に、浅井備前越前衆を呼越し、たけくらべ・かりやす両所に要害を構へ候。信長公御調略を以て堀・樋口、御忠節仕るべき旨御請なり。六月十九日、信長御馬出だされ、堀・樋口謀反の由承り、たけくらべ、かりやす取物も取敢へず退散なり。たけくらべに一兩日御逗留なされ、

元亀元年の信長の近江侵攻に当たり、浅井方であった堀秀村とその宿老・樋口直房の兵が守る「たけくらべ・かりやす（長比・菊安）両所は、越前国朝倉氏の軍勢を加勢として守備していた。ところが、信長の調略が功を奏し、城主の堀・樋口氏は織田方に寝返ることになる。長比城と菊安城の城兵はことごとく城から退散し、長比城には信長が入り1・2日滞在したとある。

ここで注意すべきは、長比・菊安両城が浅井方であった時、朝倉氏の軍勢が入っていたことである。これは、『史料1』でも述べられていた。浅井方の城で「境目の城」として機能した両城は、朝倉氏によって改造を加えられている。先に記した長比城の東曲輪と西曲輪の構造に相違があるのは、この歴史性を反映していると思われるのが至当であろう。後述する菊安城の横矢が損かる虎口や、南端の塹壕などが朝倉氏の改造と考えてよいだろう。

『嶋記録』にみる菊安城

浅井方の史料で、比較的信頼性に富むとされる『嶋記録』に、長比城と堀・樋口氏の謀反についての記事がある。

〔史料3〕

姉川合戦の事

去程に、元亀元年の春の比、織田信長、浅井下野守久政・同備前守長政無許に及しかば、小谷より美濃口をおさへとして、野瀬刈（安脱力）堀次郎、同家子樋口三郎兵衛尉を入置けるか、其比ハいま若年なりしか、三郎兵衛か所存にて忽ち替し、野瀬の要害へ信長の勢を引入、をのゝ居城かまのへは引退しかば、刈安を始近辺の城々、悉く明退けり、

この『嶋記録』では、長比城のことを「野瀬城（『野瀬の要害』）と呼んでいることは、「刈（安）城」と並列で述べられていることから明らかである。長比城の主将である堀秀村（次郎）が若年だったため、宿老（家子）樋口直房が主導して浅井氏からの離反が決せられたこと。その後、長比城に信長の軍勢を引き入れ、堀・樋口氏はその居城である鎌刀城へ退却したこと。そのことで、菊安城をはじめとする美濃口の諸城から浅井方が退却したこと等、独自の記事が記される。

堀・樋口氏の本城はあくまでも鎌刀城であり、信長侵攻時は美濃口守備の責任者として長比城に在番していたことが分かる。当然のことだが、長比城は居城型の城ではなく、浅井氏領国あるいは近江国境の「境目」を押さえる陣城型の城郭であったことが確認できる。また、「境目の城」としては、長比城が堀・樋口が在番する主城で、菊安城はそれに従う城だったことが分かる。『嶋記録』では最後に附属する「従は本書之覚書」で、以下のようにもある。

〔史料4〕

加田治介物語ニ野瀬ノ要害ヲ堀与カニシテ罷在シニ、在候シニ、在夜樋口三郎東に忍ヒ行、曉時与力衆ヘムホンノ段カタリ、扱刈安之在番ノ衆ヘモ同心歟トミツ／＼ニコトハリケレハ、尤同心可申候ヘ共、小谷ノ妻子無了簡候間、退可申候由ニテ、不浅小谷ヘ引取候由、治介語リシト也、刈安ハ中嶋日向子宗左衛門三成ニ奉公ノヨシ、在番ト同名忠右衛門申候、其時、樋口人シチ老人ナガシ申候、妙以被申候、樋口ケシヤク也、【中略】

人質クシサシニ成トナリ、

坂田郡加田村(長浜市加田町)の地侍とみられる加田治介の物語として、「野瀬ノ要害」つまり長比城からの浅井方の退城、さらに菊安城からの城兵の退城を記す。その過程は、樋口直房が東(美濃国=織田方)へ行き調略により浅井氏からの離反を決めたこと、それを菊安城の味方に語って同調させたこと、ただし菊安城の兵は小谷城に残した人質の身が案じられるので、織田方にはならず小谷城へ退城したこと。菊安城には後に、後述する中島城の城主や、石田三成の家臣となる中島宗左衛門が守備していたこと。織田方に離反した樋口直房の人質は串刺しにされて処刑されたこと、などが記されている。長比城・菊安城の織田方与同のキーマンが堀秀村の宿老樋口直房であったことを明確に述べている。

地誌類にみる菊安城

『淡海温故録』の「菊安尾」と「長比山」の部分引用する。

〔史料5〕

菊安尾 此処本ヨリ京極ノ家臣衆在城故ニ、長比ニ持統ケ助ケノ要害也、然処堀・樋口等信長公ニ従属スルヲ聞テ、早速開キ退クト云ヘリ、

長比山 元龜元年浅井長政義兵ノ時、美濃堺長比山ニ当分ノ要害ヲ構テ、朝倉式部大輔ヲ三千余騎ニテ電置シ処也、

菊安(尾)城は長比城を「持統」けるための「助ケノ要害」だと述べる。江戸時代において、長比城と菊安城が「対」の関係にあると認識していたことは重要だろう。両城は一組で江濃国境を守る城郭だったのである。また、長比山の城が浅井氏的美濃国境を守る城で、朝倉義景の兵が入ったことも、明確に述べられている。

このほか、江戸後期に作成されたとみられる、越前福井藩の参勤交代経路の見聞録である『東山道記』には、伊吹山の記述の後に「長比・菊安と云う古城山右に見ゆる」とある。関ヶ原宿から越前国福井に向かって北国脇往還(北国街道)を行くなかでの記述だが、菊安城が右に見えるのは正しいが、長比城は左の方向の中山道沿いにあるので北国脇往還から望めない。ただ、両城は国境を象徴する城跡として、江戸時代においても「対」で著名だったことが、再び確認できる。

菊安城の構造

菊安城は伊吹山から南へ延びる尾根の先端に築かれており、尾根を断ち切る大堀切を北の端にして、その南に主郭(「上平寺城絵図」では「本丸」と記す)を配する。さらに南に東西の堅堀を隔てて土塁囲いの曲輪(この曲輪の虎口は横矢が分かる構造)があり、城郭中央の堀切を隔てて最大の曲輪へ。その南は11本の堅堀を放射線状に配置している。横矢がかりの構造や南端の堅堀群など発達した城郭構造は、浅井氏の家臣であった中島宗左衛門が守備していた城に、朝倉氏勢力が入り改修を行なったと見るべきだろう。これらは、文献から追える歴史と合致すると言えよう。

2 横山城の歴史と構造

文献からみた横山城

横山城については、永禄4年(1561)閏3月13日付け赤尾清綱書状(大原観音寺蔵)や同日付けの中嶋直頼書状(同寺蔵)で、「横山入城之衆」が観音寺へ対して乱暴を働くことが問題となっていることが分かり、浅井長政家督(永禄3年)相続の翌年には、その陣城として使用されていたことが知られる。

また、『信長公記』元亀元年（1570）6月22日条によれば、姉川合戦に際して、浅井氏の家臣である上坂氏・三田村氏・野村肥後が立てこもっていたことが知られる。さらに、6月24日には信長が横山城城北に延びる横山丘陵先端の「龍が鼻」に陣城を設け、横山城を四方から包囲したことが読み取れる。同日には家康も着陣している。

6月28日の姉川合戦は、この横山城を包囲する織田・徳川軍と、それを「後詰」にきた浅井・朝倉軍が姉川をはさんで対陣・衝突した合戦である。姉川合戦当日に、信長が細川藤孝に宛てた戦況報告では、「横山橋龍候共種々詫言申候へ共、可討果覚悟候」とあり攻城戦が想定されていたようであるが、『信長公記』の6月28日条によれば、「横山の城降参致し退出、木下藤吉郎定番として横山に入置」とあり、無血開城になった模様である。

その後、信長の家臣である木下秀吉が城番に入ったことは、上記の『信長公記』に明らかであるが、元亀元年と推定される8月24日付け「観音寺御寺家中」宛て木下秀吉書状（大原観音寺藏）においても、寺僧の還任と寺領安堵を知らせていることから、秀吉が城番だったことは明らかであろう。観音寺は横山城東側の膝下で城内扱いとなり、横山城番の権限が及んだとみられる。また、『総見記』の元亀3年1月の記事でも、秀吉を「横山ノ城主木下藤吉郎」と記している。

『信長公記』の元亀2年（1571）8月18日条に「信長公、江北表御馬を出され、横山に至って御着陣」とあるのに続けて、「八月廿日の夜大風生便敷（おびたたく）吹き出し、よこ山の城塙・矢敷吹き落し候つる」とある。これは、横山城に塙や櫓があったことを示す重要な記述である。また、虎御前山が完成するまでは、度々信長の入城があったことが『信長公記』から読み取れる。

横山城の構造

横山城の歴史で重要な点は、浅井氏の城であった小谷支城の段階から、姉川合戦後において秀吉が城主として入り継豊系の城郭に変化したことである。信長も度々訪れており、その城郭構造への指示もあったかもしれない。

本城の城郭構造を見ると、北城と南城に大きく別れ、北城は階段状に削平地を連ねるのみであるが、南城は土塁囲いや堅堀を絡ませた発達した構造が指摘されている。また、北城から西に延びる尾根にも二重堀切があり、北城の主郭周辺よりは発達した形状を示している。これを先の文献上の記録に合わせれば、北城が浅井時代、南城と北城から西に突出した尾根が秀吉城番時代の遺構と見ることが出来る。

浅井氏時代の城郭が削平地のみの単純な構造だったのに対し、元亀段階の秀吉入城時の城郭が、土塁囲いや二重堀切を施した発達した形状を示していたことになる。この城郭には、文獻的に朝倉氏が関与した形跡はなく、遺構からも複雑な虎口構造や畝状堅堀群に象徴される朝倉氏による城郭の改修はなされていない。浅井氏の城郭を秀吉が改変した城郭として、「小谷・姉川合戦関連城郭群」の中で位置付けられる。

3 山本山城の歴史と構造

元亀争乱と山本山城

山本山の城主の阿閉貞征・貞大親子は、浅井長政と織田信長が戦った元亀争乱において、小谷城に籠城し信長軍と戦う浅井長政と連携する形で、同城に立て籠っていたことが、『史料6』の『信長公記』に見えている。

〔史料6〕

阿閉淡路守守籠もる居城山本山へ、木下藤吉郎差遣はされ籠を放火候、然る間、城中の足軽共百騎ばかり罷出相支へ候、藤吉郎見計り、■（口・籠）と切りかゝり切崩し、頭数五十余討捕る、信長公御褒美料ならず、

ここで、浅井方の阿閉貞征が立て籠る山本山城を、信長家臣である木下秀吉が攻撃し、籠や城外で戦闘が展開している。山本山城については、この前後の『信長公記』に度々登場する。〔史料6〕以前の元亀2年（1571）8月26日条に

は、小谷城と山本山城の間の中島に、信長軍が一夜の陣を構え、北近江北部の余呉・木之本を放火している。さらに、『史料6』と同年の3月7日には、前年と同じ場所に信長軍が野陣をかけ、再び余呉・木之本を放火している。

この3月7日の戦鬪を記す『信長公記』には、「江北の諸侍、連々申す様、与語・木本へ手遣ひの御は、節所を越し来たるの間、是非一戦に及ぶべきの由申しつる」が、この時は足輕さえも出合わなかったと記している。つまり、小谷城と山本山城の間を浅井氏側は「節所」、つまり防衛ラインと捉えていたことになる。さらには、山本山城は「節所」を守る重要な城郭と認識していたことになる。その山本山城を任せられた阿閉貞征の立場は、浅井氏家臣団中でも高位を占めていたと考えるべきだろう。

その阿閉氏の山本山城も、元龜4年(1573)8月8日、虎御前山城まで本陣を進めた信長軍の前に開城することになる。『信長公記』は、「江北阿閉淡路守御身方の色を立て」と簡潔に記し、山本山城に居城した阿閉貞征が信長側についてと述べている。阿閉氏の浅井氏からの離反は、山本山城の開城を意味した。小谷落城の20日余り前のことである。

この後、阿閉氏は信長の直参として活躍する。多くの浅井氏家臣が、北近江の浅井領を引き継いだ長浜城主の羽柴秀吉の家臣となったが、阿閉氏はその道はたどらなかった。したがって、山本山城は横山城のように秀吉等の信長家臣が入り、改変などを加えていないと考えられる。ただし、阿閉氏自身が信長家臣となったので、織豊系城郭としての改造は想定されてもよい。

長浜城占拠と阿閉氏の最期

天正10年(1582)6月2日、「本能寺の変」が勃発すると、阿閉貞征・貞大は明智光秀に与同し、北近江の守護家出身である京極高次を戴き、秀吉の長浜城を占拠した。しかし、秀吉が光秀に勝利した山崎合戦の後、阿閉親子は長浜城を退去する。すぐさま、秀吉は阿閉親子を追い、一族もろとも殺害することになる。その経緯について、天正10年(1582)6月26日付け、滝川一益宛ての秀吉書状を引用しよう7ヶ条の一つ書きからなるが、その5ヶ条目に次のようにある。

〔史料7〕

- 一、江州族者、今度明智同意之」族為成敗、坂本より直ニ罷越、」或制首、或命を助合敵候。阿閉事連年構
逆心候間、」山本山ニ楯籠成御敵候之条、足輕共差遣、父子三人、其外」一類女子共一類悉制首、何も」
一篇ニ申付候事。

また、同年10月18日付けで、織田信孝家臣である斎藤利堯・岡本良勝へ宛てた秀吉書状の25ヶ条の一つ書の内、18ヶ条目には以下のようにある。

〔史料8〕

- 一、即江州致御供、山本之城を阿閉」持申候へとも、先人数を申付面、一類制首、」其外悪逆人共首を切可申
候へ共、令」降参候。人質申候に付面、尾濃之御」成敗可有之と存計ニ命を助、長浜へ御」返候事。

これらによれば、秀吉は明智方についた近江の武将たちについて、首を刎ねた者もあったが、降参した者については、今後も美濃・尾張への侵攻の都合もあるので助命したとある。前者の象徴が、山本山の城主阿閉氏親子三人(貞征・貞大以外の一人は不明)であった。秀吉は足輕を遣わし、阿閉一類の首を刎ねたが、〔史料7〕によれば秀吉に対し「連年逆心を構え」たからであるという。

さらに、阿閉一族の滅亡について、寛永8年(1631)8月、美濃国の武将竹中重門によって記された『豊鑑』では、明智光秀が秀吉によって討たれると長浜城を脱出、船で塩津・海津へ渡り救済方面へ逃亡しようとしたが、汀で里人に

討たれたと記す。その首は秀吉に献じられたとある。〔史料7〕や〔史料8〕の秀吉文書が記すように、同人が派遣した軍勢が阿閉一族を討ったのではなく、里人によって討たれたとするのは、元文5年(1740)に編まれた『武徳編年集成』も同じである。〔史料7〕や〔史料8〕の秀吉の言は、勝利を飾る大言壮語で、里人によって討たれたとする『豊鑑』などの記述の方が正しいと考える。

これらの既述から、山本山城は元亀争乱時における朝倉氏勢力が入った形跡はないが、阿閉が信長家臣時代に改変された可能性があり、浅井氏家臣から信長家臣に転進した阿閉氏による歴史を、反映していると思われる。これを遺構面で確認してみよう。なお、阿閉氏の詳細については、拙稿「浅井氏家臣「阿閉氏」の転身—羽柴秀吉と対立した信長家臣—」(『淡海文化財論叢』第13輯、2021年)を参照されたい。

山本山城の構造

山本山城は、現在の長浜市湖北町山本集落の北に聳える山本山にあった城郭で、現在も主郭の土塁や、連郭式につながる尾根上の細長い縄張に、堀切など城郭遺構が良好に残存している。遺構は主郭を中心に南北約150m、南北約400mにわたって広がる。主郭は約2メートルの高さの土塁によって囲まれているが、これは横山城南城と同じ構造であり、織田家臣となった阿閉氏による改造と考えることが出来る。虎口は基本的に平虎口であるが、これも横山城と矛盾しない。主郭南の曲輪は破壊が甚だしいが、主郭から東に下った所にある曲輪も南面を除き土塁で囲まれている。主郭から北に延びる尾根には堀切で仕切られた曲輪が5か所ほど続く。

全体に自然地形に沿って堀切と土塁を施した削平地からなり、虎口も単純な平虎口が基本である。これらから、現在の遺構は浅井氏家臣時代の城郭をベースに、織田氏家臣へ転進した阿閉氏が改造を加えた城郭と見られ、朝倉氏による改変はないものと考えられる。織田信長家臣となつてからの土塁の構築・補強が最大の改変であろう。

4 中島城・丁野山城の歴史と構造

文献から見た中島城・丁野山城

『信長公記』の元亀2年(1571)8月26日条によれば、織田信長は小谷城と山本山城の間(50町弱)の「中嶋」に陣を置き、足輕に命じて余呉・木之本をこごとく放火した。浅井氏は小谷籠城に当り、小谷城と山本山城の防衛ラインを重視しており、それより以北の浅井領へ攻撃を加える場合は、このラインを遮断する橋頭堡を必要とした。これが、中島城付近の地と考えられる。なお、現在の丁野集落はほぼ一塊村として存在するが、かつては「中嶋」や脇坂など複数の小村に分かれていたとみられる。それらが、後に中央に塊となり、現在の小谷丁野町の集落になっていると考えられる。したがって、中島城は「中嶋」集落の城郭という意味である。

小谷城と山本山城の防衛ラインについては、『信長公記』に翌年の元亀3年(1572)についても記述があり、3月7日に信長は小谷城と山本山城の間に野陣をかけ、余呉・木之本を放火したとある。この余呉・木之本への攻撃は、浅井側から見れば「箇所」を越えた形だが、足輕すら応戦して来なかったと『信長公記』は記す。また、同年7月23日、織田信長は軍勢を派遣し、余呉・木之本地蔵をはじめとして堂塔伽藍・名所旧跡一字も残らず焼き尽くしたとある。この時も、橋頭堡として中島城を使用したとみられるし、同地や同城を信長側も「箇所」と認識していた事実が認められる。

天正19年(1591)の墨書を持つが、その描き方から江戸後期のものと考えられる「江陽浅井郡丁野山古砦之図」には、城主として「中島総左衛門」・久保田将監の名前を記す。後者は不詳だが、中島宗左衛門は浅井長政の重臣として、菊安城にも派遣されていたことは先述した。ただ、この絵図にもあるように、中島城から東へ続く尾根には、三田崎六郎右衛門や山崎新左衛門(吉家)などの朝倉氏の家臣の名が見えており、「箇所」として浅井軍と朝倉軍が共同で守備していた可能性が高い。朝倉氏勢力による城郭の改変が想定される。

丁野山城については、『近江輿地志略』では「越前朝會の家土堀甚介・久保田基十郎・平泉寺の兼徒玉泉坊」が浅井氏軍の援軍として立て籠もっていたとされる。また、『朝會始末記』では元龜3年(1572)12月3日の朝會義景退陣の際、大嶽と共にこの城に番勢を置いたと記述されている。さらに、『信長公記』の天正元年(1573)8月12日条では、朝會勢が入った大嶽陥落後、「直ちに又、ようの山、信長御取り懸け候、平泉寺の玉泉坊番手として橋籠り候、是れも御托言申し、罷退く」とある。「江陽浅井郡丁野山古砦之図」では、総大将として浅井山城守の名前が見えるが、守将として越前玉泉坊・堀江甚介とある。これらの記述から、丁野山城は朝會勢が入っていたのは間違いなく、その城郭技術によって築城されたとみられる。

中島城・丁野山城の構造

中島城は主郭の西に、大きな枳形虎口状(馬出状)の曲輪を配し、東側は20mほど離れた尾根を堀切で遮断する形を取っている。直線土塁や食い違い虎口・枳形虎口の存在から、朝會氏の城郭技術が入っていると見て間違いはない。丁野山城は、ほぼ四角形の主郭に横堀をめぐらし、その南北に櫓台と堀切を配する構造である。主郭に横堀を回す形状は、小谷城大嶽と近似しており、朝會氏の築城技術によるものと判断してよいだろう。これらの構造上の特徴は、朝會勢による築城・改修を示す文献と一致する。

5 小谷城の大嶽・福寿丸・山崎丸

小谷城の築城と構造

長浜市教育委員会(歴史遺産課)は、令和2年3月に『史跡小谷城跡総合調査報告書』を発行し、同城に曲輪総数1,525、土塁総数31、塹壕・堀切総数40を確認したと記している。ここでは、その成果を取り入れながら、戦国大名浅井氏の居城である小谷城を紹介する。

大永3年(1523)に守護京極氏に跡目争いが起こり、その混乱のなか京極氏家臣だった浅井亮政が台頭し、国衆たちの盟主となり、まもなく小谷城を居城とする。小谷城の築城を『東浅井郡志』では大永4年(1524)頃としているが明確な根拠はない。大永5年(1525)と推定される7月18日付けの朽木植綱宛て「永田高弘書状」(朽木文書)には、「小谷城没落之儀付、御状旨拝見申候」とあるのが小谷城の文献上の初見史料である。大永年間(1521～28)の文書とみられる5月19日付けの菅浦おとな宛て「清水吉清書状」(菅浦文書)には、「おおつくふしん(大嶽)」の文言があるので、当初の小谷城は現在の主要部ではなく、後述する大嶽をであった可能性が高い。さらに、最初の小谷城は大嶽を正面して、脇坂谷がある丁野側(西側)が大手であったと見られ、後に清水谷がある伊部側(南側)が大手となったと考えられる。

小谷城は、図のAからGの7つの曲輪部に分けられる。

- A 番所・茶屋・馬屋・桜馬場・広間・(本丸) 鐘丸
- B 中丸・京極丸・小丸・山王丸
- C 六坊
- D 大嶽
- E 金吾丸・出丸
- F 福寿丸・山崎丸
- G 月所丸

である。A群とB群の間に大堀切があり、主要部はA群の本丸(鐘丸)の後背にB群がある二重構造の城郭である。ここでは、浅井氏が単独で築城したとみられるA～CおよびEの解説は省き、元龜争乱以降に信長との戦いのために加勢した朝會氏による改修が想定されるD大嶽とF福寿丸・山崎丸、それにG月所丸について考察を加える。

大嶽・福寿丸・山崎丸（D・F群）

これらは、小谷山頂から西尾根に展開する。東尾根のA・B曲輪群に比べて防御施設（特に堅堀）が周辺に存在しない、個々の独立性が高い曲輪群である。その分、短期間に築城・改修されたことを示すが、元亀争乱に際して朝倉勢が入り、越前流の築城技術によって改められたとみられる。

これを文献で確認すると、『信長公記』元亀3年（1572）の項に「朝倉左京大夫義景、人数一万五千ばかりにて、七月廿九日、浅井居城大谷へ参着候、然りとはいへども、此表の為鉢見及び、抱へ難く存知、高山大づくへ取上り居陣なり」とある。『朝倉始末記』によれば、朝倉軍は8月3日に大嶽に入り、12月3日まで、4か月にわたり在陣したという。これらの記事からは、越前朝倉氏の援軍が大嶽に入城し改造を加え、さらに横堀を穿つなど構造上類似する福寿丸・山崎丸も同じく改造したと考えられる。

またに、元亀3年（1572）8月3日付け、嶋四郎左衛門宛て「浅井長政書状」（嶋記録）に「義景去晦日御着陣、昨日二知善院尾筋被寄陣候」とある。知善院は小谷城の西尾根の麓にあり、「知善院尾筋」は福寿丸・山崎丸がある小谷城西尾根を指すことは明らかである。両曲輪には越前勢が入っていたことが確認でき、その勢力による改造が想定できる。

江戸時代初期とみられる3月14日付け下坂久左衛門宛て「下坂正治書置」（下坂文書）では、下坂正治が小谷龍城時に与えられた浅井氏からの安堵状などを「山崎丸より水之手へ取入之時持せ候者討死」したので失ったと述べている。この文書から、小谷城合戦当時から「山崎丸」の呼称があったことが知られる。その曲輪名は、朝倉義景重臣の山崎吉家が構築したとの伝えがあるが、この伝承も越前勢による改修を示すものだろう。

大嶽・福寿丸・山崎丸の構造

先に紹介した佐伯哲也氏の著書によれば、大嶽の主郭は食い違い状の情形虎口2つを配し、周囲の土塁の上幅が7mと広い点など、朝倉氏の改修は明らかとする。更に付け加えれば、主郭の周りには横堀が造られているが、これも浅井氏の城郭技術にはないものであろう。佐伯氏は主郭から南に出張った曲輪を、石垣の使用などから浅井氏の築造と見ることが、当地の土塁は直線に伸びており、福寿丸・山崎丸や長比城西曲輪の土塁に近い。大嶽は全体的に文献が示すように朝倉氏によって改修された遺構と評価してよい。

また、福寿丸・山崎丸の任務は、西尾根を遮って敵兵が大嶽に至らないよう防御を行うことだったと佐伯氏は指摘する。確かに、両城は堅堀や横堀を駆使して、尾根の封鎖を行なっている。この点からしても、大嶽との一体性が考えられ、朝倉氏勢力による改修は当然想定されよう。さらに、枡形虎口の採用、土塁の直線化など、浅井氏の城郭にはない特徴も備えている。文献が示すように、この福寿丸・山崎丸も朝倉氏が改修を行なったとみなしてよいだろう。

月所丸（G群）・焼尾について

月所丸は、昭和46年（1971）に城郭遺構として初めて認識され、新たに命名された曲輪である。近世の絵図にも登場しない「謎の曲輪」と言えよう。比較的高い土塁・二重堀切・敵状堅堀を特徴するが、浅井氏の遺構としては技術的に進んでいる感が強い。特に、敵状堅堀は朝倉氏を象徴する城郭技法であり、同氏勢力による改修を想定する必要がある。ただ、文献上は曲輪の存在自体を、全く確認できない。

『信長公記』の天正元年（1573）の項目に、浅井久政が「八月十日、（中略）近年浅井下野守大づくの下やけと云ふ所こしらへ、浅見対馬を置候候、是又、阿閉淡路と同心に御身方の色を立て御忠節とし、八月十日、大づくの下やけをへ、浅見対馬覚悟にて御人数入れ候」とある。このように「焼尾」については、小谷落籠城中に（『信長公記』には「近年」とある）、浅井久政によって構築されたとある。久政は小丸を居所としていたと言われるので、六坊に至る「搦手」の防御を固めるために造られた曲輪と判断できる。一方で、大嶽の北に当たるとみられる「焼尾」周辺には、城郭遺構は確認されてない（ない）のが現状である。

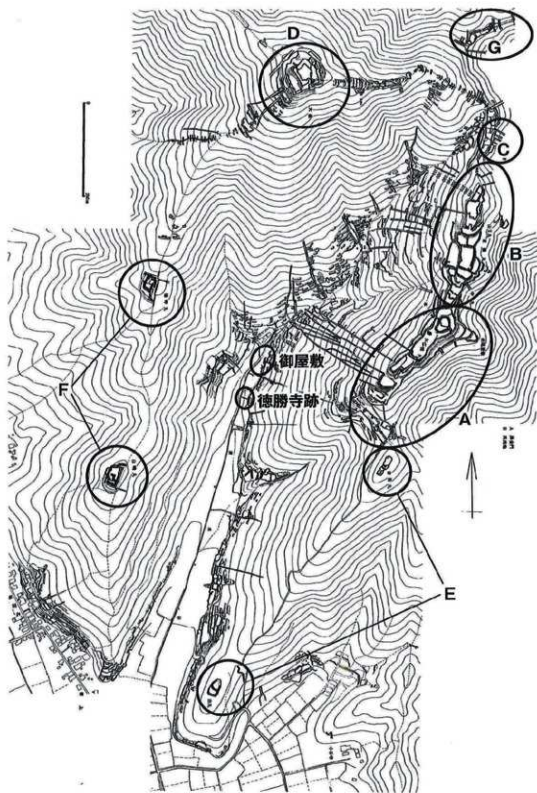


図 42 小谷城縄張り図

(滋賀県教育委員会『滋賀県中世城郭分布調査』7掲載の図面を加筆・修正)

とすれば、この月所丸が「焼尾」に相当すると考えることも可能である。先の『信長公記』には「大づくの下やけを」とあるように、大嶽との関連性がある曲輪なので、朝倉氏による改修が入るといった構造上の特徴も無理なく説明できる。この高度な城郭技法が入った「謎の曲輪」は、文献上の「焼尾」に比定するべきではなかろうか。

6 虎御前山城の歴史と構造

『信長公記』から見た虎御前山城

虎御前山城は、浅井氏の小谷城攻撃のための付城として著名だが、文献的には『信長公記』の記述以外は皆無と言ってもよい。同記の元亀元年（1570）6月21日条では、近江に侵攻した信長が小谷城を攻撃するため虎御前山まで進出し、伊部集落東にある雲雀山へ味方の軍を入れ、「信長公は諸勢を召列られ、虎御前山へ御上りなされ」とある。翌日には浅井軍の攻勢にあい、柴田左衛門太郎・中条将監・佐々内藏介を殿として、伊吹山の麓の弥高（米原市弥高）まで退却している。この時は、1日の在陣であり城郭としての普請・作事は行われなかったと推定される。

『信長公記』元亀3年（1572）7月21日条に、「浅井居城大谷へ推詰め、ひばり山・虎御前山に御人数上せらせ、佐久間右衛門（信盛）・柴田修理（勝家）・木下秀吉（秀吉）・丹羽五郎左衛門（長秀）・蜂屋兵衛頭（頼隆）御付けられ、町を破らせられ、一支もさへず推入れ、水の手まで追上げ、数十人討捕り」とある。これは信長の小谷城攻撃を記すが、虎御前山は雲雀山と同様に扱われ、一時的な在陣場所となっており、この時も本格的な築城は行われていなかった。

虎御前山に城郭としての普請・作事の手が入るのは、小谷城の包囲を狭めるため、信長が先の小谷攻撃直後の同月（7月）27日から、翌月（8月）8日前後にかけて陣城を構築した時である。『信長公記』7月27日条に、「虎御前山御取出の御要害御付けらる」とあり、8月8日条には「虎御前山御取出御普請程なく出来訖」とあり、10日余りでこの大規模な陣城を構築したことになる。その後、この「取出」の「御座敷」からの眺望を長々と同記は記す。北は「浅井・朝倉高山大づく」、西は「海上」から比叡山から石山寺、東は「伊吹山、麓はあれて残り不破の関」が望めると記す。虎御前山の主郭には、「御座敷」がある御殿状の建造物があったことになる。さらに、同城から宮部まで軍道を構築したことも記される。

下って、小谷落城を記録した8月27日条（実際は8月29日となる）に、小谷城小丸を攻め、浅井久政の首を取った秀吉が、虎御前山まで戻り、久政の首を信長の実検に供したとある。小谷落城時まで、この陣城が信長やその臣下の居所として機能していたことが確認できる。虎御前山城を文献的にみれば、信長やその家臣によって築かれ、その後の使用はなく、信長やその家臣築城の跡がそのまま残っていることになる。

虎御前山城の構造

城郭は小谷城の西方700mの山上に展開するが、南北の尾根に1,500mにわたって複数の曲輪が点在する。天正19年（1591）の年号が入るが、江戸後期の成立とみられる「虎御前山古図」では、南から多賀貞能・蜂屋頼隆・丹羽長秀・瀧川一益・堀秀政・織田信長・佐久間信盛・木下秀吉・柴田勝家の陣所を示すが、江戸時代の伝承地を示すとみられる。南半分は滋賀県のキャンプ場が造成され破壊が甚だしいが、電波中継所以北（龍川一益の陣以北）の北半分は良好に遺構が残っている。最高所に位置する主郭を織田信長の陣、その北の小谷城に対する曲輪を木下秀吉の陣とするのは、江戸時代の伝承とは言え蓋然性が認められる。

基本的に削平地と堀切からなる遺構で、木下秀吉陣などでは土塁が見受けられる。ただ、最近になって、長谷川博美氏・高橋成計氏・高田徹氏によって、佐久間信盛陣所と呼ばれる尾根とその南の尾根から下方に向かって堅土塁が延び、麓でこの2つの堅土塁が合流する場所に虎口が認められると報告がなされた。2つの尾根の間の谷にも遺構が認められるという。これらは、山上から山下へ出撃する通路を確保したもので、まさに秀吉等が出撃した小谷城攻撃ルートと考

えられる。高田氏によれば、天正9年(1581)に羽柴秀吉によって築かれた鳥取城の付城・太閤ヶ平(鳥取市)や、文禄・慶長の役で朝鮮半島南部に築城された倭城の登り石垣の先駆的遺構とみられるという。ただ、この堅土塁という先駆的な構造を持ちつつも、虎御前山城は基本的には削平地と堀切・土塁からなる構造で、文献によるとおり、元龜争乱期の織田軍の城郭技術を示すものと考えていいだろう。

まとめ

以上の考察から、長比城東曲輪の形状を見直してみよう。ここでは、直線土塁は明確には確認できないが、枡形虎口は存在し、それも発掘調査から虎口内部に土塁を築き、導線を屈曲させる手法をとっていたことが知られる。土塁の構築や枡形虎口は、浅井氏時代の城郭をベースに朝倉氏勢力による改修がなされていると推定される。よって、前稿を改め長比城東曲輪は朝倉氏による改造が想定されると結論する。長比城西曲輪や須川山砦が朝倉氏によって新造されたのに対し、東曲輪は以前からあった浅井氏時代の城郭に、朝倉氏が改造を加えたものと見るべきだろう。

ところで、今回考察した「姉川・小谷合戦関連城郭群」の城郭は、いずれも朝倉氏や織田氏の改造を受けており、浅井氏時代のオリジナルな城郭は一つも残っていないことが判明した。ただし、削平地のみで構成される横山城北城(西尾根を除く)は、浅井氏時代の城郭の本来の姿と考えることができるだろう。その意味では、全く文献史料はないが、長浜市高月町磯野に所在する、浅井氏重臣磯野氏の居城磯野山城の形状は興味深い。その構造は削平地も狭く、土塁も設けられない古いタイプの城郭と規定されている。土塁を伴わない削平地を連ねたのみの城郭構造を、元龜争乱以前の浅井氏城郭のオリジナルな縄張として想定すべきであろう。

第3節 長比城跡と須川山砦跡の価値

中井 均

はじめに

長比城跡と須川山砦跡について今回の発掘調査の成果を中心にその構造を分析することとしたい。今回の調査では両城砦跡から遺構、遺物が全く出土しなかった。実際、戦国期の山城跡の発掘調査では遺物の出土量はそう多くはない。集落遺跡などに比べると圧倒的に少ない。しかし、少ないながらも遺物の出土はあるのが普通で、今回のように両城砦跡ともに皆無という結果は珍しい。

ただ、この遺構、遺物が出土しなかった点はむしろ両城砦跡を考察する上では重要であり、成果として評価できる。拙稿では遺構、遺物の出土しない戦国期城館跡を事例に比較分析を加えてみたい。

ところで戦国期には列島に多くの城館が構えられた。滋賀県では1981年から10年におよぶ分布調査によって約1,300もの城館跡が確認され、報告書が刊行されている(1)。こうした城館跡には様々な機能があつた。守護大名の居城、戦国大名の居城、国衆の居城、土豪の居城、居館、境目の城、城攻めの付城、合戦の陣城などである。発掘調査によって検出された遺構や出土遺物は城館跡の機能そのものを示しているという視点から分析する必要がある。

長比城跡の構造と機能

長比城跡については『信長公記』に「去程に、浅井備前越前衆を呼越し、たけくらべ・かりやす両所に要害を構へ候」(元亀元年(1570)6月条)と記されている「たけくらべ」とは米原市長久寺に所在する長比城跡である。「かりやす」とは米原市上平寺に位置する菊安城(国史跡京極氏遺跡上平寺城跡)のことである。

元亀元年(1570)4月25日に浅井長政は義兄である織田信長を見限り、越前朝倉義景とともに敦賀で信長を討つ。信長は朽木を抜けて八瀬に至り、近江永原を経て千種峠を越えて伊勢に抜けて居城の岐阜城に戻った。

信長を討ち果たすことの出来なかった浅井長政が、信長の近江進攻を防ぐために江濃国境に築いた要害が長比城と菊安城であった。美濃から大軍を率いて近江に進攻する場合は関ヶ原から西に進む中山道と、北西に進む越前道(北国脇往還)の2道しかない。そのため中山道を監視するために築かれたのが長比城で、越前道を監視するために築かれたのが菊安城であった。

前述したように城館には様々な機能があつたが、長比城、菊安城は極めて臨時的な陣城として築かれたものとして位置付けできよう。陣城とは城を攻めるために築かれた陣城や、合戦に備えて築かれたものがあるが、長比城、菊安城は街道を監視し、封鎖する目的で築かれた陣城であった(2)。

街道監視、封鎖目的の陣城の代表的事例として宇佐山城跡(大津市)を挙げることができる。『多聞院日記』の永禄13年(1570)3月条に「今度、今道北・ワラ(ウ)坂南、此二道ヲトメテ、信長ノ内、森ノ山(三)左衛門用ヲ築キ、此ノフモトニ新路ヲコシラエ、是へ上下ヲトス」とあり、近江坂本と京を結ぶ今道越(山中越)と、近江大津と京を結ぶ遠

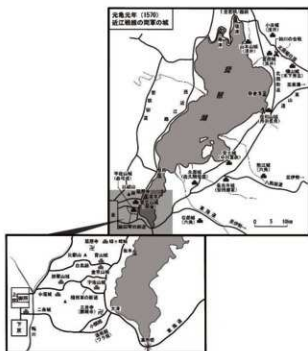


図43 宇佐山城位置図

坂越という2大幹線道を封鎖し、「新路ノ大ナル坂ヲ越エテ山中ト云ウ所ヲ通り」（『多聞院日記』）という新道を監視するために信長が用害を築いている。これが宇佐山城で、街道封鎖と新道監視のための築城であった。そして得として入れ置かれたのが森可成であった（図43）。

この宇佐山城は石垣によって築かれており、虎口は柵形状を呈している。また、発掘調査によって瓦が出土している。従来こうした石垣遺構や出土瓦は永禄13年（1570）の信長によるものと考えられていた。しかし、信長による臨時的な陣城で石垣によって築かれた事例はなく、現存する宇佐山城の石垣構築年代は再検討を要する。元亀元年（1570）の志賀の陣後の宇佐山城には明智光秀が在番し、翌2年（1571）の比叡山焼き討ちの際には織田軍の本営となっている。石垣が築かれたのはこの段階の可能性が高い。あるいは光秀が坂本城を築いた後も詰の山城として維持管理していた可能性も高く、石垣はその段階も可能性もある。

宇佐山城跡は大きく4か所の曲輪から構成されているが、北端のIV郭のみは土造りで石垣が用いられていない。おそらくこの部分が永禄13年当時のもので、石垣造りのI～III郭が後に光秀によって石垣造りに改修されたものと考えられる。

さて、長比城跡は大きく東の城と西の城の2城から構成されている。興味深いのは両城間に自然地形が残され、あたかも別々に独立したかのような構造となっている。兵学（軍学）にいう「別城一郭」構造に相当しよう。東の城跡は土塁を巡らせ北東、南東、南西の3か所に虎口を構える。北東虎口は喰い違い虎口となり、東辺土塁が突出して虎口に対して横矢を効かせている。南東虎口も喰い違い虎口となり、東辺土塁が突出して虎口に対して横矢を効かせている。南西虎口は規模は小さいが柵形虎口となる。

一方西の城跡は四周に分厚く高い土塁を巡らせ南東、南西の2か所に虎口を構えている。南東虎口は規模は小さいが柵形虎口となる。南西虎口は平虎口となる。

こうした別城一郭構造の城郭が近隣にいくつか認めることができ、湖北と湖東の境目に集中して築かれていることを指摘したことがある⁽³⁾。大尾山城跡（米原市）は北城と南城から構成されている。両城の間には自然地形が残り、明らかに別城であるが一つの城として機能していた。その立地は湖北と湖南の境目であるとともに

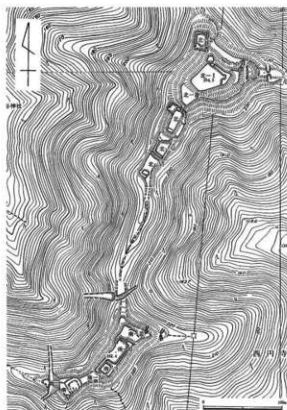


図44 大尾山城縄張り図

に山麓には北国街道が走っている（図44）。琵琶湖岸に位置している磯山城跡（米原市）は土塁、堀切などは認められず、曲輪を階段状に配置するだけの古いタイプの構造である。磯山は南北に長い山稜で、北の山頂が磯山城と呼ばれ、南の山頂が虎ヶ城と呼ばれ、その間は自然地形を残す別城一郭タイプの構造を示している。磯山は湖岸における湖北と湖東の境目に位置している。天文年間（1532～55）に江北守護京極氏と近江守護六角氏の国境紛争に築かれた（図45）。

また、菖蒲嶺城跡（米原市・彦根市）も南北2城で構成され、両城間には自然地形が残り、別城が一つの城として機能していたことが分かる。この城も湖北と湖南の境目に当たり、山麓には中山道が走っている（図46）。



図45 磯山城綱張り図

ところが米原市教育委員会による発掘調査で、本坊より一段下の坊跡の土層が2時期にわたって築かれていることが明らかになった。その上層の土層盛土から15世紀の遺物が出土したことにより、上層土層の構築が少なくとも15世紀以後のものであることが判明した。



図46 葛籠城綱張り図

さて、長比城跡は地上に見事に綱張り構造が認められる城跡である。ところが発掘調査では東郭の南東虎口、西郭の南東虎口で門跡の遺構検出を目的にトレンチを設定したが遺構、遺物は一切検出されなかった。地上に見事に遺構を残しており、戦国時代の城跡であることは間違いないにもかかわらず遺構が検出されなかったということは、作事に関し

湖北と湖東の国境で、かつ街道監視の山城に別城一部構造の山城が構えられている。長比城の別城一部構造もこうした国境に面し、山麓に街道が縦貫しているという立地から選択された綱張りであったと考えられる。

さらに別城一部で重要な城跡が「かりやす」城、即ち菊安城である。菊安城跡は永正2年(1505)に江北守護京極高清によって築かれた上平寺城の跡地に新たに築かれた城である。分厚い土塁や樹形虎口はこの高階段のものではなく、元亀元年(1570)の浅井長政による「かりやす」用害の時に築かれたものである。これまで菊安城は京極氏の上平寺城跡を改修しただけの城として見られていた。ところが菊安城跡の西側谷を隔てた対岸の尾根筋に存在した中世の山岳寺院である弥高寺も城郭に改修された可能性のあることが近年の発掘調査で明らかとなっている。

弥高寺は伊吹山西大護国寺の一つで、本坊を頂点に約60の坊跡が階段状に築かれており、弥高百坊と呼ばれている。明心4年(1495)に京極政経が弥高寺にいたことや、翌5年(1496)には京極高清が弥高寺に布陣していたことが知られており、寺院を城郭として利用していたことが知られる。

この改修は上平寺築城時に京極高清によるものとも考えられるが、弥高寺跡の大門と呼ばれる門の構造は門前に横堀が巡り、門は直進せず土橋を越えると左折する樹形状を呈している。これを1505年の高階段に比定することはできない。大門の構造は元亀元年(1570)の浅井氏による改修と考えてよい。と、なる「かりやす」用害として築かれた菊安城も別城一部構造で築かれた城であった。ただし、菊安城跡と弥高寺跡は別城一部としては距離が離れすぎており、いずれも単独の城として築かれたと見れなくもない。しかし、同時期に同じ目的で築かれたということは別城一部と評価できよう(図47)。

では遺構の残らないような施設が構築されていたのであろう。

土塁上からも遺構は検出されておらず、柵列なども設けられていなかった。作事の遺構が認められないということは、まさに陣城とは土木施設であったことを端的に物語っている。

しかし、作事が全くなかったわけではなく、例えば土塁上には櫓を立て並べて塙としていたものと考えられる。門や櫓に関しては組み立て式の据え置きではなかったかとみられる。

元亀元～2年(1570～71)織田信長は浅井長政軍の最前線である佐和山城攻めを行う。その直後に信長が木下藤吉郎、樋口三郎兵衛に宛てた書状に「佐和山おさへの諸執出(書)之道具共、兩人かたへ預け置くべく候、小谷表之普請之用にすべく候」とある。佐和山城攻めの付城に用いた資材を藤吉郎と三郎兵衛に預けるので、速やかに小谷城攻めの陣を構築するのに用いよという内容である。この書状から攻城戦の陣城用に道具、即ち用材が準備されていたことが分かる。用材の詳細は不明であるがおそらく櫓や門などの建築用資材であったものと考えられる。これらは常に準備されていたようであり、付城構築に際しては使い回されていたことがうかがえる。いわばプレハブ工法のようなものであり(4)、柱なども地中に掘って立てるものではなく、地上に据え置いたのであろう。そのため遺構としては残らなかったものとみられる。

では遺物の残らないのはどうしてであろうか。この点についても近年各地で実施されている調査成果から分析してみたい。天正6～8年(1578～80)の三木城包圍戦で織田軍の付城として築かれた加佐山城跡(兵庫県三木市)では土塁や曲輪は検出されたが、建物遺構の検出は皆無で、遺物も鉄釘1点のみであった。同じく三木城攻めの付城であるシクノ谷峯付城跡(同)、高木大塚城跡(同)では建物遺構は検出されず、遺物は数点出土したに過ぎない(図48)。

天正9年(1581)羽柴秀吉は毛利軍の吉川元春に攻められた南条元統の立て籠る羽衣石城の救援に向かった。『信長公記』には「十月廿六日、伯耆国に南条勘兵衛・小鴨左衛門尉兄弟兩人、御身方として居城候処、吉川罷出て、南条表取巻きの由注進候。眼前に攻殺させ候ては、都鄙の口羅無念の由候て、

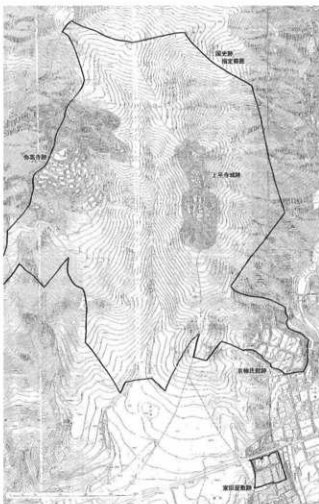


図47 上平寺、弥高百坊陣張り図

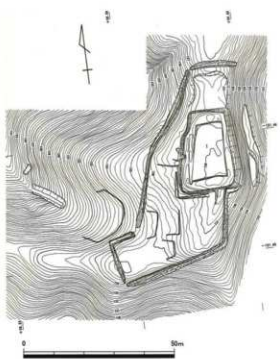


図48 加佐山城平面図

羽柴筑前守後巻として罷立ち、東西の膚を合せ一戦に及ぶべき行にて」とある。その秀吉が後巻として築いた付城と考えられるのが十萬寺所在の城跡(鳥取県湯梨浜町)である。十萬寺所在の城跡では赤色立体図が作成され、土塁囲いの見事な山城遺構が確認された。発掘調査では残り残された土塁や、盛土による土塁は確認されたが、明らかに虎口と見られる土塁の開口部からは門跡は検出されなかった。ここでも出土遺物は皆無であった(図49)。

このように城攻めの付城などでは遺構が検出されな

いだけではなく、遺物も出土しないという共通点が認められる。恒常的な山城では生活に必要な雑器や威信財などが出土するが、臨時的に築かれた付城などの陣では遺物として残らない道具で飲食していたものと考えられる。あるいは対陣期間も短く、陶磁器類も割れることなく陣の撤収時に持ち帰られたものと考えられる。さらに遺物として残らない道具とは陣外からの輜重部隊による配給によって飲食料が提供された可能性もある。

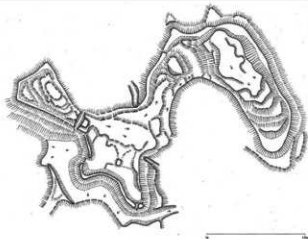


図49 十萬寺所在の城跡復原図

須川山砦跡の構造と機能

長比城跡の北方約200mの尾根続きの山頂部に須川山砦跡は所在している。須川山砦跡の西山麓には須川城跡が所在している。この須川城は在地土豪遠藤氏の居城と伝えられている。そしてその背後の須川山砦跡に関しては遠藤氏の詰城ではないかと思われていた。

その規模は極めて小規模で、東西約35m、南北約50mに過ぎない。土豪の詰城としては別段問題は無いものの、注目されるのはその構造である。まず目を引くのは曲輪周囲を土塁によって囲繞されていることである。さらにその土塁は分厚く高い。そして曲輪構造は長比城跡の西城跡に酷似している。こうした土塁構造や縄張りからほとんど土豪の詰城とは考えられない。

虎口は北端部と南端部の2か所に構えられている。北端部の虎口は喰い違いの土塁の前面に「L」字状の土塁を突出させて外形形としている。さらに主郭西側一段低く副郭を構えているが、土塁を「コ」の字状に配しており曲輪というよりもむしろ樹形空間の可能性もある。南端の虎口も北端虎口同様前面に「L」字状の土塁を突出させて外形形としている。このような発達した虎口構造からも土豪の詰城とはとても考えられない。

発掘調査は主郭と東辺土塁にかけてトレンチが設定されたが建物跡などの遺構は検出されなかった。東辺土塁の構築については地山削り出し土塁であることが判明した。このように須川山砦跡の発掘調査状況は長比城跡の調査状況と同じ結果であり、やはり土豪の詰城ではなく、臨時的に築かれた付城の可能性が高い。

その構築年代は縄張り、虎口構造、土塁の規模などから長比築城と同時期と見て間違いのない。さらに長比城跡とは尾根続きで距離も近いという立地的条件からは同時期に築城されたばかりではなく、同じ城郭として築かれたものと考えられる。長比城跡は別城一部と述べたが、その別郭とは長比城の東郭と西郭のふたつだけでなく、須川山砦も含む3か城から構成されるものと考えられる。

おわりに

拙稿では長比城跡、須川山砦跡について発掘調査から遺構、遺物が出土しなかったという事実から臨時的な付城として築かれたことを明らかにした。考古学的方法論では出土遺物によって相対年代を導き出すわけであり、そうした方法

論だけでは遺物の出土しなかった両城砦跡の年代は不詳ということになる。

しかし、長比城跡に関しては文献史料が残されており、その築城年代を知ることができた。さらに縄張りという城郭研究の独自性からは須川山砦跡の構造が長比城跡と酷似することより年代決定や築城主体も絞り込めることができた。

このように両城砦跡の構築年代、構築事由が考古学、文献史学、城郭研究によって明らかになったのである。

ところで最後に今ひとつ分析しておかねばならない課題がある。それは『信長公記』の「越前衆を呼越し」という一文である。これを解釈すれば浅井長政が自領内で他[国]の戦国大名の援助によって城を築いたということとなる。長比・菊安築城は信長の近江進攻を阻止するための重要なものである。それを越前衆に任せたとすることは越前の築城技術を投入したかったということにほかならない。分厚い土塁、樹形虎口などがそうした築城技術であったのであろう。

信長の近江進攻後の元龜3年(1572)7月に朝倉義景は1万5千の兵を引き連れて小谷城の救援に向かう。『信長公記』には「朝倉左京大夫、人数一万五千ばかりにて、七月廿九日、浅井居城大(小)谷へ参着。然りとはいへども、此表の為妹見及び、抱へ難く存知、高山大づくへ取上り居陣なり」とあり、小谷城の不備に対して自らは本丸ではなく大嶽を本陣としたことが記されている。

このことより現存する小谷城跡の大嶽の遺構は浅井氏によるものではなく、このときの朝倉義景によって改修されたものと見られる。大嶽の構造の特徴は分厚い土塁であり、これは長比城跡や須川山砦跡の土塁に共通している。

さらに小谷城跡では大嶽より南西に伸びる尾根上に福寿丸、山崎丸と呼ばれる独立した出城が築かれている。いずれも小谷城跡では特異な矩形の土塁と横堀を巡らせる構造となっている。これも元龜3年(1572)の義景による改修とみてよいだろう。

このように長比城跡、須川山砦跡の発掘調査成果や縄張り構造は織田信長と、浅井・朝倉氏の元龜元年から4年にかけての近江での戦いのなかで理解すべきであり、その抗争を伝える重要な城跡として評価できよう。

註

- 1) 滋賀県教育委員会 1983～92 『滋賀県中世城郭分布調査1』～『同10』
- 2) 長比城跡、菊安城跡の評価についてはすでに述べたことがある(中井均 2001 「浅井・朝倉同盟の一考察—城郭構造を中心として—」 『西田弘先生米寿記念論集 近江の考古と歴史』所収)
- 3) 中井均 1989 「太尾山城跡について」『近江の城』第32号 近江の城友の会
- 4) 多田暢久は賤ヶ岳合戦の陣城群を分析して、陣城の作事に関してプレハブ工法であったことを明らかにしている(多田暢久 1989 「陣城プランの特徴について—賤ヶ岳陣城群を中心に—」『近江の城』第32号 近江の城友の会)

第4節 長比城跡と須川山岩跡の課題と保存・活用について

水野 和雄

1 今後の課題

浅井長政が「たけくらべ・かりやす」の地に要害（城・砦）を築いたことは、『信長公記』の元亀元年6月19日条「去程に、浅井備前越前衆を呼越し、たけくらべ・かりやす両所に要害を構へ候。／信長公御調略を以て堀・樋口、御忠節仕るべき旨御請なり。／六月十九日、信長公御馬を出だされ、堀・樋口謀叛の由承り、たけくらべ、かりやす取物も取敢へず退散なり。たけくらべに一兩日御逗留なされ、六月廿一日、浅井居城大谷へ取寄り、（以下略）」に詳しい。また、『毛利家文書』にも「元亀元年六月十九日、織田信長、岐阜より出馬して、近江の長杖・刈安尾両城を手に入れる」とある。

この「たけくらべ」は、滋賀県米原市長久寺地区の「長久」が「たけく」、「長比」と訛って伝えられた可能性があり、岐阜県との境にある「寝物語の里」の別名でもあり、古くから「長比、長杖、長枝、長久、長久羅辺」等々と記されてきた。

「たけくらべ（長比城跡）」は、滋賀県米原市と岐阜県不破郡関ケ原町にまたがる野瀬山（標高391m）の山上に築かれた「野瀬山城跡」を構成する3か所の郭群（長比城の東郭・西郭、それに北西方向に少し離れて須川山砦）として比定され、南麓の中山道を守備する城塞として位置づけられている。

次に「かりやす」は、滋賀県米原市上平寺地区の「京極氏遺跡—京極氏城館跡—弥高寺跡—」（平成16年2月27日に国指定史跡）の一部に比定されているが、その指定説明には「（前略）16世紀初め一族の内紛を収めた京極高清が上平寺に新たに築いた城館は、大永3年（1523）の国人一揆により落城するまで戦国大名の城館として北近江の政治・文化の中心として機能した。（中略）、城跡は、伊吹山から南に延びる刈安尾と呼ばれる尾根の先端に築かれ、標高669mの場所に主郭を設ける。規模は、南北約450m×東西約150mを測り、最北部に大きな堀切を配し、土塁で囲まれた主郭を最高部に多くの曲輪が南に分布する。」とあるだけで、「刈安尾城・上平寺城・上平城・桐（霧）ヶ城」などの名称は用いていない。

『上平寺古図』（有安善秀所蔵）には、「伊吹大権理」から「三・二・本丸」の城跡に至る途中「七曲」と書かれた道の右側に「刈安尾」の墨書が見られることから、近年この城跡を「刈安尾城」に比定してきた。しかし、『古図』の「本丸」の文字の右に書かれていたであろう城の名は白く塗りつぶされて判読できないものの、地元では、この城は京極高清が築城した「桐（霧）ヶ城」で、後に浅井長政が越前衆を集めて要害にしたと言いつた伝えられており、最近では、上平寺地域に所在している城跡であることから、「上平寺城跡（刈安尾城）」とも称されるようになった。南麓の北国脇往還を守備する城塞として京極氏の桐ヶ城を刈安尾城に改修したと考えられている。ただし、『中山道分間延絵図』（27頁）を見ると、中山道を挟んで北に「古城跡」や「字野瀬山」、南に「字苜安山」の墨書がみられ、「古城跡」を「京極氏城＝上平寺城跡」、「字野瀬山」を「長比城跡」に比定した場合、中山道の南に記された「字苜安山」が「刈安尾城跡」としてこの中山道を両側に封鎖しようとした可能性も残されているのではなかろうか。上平寺地区の「刈安尾」と、この「字苜安山」のどちらが『信長公記』で記す「かりやす」なのか今後の課題となろう。

以上、長比城（野瀬山城）は、つねに刈安尾城（上平寺城）と2城1対で登場する近江国（滋賀県）と美濃国（岐阜県）の国境を守備する城（砦・要害）であり、浅井長政の要請で越前衆が築いたとされている。そして、野瀬山城（長比城や須川山砦）は、浅井長政の臣でこの地を治めた国人堀次郎と一族の樋口三郎兵衛が守備したが、元亀元年6月19日以前に織田信長に調略され寝返っている。信長にとって長比城や刈安尾城を調略したことは、これら国境の城を突破口として、以後のいわゆる「姉川合戦・小谷合戦」を優位に勝ち進め、近江の浅井氏、越前の朝倉氏の滅亡を早めたと言っても過言ではない。

以下、今後の課題について箇条書にする。

1 名称の問題 「たけくらべ」の要害を「野瀬山城跡」として括るか、「長比城跡・須川山砦」で括るかは難しい問題である。『信長公記』等の文献を重視すれば「長比城跡」であるが、考古学を重視すれば【野瀬山城跡（長比城跡・須川山砦跡）】とするのが望ましい。

ちなみに「かりやす」の要害についても、国史跡「京極氏遺跡～京極氏城館跡・弥高寺跡～」に含まれているにも関わらず、「城跡は、伊吹山から南に延びる刈安尾と呼ばれる尾根の先端に築かれ」とあるだけで「上平寺城、刈安尾城」などの呼称は全く用いられていない。考古学を重視すれば【上平寺城跡（桐ヶ城跡＝刈安尾城跡）】とするのが望ましい。

2 国境の城跡 【野瀬山城跡（長比城跡・須川山砦跡）】は、近江と美濃の国境（滋賀県米原市と岐阜県関ヶ原町の県境）に跨る近江浅井氏が築いた国境警備の城跡である。そのため、国に史跡指定を申請（史跡指定後の公有地化、保存、管理、発掘調査、整備、活用等についても）するに際しては、両県はもとより両市町とそれぞれの地元住民が足並みを揃えて協議し、国の指導のもと進めることが肝要である。（参考：福井県敦賀市と滋賀県長浜市余呉町に跨る史跡『内中尾山城跡（玄蕃尾城跡）』平成11年7月国指定）。

3 江濃国境防衛ライン 野瀬山の切立った山稜に築かれた「野瀬山城跡（長比城＝東郭・西郭）・（須川山砦＝北西郭）」は、その築城時期や各郭の相似性から「1城3郭」で構成された山城跡と考えられる。そして、北方の旧伊吹町上平寺の史跡「京極氏遺跡～京極氏城館跡・弥高寺跡～」の「刈安尾」に「上平寺城跡（桐ヶ城跡＝刈安尾城）」を築き、浅井長政は、この両城でもって美濃方面からの中山道と北国脇往還を守備し、信長軍の侵攻を阻止する最前線の防衛ラインとした。今後は、国境を守る「境目の城」、例えば、若狭の国吉城跡、越前の中尾山城跡（玄蕃尾城跡）、近江の鎌刃城跡など、軍道やその周辺での国境防衛ラインを確定し、発掘調査をしていくことが必要であろう。

4 『野瀬山城跡（長比城跡・須川山砦跡）』 この「1城3郭」からなる『野瀬山城跡』を単独で史跡指定するには心許ない。平成15年に「滋賀県の中世城前遺跡の保存に関する検討委員会」で検討された資料「姉川・小谷合戦関連城郭群」に基づき、他の関連した城郭（横山城跡、虎御前山城、丁野山城、中島城、磯野山城）とともに歴史性を優先した立ち位置からの1構成要素として、これらを一括して国指定史跡に申請することが肝要であろう。

5 『姉川・小谷合戦関連城郭群』としての史跡指定 元亀元年6月19日に織田軍が、浅井長政の「たけくらべ・かりやすの要害」を調略して始まった姉川合戦から、天正元年（1573）8月28日に小谷城が落城し、浅井氏が滅亡する近江湖北での攻防戦跡（「戦争遺産」）をどのような視点（浅井氏の城、織田氏の城、または織田信長の近江侵攻を中心とした城郭群）でもって括るか、また、野瀬山城跡（長比城跡・須川山砦跡）をはじめ横山城跡、虎御前山城跡、丁野山城跡、中島城跡、磯野山城跡を、既に史跡指定されている浅井氏の史跡「小谷城跡」に追加指定していくのかも考慮すべきであろう。つまるところ、近江浅井氏守備の城、美濃織田氏侵攻の城のどちらの立ち位置で史跡指定にするのかもっと明確になされるべきであろう。

2 保存・活用の展望

1 調査研究 『野瀬山城跡（長比城跡・須川山砦跡）』を包括する「野瀬山および山麓の中山道」の文献、遺跡等の悉皆調査を実施し、また、『上平寺城跡（桐ヶ城跡・刈安尾城跡）』についても「刈安尾砦および山麓の北国脇往還」の調査を行い、両城が果そうとした江濃国境の防衛ラインの検証に努めること。また、野瀬山城の自然環境（動物・植生・気候）調査等を実施し、「長比城跡・須川山砦跡」については史跡指定され、公有地化した後、年次計画に沿って発掘調査、整備を実施すべきである。

2 指定 「長比城跡・須川山砦跡」の遺構そのものの指定はもとより、『野瀬山城跡』として、両砦跡を結ぶ連絡道や整備遺構等もその範囲に含めるべきであろう。また、出来ることなら地元地権者の同意でもって、導入口（遊歩道・散策道）の使用を確保しておくことが肝心である。

3 整備 史跡指定のための発掘調査は最小限に留めざるを得ないが、指定後は、整備に先立って、計画的発掘調査が実施されるであろう。整備方針については、市民が気軽に親しめる史跡・自然観察コース、健康散策コース、トレッキングコースなどを設定するなど、米原市と関ヶ原町双方での綿密な協議が必要である。公有地化されれば史跡の平面復原等が可能であるが、それまでは樹木の伐採、遊歩道整備（駐車場の確保、簡易トイレ、史跡案内パンフレット箱、遊歩道、案内標識・説明板、展望所、休憩ベンチなどの設置）が必要であろう。

4 活用 滋賀県は、米原・長浜市と諮って、『姉川・小谷合戦関連城塞群』の括りの中で「長比・須川山砦跡」の重要性を正しく理解してもらうため、地元住民とともに学習・研修・講習会を開催してボランティアガイド育成に努め、市民とともに遺跡探訪、自然観察会、健康ウォーク、イベントなどの恒常的企画を実施し、学校教育とも連携してその魅力を多方面に発信して行くことが望まれる。

5 景観 【野瀬山城跡（長比城跡・須川山砦跡）】と【上平寺城跡（桐ヶ城跡＝刈安尾城跡）】は、中山道と北国脇往還を守護する国境の城跡であり、木々を伐採し、望遠鏡やパノラマ看板、ベンチ・四阿を設置して、「中山道—北国脇往還」や「伊吹山」、遠くは横山城跡、姉川、虎御前山城、小谷城跡、眼下の町並みなどの眺望を確保するのが望ましい。

6 管理 米原市教育委員会は、地元住民の協力を得て駐車場やトイレの確保、遊歩道の整備、説明板やパンフレット箱の管理、年2回程度の城跡や園路の清掃、樹木の枝打ち、危険箇所への補修等々の維持管理に努める。

7 運営 米原市教育委員会は、『姉川・小谷合戦関連城塞群』の総合窓口として、文化庁、滋賀県の指導の下長浜市、岐阜県関ヶ原町、地元地区と連携を密にして、野瀬山城跡（長比城跡・須川山砦跡）の維持管理やボランティアガイド養成等を円滑に進めるため地元「野瀬山城跡（長比城跡・須川山砦跡）保存会」を立ち上げる必要がある。

第9章 総括

第1節 長比城跡・須川山砦跡の総合調査の成果

(1) 文献調査の成果

今回実施した文献調査により、①築城時期・築城主体、②長比城の名称、③場所の比定、④長比城と須川山砦との関係性の4点を確認することができた。

①築城時期・築城主体について、【史料四】の『信長公記』に「去程に、浅井備前越前衆を呼越し、たけくらへ・かりやす両所に要害を構え候」とあることから、元亀元年(1570)に浅井長政が越前朝倉氏の力を借りて、長比城・菊安城(上平寺城)を築城・改修したことが分かる。

②名称について、当時長比城は織田方と浅井方で異なった名称で呼ばれており、【史料四】の『信長公記』によると、織田方からは「たけくらへ」の「要害」と呼称されており、浅井方からは、【史料六】の『嶋記録』により「野瀬」と呼称されていたことが分かる。

③場所の比定について、「中山道分間延絵図」に野瀬山にある新明神社が描かれ、そのすぐ上に「古城跡」と記されており、これが長比城跡を指しているとみられる。また、江戸時代に書かれた見聞録や旅行記などから、野瀬山に「長比」城跡もしくは「古城跡」があることが認識されていたことがうかがえる。ただし、これらは江戸期の絵図や記録であり、間接的な推測にしか過ぎない。

同時代の史料から推測を試みると、『嶋記録』に「美濃口をさえへ」、「毛利家文書」所収の織田信長覚書に「濃・江堺目之節所」と記されていることから、近江と美濃の国境に築かれていたことが分かる。また、『嶋記録』により「野瀬」と呼ばれていたことが分かり、近江と美濃の国境ラインに当たる地域において、「野瀬」の字は野瀬山山頂から南麓にかけての地域にしか確認できず、また、これまでの調査・研究において国境ライン周辺では当該期の様相を示す遺跡は、「長比砦跡」と「須川山砦遺跡」しか確認できないことから、「たけくらへ」の「要害」は現在埋蔵文化財包蔵地として周知されている「長比砦跡」に比定できると考えられる。

④長比城と須川山砦との関係性について、上記のとおり長比城について記された史料はあるものの、須川山砦について記された文献史料は現状において全く確認できない。しかし、立地上長比城と須川山砦が一連の城郭群であった可能性が高く、そのことがうかがえる史料が残っている。【資料五】の「毛利家文書」に収められている元亀元年7月10日付、毛利元就に宛てた織田信長覚書に、浅井・朝倉氏が信長在京中に江濃の境目に砦を構えたことが記されており、また調略により4か所の砦が味方に付いたことが記されている。この4か所の砦は、長比城西曲輪、同東曲輪、須川山砦、菊安城(上平寺城)である可能性が考えられ、長比城と須川山砦が同時に築かれた一連の城郭群であったことがこの史料からうかがえる。

このように、文献調査の成果から築城時期・築城主体を推測することができ、名称についても明らかとなった。また、須川山砦についても長比城と同時に築かれた可能性が高いとみられる。

(2) 測量調査の成果

今回実施した測量調査により、長比城跡・須川山砦跡の遺構が良好に残存していること、両砦(城)跡の城郭構造を把握することができた。

長比城跡・須川山砦跡の城郭構造について、長比城跡西曲輪と須川山砦跡は三角形の曲輪が高く分厚い土塁が周囲を圍繞する。一方東曲輪は、西曲輪や須川山砦跡ほど高い土塁ではないものの、同じく周囲を土塁が圍繞する。また、西曲輪および須川山砦跡の虎口は、土塁の一部に開口部を設けて、その前面にスロープ状の平坦面を設けることによって折れを有する外枳形状の虎口を採用している。一方、東曲輪の虎口は、内枳形状の虎口が採用

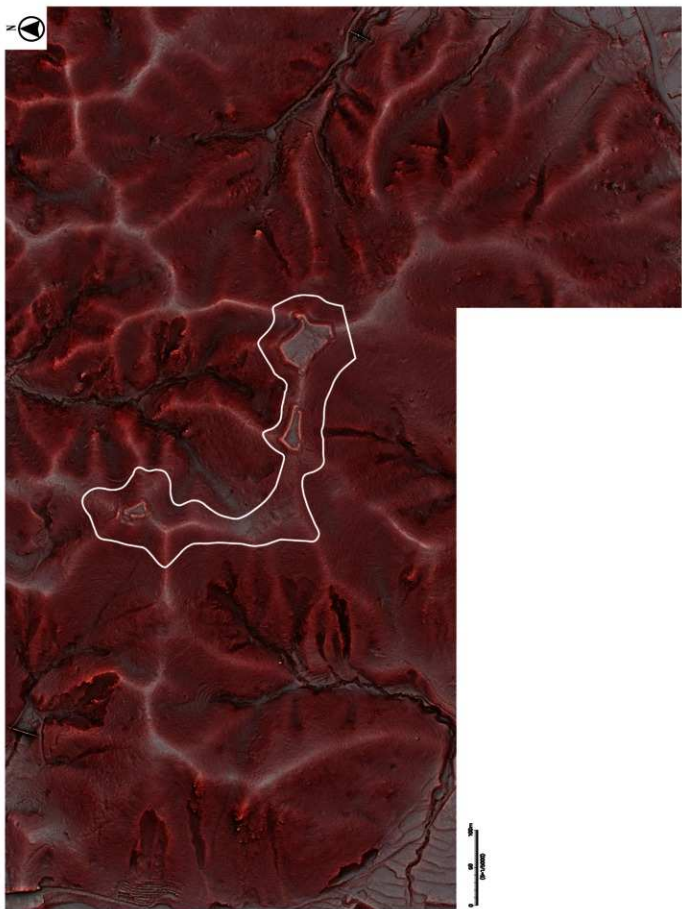


圖 50 長比城跡・須川山砦跡 城域範圍圖

されているが、虎口の前面には西曲輪、須川山砦跡と同様にスロープ状の平坦面を備える。また両砦（城）跡は小規模な城郭にも関わらず虎口を二つ以上有していることなども共通し、城郭構造上共通する点が多い。また、両砦（城）跡間にある鞍部については、傾斜も緩く広域なスペースがあり、駐屯部として使用された可能性が考えられることから、両砦（城）跡に付随する遺構として捉えられる。今回の測量調査の成果を基に、長比城跡・須川山砦跡の城域を図50で提示した範囲に設定した。

測量の結果、長比城跡・須川山砦跡は共通する城郭構造を有していることから、同時に築かれたと考えられる。この両砦（城）跡に共通する城郭構造について、越前朝倉氏の国吉城攻めの際に築かれた中山の付城（福井県美浜町）などにも見出すことができ、『信長公記』で記されている通り朝倉氏の協力の下で築かれたことが分かる。

（3）発掘調査の成果

今回実施した発掘調査により、①遺物・建物遺構が存在しないこと、②長比城跡・須川山砦跡の土塁の構造、③長比城の虎口動線を確認することができた。

①長比城跡・須川山砦跡には土塁遺構である土塁、堀は存在しているが、建物遺構・遺物は今回の発掘調査において確認されなかった。長比城跡は虎口部分のみの調査であったことから、出土しなかった可能性が考えられる。曲輪の中心部分を調査した須川山砦跡については、作事遺構が検出されなかった理由として、遺構として残らない根太などの土台を据えた建物やプレハブ工法の建物が存在していた可能性が推測され、遺物についても、遺物として残らない道具で供給されていたか、もしくは城として機能していた期間が短いことから廃城後に持ち出された可能性が考えられる。今回の調査において、建物遺構・遺物が出土しなかったことから両砦（城）跡が陣城であることは推定できる。

②長比城跡・須川山砦跡の土塁の構造について、長比城跡・須川山砦跡の土塁は下層に自然地形を残し、その上に「礫を多く含む砂質土」と「礫を含まない粘質土」との互層により構築されていることが明らかとなり、長比城跡・須川山砦跡の土塁の構築手法に共通性を見出すことができた。また、土塁に改修された痕跡を確認することができないことから、城が機能したのは一時期であると考えられる。

③虎口の動線について、東曲輪の南虎口部分の調査において、虎口内側に東西方向に延びる土塁を検出したことにより虎口内の動線を確認することができ、従来は折れを持たない内枳形状の虎口だと考えられてきたが、より発達した虎口内で折れを持つ内枳形状の虎口であることを確認できた。

第2節 長比城跡・須川山砦跡の本質的価値について

総合調査の成果から長比城跡・須川山砦跡の本質的価値について以下の3点が挙げられる。

1 築城時期・築城主体が特定できること

『信長公記』『嶋記録』などの文献史料により、長比城跡は元亀元年（1570）の織田信長による近江侵攻に備え、浅井長政と越前朝倉氏によって築かれたことが分かる。発掘調査において改修された痕跡が確認されなかったことから、遺構の時期は一時期だけであることが判明しており、元亀元年に築城され、短期間で廃城になったこととみられる。須川山砦跡については、須川の集落に所在する遠藤喜右衛門直経の館とセット関係にある詰めの城と推定されてきたが、集落との比高差が185mもあり詰城としては高いこと、建物遺構が検出されず遺物も出土しないこと、またぶ厚い土塁や技巧的な縄張りが導入されていることから、在地勢力が築いた城とは考えにくく、立地、城郭構造および土塁構造の共通性などから、長比城跡と一連の城郭群として同時期・同一主体によって築かれたと考えられる。

2 戦国時代末期の城郭遺構が良好に残存し、戦国時代末期の陣城の機能・特徴を示す貴重な事例であること

長比城跡・須川山砦跡には土塁や堅堀、堀切などが残り、遺構の保存状態は良好である。両砦（城）が築かれたのと同時に陣城として改修された蒭安城跡（上平寺城）と一体となって、国防防備と美濃方面からの交通を抑える目的で築かれたとみられ、長比城は東山道を、蒭安城（上平寺城）は北国脇往還を、須川山砦は両街道の間道である須川道をそれぞれ抑える役割として築かれた。発掘調査の結果、土木遺構である土塁の構築方法が判明し、長比城跡と須川山砦跡で共通の技術が用いられていることが明らかとなった。遺物・作事遺構が全く出土しないことから両砦（城）跡が陣城であると推定でき、両砦（城）跡が戦国時代末期の陣城の機能・特徴を把握できる好例であると考えられる。

3 姉川・小谷合戦関連城郭群の構成要素として、合戦の在り方や状況を知ることができる

姉川・小谷合戦は、元亀年間において織田氏と浅井・朝倉氏の間で繰り広げられた合戦で、日本の歴史の分岐点に当たる合戦である。姉川・小谷合戦関連城郭群は、その合戦に関わった陣城群で構成されており、日本の歴史を知る上で重要な遺跡群である。

本城郭群の本質的価値は、元亀争乱における姉川・小谷合戦に用いられた織田氏の陣城と浅井・朝倉氏の陣城が複合して構成され、当時の合戦の在り方や状況を歴史的・空間的に把握できる点にある。

織田方の陣城は小谷城を攻めるため、逆に浅井・朝倉方の陣城は小谷城を防御するために築かれ、長比城跡・須川山砦跡は、山本山城跡や丁野山城跡・中島城跡とともに小谷城を守る防衛ラインの一つとして築かれ、その最前線に位置する重要な役割を果たしていた。また、浅井氏・織田氏の両居城がそれぞれ所在する小谷山・金華山を視認できる位置に築かれていることから、織田氏の動向の監視とその状況を小谷城へ伝達する役割も果たしていたとみられる。そして、文献史料からは長比城跡が姉川・小谷合戦の開戦直前に築城がなされていること、開戦後の織田氏の動向など当時の状況がうかがえる。

今回の総合調査の成果により、長比城跡・須川山砦跡は一連の城郭群として元亀元年に浅井・朝倉氏により築かれたことが明らかとなり、浅井・朝倉氏の陣城として、本城郭群の構成要素に位置付けられる。

このように長比城跡・須川山砦跡には戦国時代末期の城郭遺構が良好に残存していることから、城郭構造を把握することができ、また戦国時代末期における陣城の特徴、機能、築城技術を知る上で重要であり、元亀争乱における織田氏に対する浅井・朝倉氏の備えや展開を知ることができる貴重な遺跡である。

第3節 本質的価値の保存と継承に向けて

長比城跡・須川山砦跡が所在する柏原地域には、中山道の宿場町である「柏原宿」、史跡北品具行墓など歴史的に重要な文化財が存在しており、地元で「やいと祭保存会」および「柏原学区史跡保存会」などの保存団体が立ち上げられ、長年にわたって文化財の保存・活用が行われてきた。そして、長比城跡・須川山砦跡が所在する野瀬山についても、地元有志が2015年頃に「野瀬山会」を立ち上げ、長年にわたって雑木の伐採や登山道の整備が行われてきた。また、整備だけにとどまらず、柏原・須川自治会によって長比城跡・須川山砦跡のトレッキングなどのイベントも積極的に開催されている。

地元主体の取組についてみてきたが、行政側の取組としては、米原市は両自治会および各保存団体と連携して両砦（城）跡の価値を周知すべく、平成30年度に北品具行御前祭において「柏原の山城を語る」（柏原学区史跡保存会）と題した講演を行い、令和2年度に「須川山砦跡発掘調査報告会」、須川山砦跡発掘調査現地説明会（須川自治会）、令和3年度に「長比城跡発掘調査現地説明会」（柏原自治会、のろし祭保存会）を開催してきた。そし

て、両砦（城）跡について市内外に広く周知すべく、令和2年度に「須川山砦跡発掘調査連報展」を、令和3年度に「長比城跡発掘調査連報展」を米原市近江にはわ館で開催した。

このように、これまで市と地元とが協力しながら、遺跡の保存・活用と普及に努めてきた。

一方、長比城跡・須川山砦跡は隣接自治体である岐阜県関ヶ原町にもまたがって所在しているものの、これまで行政界が壁となり、連携して両遺跡の保存・活用が取り組まれてこなかった。しかし、今回の総合調査をきっかけとして交流が始まり、関ヶ原町と協働で本事業を進めてきた。そして、米原市と関ヶ原町が協力し、お城 EXPO2021 や関ヶ原古戦場記念館において長比城跡・須川山砦跡の展示が行われるなど、連携した取組が行われるようになった。

今後の保存と活用の展望について、今回の総合調査により、長比城跡・須川山砦跡の重要性と歴史的な価値を明らかにすることができ、今後はこの城跡を適切に保存しながら活用していく必要がある。

長比城跡・須川山砦跡が所在する野瀬山は、地元の熱心な活動により登山道が整備されたことにより、トレッキングコースとして遠方から多くの登山者が訪れるようになってきた。この登山者へ遺跡の周知を図るべく、案内や説明の看板を設置する必要がある。また、現在は地元と保存団体が主体となって整備が行われているが、今後は米原市、関ヶ原町、関ヶ原町側の自治会なども協力し一体となって、登山道の整備や雑木の伐採、草刈りなど日常管理を継続して実施していかなければならないだろう。

地元自治会および保存団体の協力の下、長比城跡・須川山砦跡を核にして柏原・長久寺・須川地域のまちづくりを行い、地域への誇りの醸成や山城跡の保存・活用を進め、山城のまち米原市として山城を活用したまちづくりを目指していきたい。また、関ヶ原町との連携を継続しつつ、「姉川・小谷合戦関連城郭群」の構成要素である城が多数所在する長浜市と行政の枠組みを超えた連携を図り、両遺跡の保存・活用に取り組んでいきたいと考える。

圖 版

1 長比城跡
西曲輪 西から



2 長比城跡
西曲輪 堅堀 南西から



3 長比城跡
西曲輪 南虎口 南西から





1 長比城跡
西曲輪 南虎口 東から



2 長比城跡
西曲輪 南虎口 北から



3 長比城跡
西曲輪 東虎口 南東から

1 長比城跡

西曲輪 東虎口 南西から



2 長比城跡

東曲輪 標柱 北西から



3 長比城跡

東曲輪 北虎口 南西から





1 長比城跡
東曲輪 北虎口 東から



2 長比城跡
東曲輪 南虎口 北西から



3 長比城跡
東曲輪 堀切 南から

- 1 長比城跡から
柏原宿を望む 北東から



- 2 須川山砦跡
主郭 南から



- 3 須川山砦跡
石碑 北から





1 須川山磐跡
北虎口 北から



2 須川山磐跡
北虎口 南から



3 須川山磐跡
壺切 西から

1 須川山磐跡
壁壘 北西から



2 須川山磐跡
曲輪 北から



3 須川山磐跡
南虎口 南から



PL.8



1 長比城跡 西曲輪
調査前状況 北から

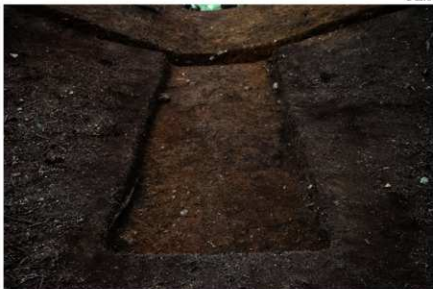


2 長比城跡 西曲輪
第1トレンチ
完掘状況 北から



3 長比城跡 西曲輪
サブトレンチ
北東から

- 1 長比城跡 西曲輪
 第1トレンチ（曲輪部分）
 完掘状況 北から



- 2 長比城跡 西曲輪
 第1トレンチ（虎口部分）
 完掘状況 東から



- 3 長比城跡 西曲輪
 第1トレンチ（虎口部分）
 完掘状況 西から





1 長比城跡 西曲輪
第1トレンチ（虎口部分）
完掘状況 南西から



2 長比城跡 西曲輪
第1トレンチ（通路部分）
完掘状況 北西から



3 長比城跡 西曲輪
第1トレンチ（切岸部分）
完掘状況 南西から

- 1 長比城跡 西曲輪
第1トレンチ（切岸部分）
完掘状況 北西から



- 2 長比城跡 西曲輪
埋め戻し後の状況 北から



- 3 長比城跡 西曲輪
埋め戻し後の状況（切岸）
南西から





1 長比城跡 東曲輪
調査前状況 北から



2 長比城跡 東曲輪
調査前状況 北西から



3 長比城跡 東曲輪
調査前状況 東から

- 1 長比城跡 東曲輪
第2トレンチ
完掘状況 北から



- 2 長比城跡 東曲輪
第2トレンチ
完掘状況 北西から



- 3 長比城跡 東曲輪
第2トレンチ
サブトレンチ 西から





1 長比城跡 東曲輪
第2トレンチ
完掘状況 南から



2 長比城跡 東曲輪
第2トレンチ
完掘状況 南から



3 長比城跡 東曲輪
第2トレンチ
拡張部 北東から

- 1 長比城跡 東曲輪
第2トレンチ
完掘状況 北から



- 2 長比城跡 東曲輪
第2トレンチ
完掘状況 北西から



- 3 長比城跡 東曲輪
第2トレンチ
サブトレンチ 北西から





1 長比城跡 東曲輪
第2トレンチ
完備状況 南西から



2 長比城跡 東曲輪
第3トレンチ
完備状況 東から



3 長比城跡 東曲輪
第3トレンチ
完備状況 西から

- 1 長比城跡
作業風景 南西から



- 2 長比城跡 東曲輪
第2トレンチ
埋戻し後の状況 北から



- 3 長比城跡 東曲輪
第3トレンチ
埋戻し後の状況 北東から





1 須川山砦跡
調査前状況 南から



2 須川山砦跡
調査前状況 北から



3 須川山砦跡
完掘状況 南から

1 須川山砦跡
第4トレンチ
完照状況 南から



2 須川山砦跡
第4トレンチ
完照状況 南西から



3 須川山砦跡
第4トレンチ
北壁断面 南から





1 須川山砦跡
第5トレンチ
完掘状況 南から



2 須川山砦跡
第5トレンチ
完掘状況 南西から



3 須川山砦跡
第6トレンチ
完掘状況 西から

- 1 須川山磐跡
第7トレンチ (土壘)
遺構面検出状況 西から



- 2 須川山磐跡
第7トレンチ (土壘)
遺構面検出状況 北西から



- 3 須川山磐跡
第7トレンチ (土壘)
遺構面検出状況 南東から





1 須川山砦跡
第7トレンチ（土塁）
断ち割り状況 西から



2 須川山砦跡
第7トレンチ（土塁）
断ち割り状況 南西から



3 須川山砦跡
作業風景

- 1 須川山砦跡
第7トレンチ（土壘）
埋戻し状況 西から



- 2 須川山砦跡
第7トレンチ（土壘）
埋戻し後の状況 西から



- 3 須川山砦跡
埋戻し後の状況 南から



二十三 近江國坂田郡志

長比磐

柏原村大字柏原、長久寺の山上にあり。現今野瀬山といふ。古へは其の附近一帯を長比（一作・長鏡・長校）と称せしにより、長比磐と称せり。此の地江濃の境界にして、中山道（中仙道）に沿ひ通行を監視する要衝なるを以て、古くより軍事上の要地として、時々兵馬を屯せり。日本紀壬申乱の條に「惣放精兵衛玉倉部邑」とある玉倉邑は、現在の大字長久寺以西にありし地にして、古來歴史家の論議されつゝある所なり。

（即ち、壬申の乱に高市皇子の陣地たりし「和野野（和野見野）」も長久寺今須の辺といへば、近江方の軍が皇子本陣の前衛なる玉倉部を衝きたるなり。かく上古より戰場として鮮血を染めし地に聳ゆる山丘なれば、其後南北の乱にも碧血の草北を染めしは明なり。元龜元年朝倉景鏡の兵が浅井氏の援兵として此の磐に來り、信長の近江侵入に対抗せしは一乗録に見ゆ。當時信長は浅井氏の將、堀秀村を招降したるを以て、長比の磐は戟に血ぬらずして開退したり。北に接する須川山上にも一磐あり。土人城山と稱す。間道防御の一磐ならん。

二十四 山東書はなし

たけくらべ

近江と美濃の山のたけくらべは古い伝えですが、「右ひだり見て過ぎ行けば近江美濃二つの山ぞたけくらべする」と昔の人も歌によんでいます。

また、近のお寺どうしで字間などの豊かさを話すのを、背をくらべているように見てとつたのが、たけくらべのおこりともいわれています。昔からこのかいわいを要所とし、野瀬山の頂にとりでの跡を残しています。

二十五 続山東書はなし

たけくらべ

「寝物語り」、「たけくらべ」などの伝説をもつこの里には、七堂伽藍のいらかがそびえる真言宗のお寺がありました。これが長久寺です。

お寺は今日の長久寺の村の北側山ふところの一角にあつたのだそうです。昔は樺などの大木が生い茂っていて、昔の街道はこを通つていたといわれます。

近くにあるダイジョゴは、お寺の経塚だとか、大將軍の塚だとかいわれていますが、そこにはいつも大蛇がとぐろをまいているからめつたに近づいてはならないといわれています。

寝物語という所には昔杉の大木があつてその高さは二十メートルあまり、美濃の山とせいくらべをするほどだったということです。そこでこのあたりを長久羅辺と呼んだということで、上古からすでにこのように呼ばれていたと二百五十年ほど前の書物にかかれています。

井村江龍惣之左衛門殿 国友村辻又左衛門殿御兩人江取暖被 仰付候上、双方江御挨拶被下候得共、何分和談難相調候ニ付、又々御慈悲を以本郷村百々伍兵衛殿御指加和談可仕旨、尤先年三郷取暖書等茂有之、旁以御挨拶被下候ニ付、先規之通御被下、右式ヶ所之草山ニおみて双方無申分立会可申候、依之御取暖衆中御連印為取替一札、仍如件

文化十一年戊戌年二月

坂田郡柏原村

庄屋 南部源右衛門

年寄 岩佐忠五郎

組頭惣代 長右衛門

取扱人 三人

長久寺村

御役人衆中

十九 淡海國木圍

柏原村

『滋賀縣中世城郭分布調査報告書』六

柏原氏ノ武士有、其素性ヲ詳ニセズ、右大將家東興征伐ノ時、柏原太郎・同兵衛尉忠康等侍御ノ臣トシテ供奉ス、東鑑ニ出、承久ノ乱ニ弥三郎ト云者アリテ討死ス、記ニ載ス、其後代々相統シテ太守六角家ニ属シ、美濃守資冬等ナリ、記ニ出ス、天文ノ此高島郡香津浦ニテ海中ヨリ太刀一腰ヲ網ニ懸引揚タリ、其銘ニ曰、柏原弥三郎為水所持ス治承四年作スト有之、六角家ニ指上ル、則資冬息時長ニ賜リ家ノ重宝タリ、京極家并浅井家ニ不隨、三代記ニ載ス、柏原跡丸

信長公ニ属シテ本能寺ニテ戦死ス、記ニ出ス、柏原彦右衛門尉ハ岐阜秀信ノ家臣ニテ軍忠アリ、記ニ出ツ、

須川村

往古此所ニ遠藤喜衛門ト云武士居住ス、浅井家三世二度々忠信ヲ尽シ勇ヲフルヒシ事頗ル多シ、記ニ顯ス事明ケシ、平将ヲ自ら討取ルヘキ由大言ヲ咄シ大勇ノ士ナリ、果シテ信長公

二十 淡海邊故録

長比山 元龜元年浅井長政義兵ノ時、美濃長比山ニ当分ノ要害ヲ構テ、朝倉

式部大輔ヲ三千余騎ニテ籠置シ処也

新安尾 此処本ヨリ京極ノ家臣衆在城故ニ、長比ニ持統ケ助ケノ要害也、然処

堀・樋口等信長公ニ從風スルヲ聞テ、早速開キ退クト云ヘリ、

二十一 東山道記

長比・新安と云う古城山右に見ゆる

二十二 伊勢參宮旅日記

一 柏原 志り半、近江國・美濃國境、此所半道程行、美濃と近江の寝物語り、家五六軒有、本宿は少シ行て有、餅名物也、小田信長公の城跡見ゆる

江龍惣左衛門殿
辻又左衛門殿

十七 江龍家文書

一札之事

一、五ヶ年以前巳年三月、於金堂郷宿各方任御挨拶、兩村為取替内濟相調罷婦り、長久寺村庄屋・年寄・組頭四人之もの村方江申聞候処、右為取替一札二而ハ長久寺村方何分納得仕候二付、段々御役所江御願奉申上候得共、御取上ケ不被遊、右村方相納不申候ハ、噯三人之兼江相願申候様被、仰付候二付、右之趣御願申入候処、御聞札之上兩村江御挨拶被下、依之此度又々一札為取替候処左之通

為取替一札之事

野瀬山之内字時雨沢

柏原村分

一、草山三町六反八畝拾歩

長久寺村立会

字時雨沢

長久寺村分

一、草山五町七反三畝拾歩

柏原村立会

右草山之儀二付、寅年以來下草刈取之節及評論、御役所様御苦勞ニ罷成候処、御憐愍を以下濟被、仰付、醒井村江龍惣之左衛門殿、国友村辻又左衛門殿、御兩人江取扱被、仰付候二付、精々双方江被及熟談候得共、何分和談相調不申候故、又候本郷村百々伍兵衛殿御差加、種々御挨拶被下候而熟談之上、在來之通右往還之北野瀬山之内字時雨沢ニおゐて以後申分無之、柏原村惣山字のせ山地藏堂東之方を境、無覆職申合せ立会可申候、依之取扱入連印為取替一札、仍而

如件

文化十突酉年五月

長久寺村 庄屋 鍋吉

年寄 清八

組頭 惣代 辨右衛門

同断 七兵衛

取扱人

本郷村 百々伍兵衛

国友村 辻又左衛門

醒井村 江龍惣之左衛門

是者不用

柏原村

庄屋年寄中

十八 江龍家文書

為取替一札之事

本紙之記 是二而相納申候

字時雨沢

長久寺村分

一、草山五町七反三畝拾歩

柏原村立会

字野瀬山ノ内時雨沢

柏原村分

一、草山三町六反八畝拾歩

長久寺村立会

右草山ニおゐて去ル文化三寅年三月下草刈取之儀二付及評論ニ、御役所様江御願奉申上候処、兩村共被、御召出御吟味之上、御憐愍を以下濟被、仰付、醒

十五 江籠家文書

為取替一札之事

字野瀬山ノ内時雨沢

柏原村分

一、草山三町六反八畝拾歩

長久寺村立会

字時雨沢

長久寺村分

一、草山五町壹反三畝拾歩

柏原村 立会

右之内、字時雨沢之儀ニ付、四ヶ年以前寅年四月以來及争論、柏原村方者往還之南ニ有之由申、長久寺村方者往還之南ニ者無之由申候ニ付、段々、御役所様御苦勞ニ罷成申候處、何分何連共難相分り候ニ付、御憐愍を以醒井村江籠惣左衛門殿、国友村辻又左衛門殿御兩人江取暖被、御付精々相働、双方江被熟談候得共、何分和談相調不申候故、又候本郷村百々伍兵衛殿御差加、種々御挨拶被下候而、双方江熟談之上在来之通ニ而事済仕候、然ル上者往還之北野瀬山之内時雨沢と、同柏原村持惣山と境相立、是迄之通此以後無禮申合せ、申分ノ無之様可致候、依之取暖入連印為取替、仍如件

文化六巳年三月

坂田郡柏原村

庄屋 甚助 印

年寄 孫七郎 印

組合惣代 兵五郎 印

同郡長久寺村

庄屋 鍋吉 印

年寄 清左衛門 印

組頭 善右衛門 印

同断 七兵衛 印

同郡本郷村

百々伍兵衛 印

同郡醒井村

江籠惣左衛門 印

同郡国友村

辻又左衛門 印

右前文之通、四ヶ年以前寅年方柏原村と長久寺村と山論出来仕候而、段々於御役所御苦勞被為成、御憐愍を以私共三人江取暖被、御付候而、精々熟談之上私共奥印仕、双方江証文為取替、内済相調申候、依之寫奉指上候、以上

文化六巳年三月

同郡本郷村

百々伍兵衛 印

同郡醒井村

江籠惣左衛門 印

同郡国友村

辻又左衛門 印

御代官様 戊二月願下ケ不用ニ相成申候

十六 江籠家文書

一札之事

一、柏原村・当村山論一件、此度双方役人共立会、得心之上内済相調、兩村為取替事済仕候ニ付、為取替之通往還之北地蔵堂東之山形見合、境相建可申所、昨夜私共帰村仕、村方へ為取替書之通為申候所、不得心と申もの共御座候而、今日境御建被下候儀者先御延引被成可被下候、此段御頼申上候、以上

文化六巳年三月廿六日

長久寺村 庄屋 鍋吉 印

年寄 清左衛門 印

組頭 善右衛門 印

同 七兵衛 印

百々伍兵衛殿

右之通証文取かへし置申候、柏原方長久寺へ遣候手形之文言も右同前
但、本紙者大帳箱二入置候、以上

十三 江籠聚文書

乍恐以書付奉申上候

一、去春柏原宿分長久寺村立会宇野瀨山之内時雨沢と申八往還方北二有之、長久寺村分柏原宿立会宇時雨沢と申八往還之南二有之由御願被申上、長久寺村方八時雨沢式ヶ所共往還之北二有之候由御願被申上候而、評論出来仕候二付、双方被為召呼御聞札被遊候上、去五月双方江致挨拶、内濟二相成候様取計可仕段被為、仰付、精々相對仕在來之通二而相濟候様申談候処、双方被致得心候二付、右為取替証文案紙被與候様被申聞、別紙之通相認為相見候処、柏原宿方右式ヶ所之時雨沢反歌歩相認候儀ハ不得心ニ被申候得共、段々相談仕候而、右文案之通被致承知候、然ル処長久寺村方八字時雨沢と申所二同所書入候様被申聞候得共、柏原宿江折角相談仕右文案之通迄二得心為致候得者、此上同所字時雨沢と有之候而ハ、柏原宿二不得心ニ御座候間、同所不相認反歌歩計二而被致承知候様、長久寺村江段々相談仕候得共、何分其儀聞入不被申候、此上者如何執計仕候義無御座候、乍恐不得止事御断奉申上候、以上

文化四卯年三月

国友村

辻又左衛門

醒井宿

江籠惣左衛門

御代官様

十四 江籠聚文書

乍恐以書付奉申上候

一、柏原村・長久寺村立会山下草刈取之儀二付、文化三寅年三月及評論申候而、御吟味之上私共江取暖下濟仕候様被、仰付、精々両村江及熟談申候様、六ヶ年以前巳年三月下濟相調為取替一札為仕、右写書奉差上下濟申候、然ル所故障之筋又候長久寺村方申出候間破談二可被成処、猶又御憐愍を以私共取暖被仰付、段々精々挨拶仕候処、漸兩村共此度納得仕候二付、此度双方為取替一札写為致、双方連印を以奉差上候、依之巳年奉差上置候一札御下ヶ被下置候様御願奉申上候

一、柏原村・長久寺村立会山下草刈取之儀二付、文化三寅年三月及評論申候処、御吟味之上私共江取暖下濟仕候様被、仰付、精々両村江及熟談申候而、六ヶ年以前巳年三月下濟相調、為取替一札為致、右写書奉指上相濟申候、然処又候長久寺村方故障筋申出候而、破談二可被成候処、猶又御憐愍を以私共江取暖被仰付、精々挨拶仕候而漸兩村共納得仕、一札為取替和談相調申候間、右写書奉指上申候、依之巳年奉指上候一札御下ヶ被下置候様奉願上候、以上

文化十一甲戌年二月十一日

本郷村 百々伍兵衛

醒井村 江籠惣之左衛門

国友村 辻又左衛門

御代官様

四人ヲコメオキ、濃州ヨリ近江へノ通路ヲサシフサギテゾ置タマフ。

堀方家臣樋口二郎兵衛謀叛之事

信長卿ハ京都ヨリ帰國ノ路次スカラ所々ニテ難ニアフトイエドモ、御運天命ニ助ラルルハ、ガ恙モワラセタマハズ、岐阜ニ帰座マシクテ諸勢ヲシバラクヤサメ給フ。或時木下藤吉郎ヲメシテ宣ヒケルハ、
浅井龍城ヲカマヘ当國ト江北トノサカヒニ要害ヲ多クカマヘマク、シカレバ當國ヨリ切入事ヲヤスクカナヒガタシ、我ツラク思案ヲメグラスニ、長岑軒ニ楯籠ル堀次郎ハイマダ幼少タル間、樋口二郎兵衛方事ハカラヒタルベキト思フナリ、此樋口ハ浅井ガウチニテハ又者成トイヘドモ大剛ノ兵ナリ、此者ヲ何トゾ才覚ヲイタシ味方ニ引入タキト思フナリ、竹中半兵衛尉ト相談ヲトグベシ、此竹中ハ國ヲヘダツトイヘドモ、イニシエハ浅井ニ属セシ者ナリ、ソノ上堀ガ住城間根ト菩提ハ其間近ケレバ、サダメテ樋口トモ其間ムツマシクアルベシ、
(中略)

竹中頼テ両家老人ノ人質等ヲ請取、木下藤吉郎秀吉ノ方ヘ右ノ注進申シケレバ、秀吉ハ竹中ヲ引ツレ信長ノ御前ニ罷出一々次第ヲ申上ラレケレバ、信長卿ハ故等知略不浅トテ喜悅カキリハナカリケリ。頼テ竹中ニ時ノ褒美トシテ御殿一両太刀一振黄金等ヲ給ル。近江ノ樋口・多良兩人竹中ガ本ヘ來、信長ヘ御礼可申上トアリケレバ、則同心シテ秀吉ニ引渡ス。秀吉信長卿ヘ此旨申タマヘバ、頼テ対面有種々ノ御馳走被成、江北ノ城取難ノ地一々御トヒ被成、御惑不料シテ則堀ニハ本領安堵ノ御教書ヲ被下、兩人ノ者共ニハ先時ノ褒美トシテ黄金五十兩ニ太刀ヲ相添給ハリケリ。堀ガ城ヘ信長卿ヨリモ木下藤吉郎ニ弓鉄砲ノ者五十相添ラレ樋口ニソエテ罷置ル。

カクテ長岑軒近所長久・胡安兩城ニ楯コモル越前ヨリノ加勢朝會式部大夫、

堀迎心シテ信長勢ヲ引入ルト思ヒ、浅井ニ一言ノ案内ニモオヨバスシテ三千余騎ヲ引具シ、元龜元年六月八日ノ夜ノ内ニ越前サシテ落ニケリ。浅井樋口ガ次第又ハ越前ノ加勢ノ者共ノ落ケルヲ聞、立腹スル事限ナシ。既二人數ヲ出シ堀ガ居城ヲ可賣ト評議シタマヘ共、信長ヨリ堀ガ加勢ニ秀吉ヲ罷置ケレバ即時ニハ落ベカラズ、城ノ落ザル内ニ信長後卷セラレナバ、取入ル事イカガト思案シテ延引ス。

信長卿江北進発ノ事

去程ニ信長卿物頭共召集メノタマヒケルハ、内々江北浅井父子ノ者ドモヲ可賣ト思案ヲナセ共、國境ノ要害其折所ヲ引請籠ケレバ、タヤスク江北ヘフミ入事カナヒガタクシテ居タル所ニ、木下藤吉郎・竹中半兵衛調略トシテ、堀次郎ガ家臣兩人味方ニ引入ケレバ、付城ノ面々要害ヲ夜ノ内ニ開退ノヨシ、堀ガ居城本江ヨリ注進ス。

九 遍照山文庫所藏資料

浅井長政松尾山を占領す

『関ヶ原町史 資料編』

水祿之比、信長卿御合戦之節、浅井旗下堀次員、濃州長岑軒之三家臣樋口三員兵衛ヲ差置、次員依幼少、樋口執柄タリ、其頃信長公ヨリ秀吉エ仰アリケル故、重治長岑軒ヘ行テ樋口ニ有對面、信長郷ニ属セシム、信長公御惑有テ、時ノ為御褒美、則鐵一領刀一腰黄金等重治ニ被下ケルト也、此刀關ノ元重ナリトモ云々

右長岑軒ト云ハ、不破郡松尾山之事也、古城ノ跡残レリ

六 嶋記録

姉川合戦の事

『温賀集 中世城郭分布調査』六

去程に、元龜元年の春の比、織田信長、浅井下野守久政・同備前守長政無許に及しかば、小谷より美濃口をさへとして、野瀬刈堀次郎（宗朝）・同家子樋口三郎兵衛尉を入置けるか、其比堀へいまた若年なりしか、三郎兵衛か所存にて忍心替し、野瀬の要害へ信長の勢を引入、をの居城かまのほへ引退しかば、刈安を始近辺の城々、悉く明退けり、

従是本書之覺書

綿菴云、加田治介物語ニ野瀬ノ要害ヲ堀与力ニテ罷在シニ、在候シニ、在夜樋口三郎兵衛東へ忍ヒ行、曉堀与力衆へムホンノ段カタリ、扱刈安之在番ノ衆へモ同心敷トミツくニコトハリケレハ、尤同心可申候へ共、小谷ノ妻子無了簡候間、退可申候由ニテ、不浅小谷へ引取候由、治介語リシト也、刈安ハ中嶋日向子息宗左衛門三成ニ奉公ノヨシ、在番ト同名忠右衛門申候、其時、樋口人シテ女子志人ナガシ申候、妙以被申候、樋口ケンヤク也、

七 朝書記

一名越州軍記、式部大輔景鏡江州へ進発之事

『大日本史料』第十編之四

去程ニ、六角承禎軍人アリテ後、伊賀ノ国ニ御座シケルカ、今度越州ニ於テ、信長方ヲ失ヒケル故、江州国中過半承禎ニ属スル間、打出ラルヘシ、然者越州モ加勢アルヘキ由申越サル、條浅井長政モ同事ニ六角方へ合力可有ニヨツテ、同五月十一日、式部大輔（宗朝）大將トシテ、魚住備後守、山崎長門守、福岡石見守、

勝蓮花石京進、溝江河内守此等ヲ始トシテ、都合其勢ニ万騎騎、江州北郡へ進発アリ、不移時日ヲ南ノ郡迄打入、在々所々ヲ放火シテ、六角方ノ火ノ手ヲ相待ル、ト云ヘトモ、更ニ打出ラルヘキ林モ見エサリケリ、又当方ノ勢ハカリニテ南ノ郡ヲ責メ、戦事モサスカナリ、角テ徒ニ日ヲ送りテモ為何、早速二船陣有ヘキ由ノ所、浅井長政申ケルハ、此御逗留中ニ濃州堺目ニ城ヲ拵へ候ヘシトテ、横山ヲ城ニ構テ三田村ヲ置、鎌ノ羽（宗朝）ニ三ノ浦ノ塚越前守ヲ城守ニ居置ケリ、角テ式部大輔濃州垂井、赤坂、其近辺村々ヲ放火シテ、敵寄来リナハ、一合戦セント待懸ラルト云ヘトモ、信長方更ニ打出サル故ニ、六月十五日、景鏡語勢諸共ニ船陣スト云々、

八 浅井三代記

『復刻 浅井三代記』

浅井朝倉ヲ呼出スル不出事付重テ使之事

其後又木村喜内之介ト赤尾兵庫頭ヲ以義景ノ方へ被申ケルハ、信長下着被申候ハマ追付当国ヘミダレ入ベク候条加勢可給、因境ニ要害ヲ拵へ間ケ原面ニテ相サヘ可申ト申遣シケレバ、其時ハ浅井使ノ機尤ナリトヤ思ヒケレバ、朝倉式部大夫三千余騎ニテ小谷へ来タリ、頓テ江州ト美濃国境、長久山町安ニ要害ヲカマヘ、越前勢三千余騎朝倉式部大將ニテ籠ヲカル、同今州口長亭軒ノ要害ヲカマヘ、堀次郎ヲ籠ヲカル。此次郎ハ父遠江守病死シテ次郎当年八歳ナレバ、家老ノ樋口三郎兵衛兼益ト多良右近權コモル。多良モ堀方家臣ナリ。近所本江ノ城ニハ黒田長兵衛尉ヲコメ給フ。右ノ城ノ根城トシテ横山ノ城ニハ、三田村左衛門大輔秀俊・大野木土佐守固定・野村肥後守直元・同兵庫頭直次被等

第一部

一 原本信長記

元龜元年六月二十一日条

『大日本史料』第十編之四

浅井備前越前衆を呼越、たけくらべ、かりやす両所より要害を構、尾谷へ信長御働之路次通相防候、信長以御調略、堀、樋口被成御引付、御忠節可仕之旨御請申候、六月十九日、信長御馬を被出、堀、樋口謀叛之由承、たけくらべ、かりやす取物も不取敢明退、たけくらべに一兩日被成御逗留

二 南庵信長記

佐々木承禎父子野洲郡出張之事

『大日本史料』第十編之四

浅井備前守長政ハ、朝會ガ勢ヲ語ヒ、江州北郡長比、蒯安両所ニ要害ヲ拵ヘタリ、爰ニ堀次郎、同家子樋口三郎兵衛ト云者ハ、江北一ノ剛ノ者也、殊カマガハノ城ヲ抱ヘシカハ、猛威ヲ振テ、其近辺ノ者共風從スト云事ナシ、信長卿イカニモノ、彼ヲ味方ニセハヤト思召ケル処ニ、竹中半兵衛尉モ、彼等兩人ヲ調略シテ、幕下ニ属セン事ヲ欲シ、其謀ヲ測シケルニ、兩人無異儀同心シケル間、則信長卿へ此由申上シカハ、御感不斜シテ、汝ガ忠義不淺トテ、先当座ノ引出物ヲソ給リケル、堀、樋口人質進上申候ハデハ不叶儀ナリトテ、嫡子三郎、樋口ハ息ヲ進ラセケリ、

三 南庵信長記

浅井郡被免向事

『大日本史料』第十編之四

六月十九日、信長卿ハ浅井下野守父子追伐トシテ、近江国北部へ進発シ給フ処ニ、堀次郎、樋口三郎兵衛幕下ニ属シ、偏ニ忠節ヲ勵ス間、越前ヨリノ加勢、浅井カ勢氣ヲ失ヒ、長比、蒯安両所ノ軍勢モ、夜ノ内ニ敗北セシカハ、味方亦氣ヲ得テ、同廿一日、浅井カ居城小谷へ押寄せ、

四 信長公記

元龜元年六月十九日条

『大日本史料』第十編之四

去程、浅井備前、越前衆を呼越、たけくらべ、かりやす両所に要害を構候、信長公以御調略、堀、樋口御忠節可仕旨御請也、六月十九日、御馬を被出、堀、樋口謀叛の由承り、たけくらべ・かりやす取物も不取敢退散也、たけくらべに一兩日被成御逗留、

五 安芸毛利元就宛書

毛利家文書

『大日本史料』第十編之四

一 浅井備前元来少身ニ候間、成敗非物数候処、信長在京中ニ越前衆相語、濃、江堺目之節所を拘、足懸三ヶ所拵、可禦支度候き、去十九日向彼地出馬候、同日敵城右之新所を初、彼是四ヶ所落居候、且得利本望候事、

長比城・須川山砦関連史資料編

凡例

一、本編は、原則として長比城・須川山砦および長比城跡・須川山砦跡、そして両城が所在する野瀬山に関連する史資料を掲載する。

一、各史料には、その概要を示す表題を付けた。

一、刊本の表記を踏襲しつつ常用漢字を基本とし、適宜句読点・並列点を加えた。

異体字・俗字・変体仮名などは、一部を例外として常用漢字・平仮名に改めた。

一、誤字や脱字、当て字、衍字などは推定可能なものは（ ）で傍注し、もとの主を示す場合は、(ママ)とした。

関連史資料調査の方法

長比城・須川山砦の歴史的位置付けや城跡の変遷を明らかにするため、関連する史料や絵図の収集を行った。

長比城・須川山砦が築城された十六世紀の史料については、『山東町史』資料編および『史籍要覧』、『大日本史料』等の先行研究をもとに、当該期の文書や武家の日記、軍記物、記録等から長比城・須川山砦に関する記事抽出した。

十七世紀から幕末までの史料については、当該期の文書や地誌等から長比城跡・須川山砦跡および野瀬山に関する記事抽出するとともに、『江籠家文書』および滋賀大学史料編さん室所蔵『萬留帳』に収録された関連資料の調査も行った。また、絵図類についても調査を行った。

近現代の資料については、当該期に刊行された地誌・郡志等から長比城跡・須川山砦跡および野瀬山に関する記事抽出した。

掲載史資料は二部に分け、第一部には長比城・須川山砦が築城された十六世紀の様子を示す史料を、第二部には十七世紀以降の史資料を掲載した。

参考文献

- 太田浩司「江濃国境「長比城」の基礎的研究」『中井均先生退職記念論集 城郭研究と考古学』、サンライズ出版社、二〇二二年。
- 中川泉三『近江国坂田郡志』(下)、滋賀県坂田郡役所、一九七三年。
- 岐阜県関ヶ原町「関ヶ原町史」資料編一、一九七六年。
- 木村重治『復刻 浅井三代記』(私家版)二〇一〇年。
- 山東昔ばなし編集委員会『山東昔ばなし』、山東史談会、一九七七年。
- 山東昔ばなし編集委員会『続山東昔ばなし』、山東史談会、一九七九年。
- 滋賀県教育委員会『滋賀県中世城郭分布調査報告書 五』、一九八七年。
- 滋賀県教育委員会『滋賀県中世城郭分布調査報告書 六』、一九八九年。
- 滋賀県地方史研究会連絡会『淡海風故録』(近江史料シリーズ 二)、一九六八年。
- 東京大学史料編纂所『大日本史料』(第十編之四)、東京大学出版会、一九六九年。
- 東京美術『中山道分間延絵図 十八』、一九八三年。

報告書抄録

ふりがな	たけくらべじょうあと・すがわやまとりであとそうごうちょうさほうこくしよ							
書名	長比城跡・須川山砦跡総合調査報告書							
副書名								
シリーズ名・番号	米原市埋蔵文化財調査報告書 第5集							
編著者名	石田 雄士(編) 中井 均 水野 和雄 太田 浩司 高田 徹 松原 草太							
編集機関	米原市教育委員会							
発行機関	米原市教育委員会							
所在地	〒521-8501 滋賀県米原市米原1016番地 TEL. 0749-53-5154 FAX 0749-53-5129							
発行年月日	2022年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長比城跡	滋賀県米原市 柏原・長久寺 岐阜県不破郡 関ヶ原町今須	252140	461 -092	35° 21′ 07″	136° 24′ 47″	2021年6月8日 ～8月10日	約50㎡	保存目的
須川山砦跡	滋賀県米原市 須川 岐阜県不破郡 関ヶ原町今須	252140	461 -099	35° 21′ 14″	136° 24′ 38″	2020年7月1日 ～8月11日	約15㎡	保存目的
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
長比城跡	山城	中世	曲輪、土塁、堀切、 塹壕		なし	長比城跡の本質的価値・年代・ 範囲の確認と長比城跡の歴史 的背景を明らかにするための 総合調査		
須川山砦跡	山城	中世	曲輪、土塁、堀切、 塹壕		なし	須川山砦跡の本質的価値・年代・ 範囲の確認と須川山砦跡の 歴史的背景を明らかにするた めの総合調査		

米原市埋蔵文化財調査報告書 第5集

長比城跡・須川山砦跡総合調査報告書

2022年3月25日発行

編集・発行

米原市教育委員会

〒521-8501 滋賀県米原市米原1016番地

TEL. 0749-53-5154 FAX 0749-53-5129

印刷・製本

立木印刷

〒521-0035 滋賀県米原市瀬井487番地1

TEL. 0749-54-2662 FAX 0749-54-2923



Excavation Report of Maibara City No. 5

Takekurabe Castle and Sugawayama Fort Comprehensive Report

2022/03

Maibara City Board of Education